

県道三重新殿線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

上 門 手 遺 跡

2004

大 分 県 教 育 委 員 会

県道三重新殿線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

上 門 手 遺 跡



上門手遺跡空中写真(南から)



上門手遺跡空中写真(西から)

本文目次

第1章	はじめに	1
第2章	遺跡の立地と環境	2
第3章	調査の概要	7
第4章	考察	80

挿図目次

第1図	遺跡の立地と環境(1/30000)	3
第2図	周辺地形図(1/5000)	4
第3図	上門手遺跡遺構配置図(1/500)	5~6
第4図	調査前地形図(1/1000)	7
第5図	遺構配置図挿入図(1/1000)	8
第6図	旧石器時代の表採遺物(1/2)	9
第7図	北東斜面遺構配置図(1/400)	9
第8図	1号掘立柱建物跡(SB1)実測図(1/80)	10
第9図	2号掘立柱建物跡(SB2)実測図(1/80)	11
第10図	3号掘立柱建物跡(SB3)実測図(1/80)	12
第11図	4号掘立柱建物跡(SB4)実測図(1/80)	13
第12図	北東斜面柱穴出土遺物及び古代の表採遺物(1/3)	14
第13図	1号土坑(SK1)実測図(1/30)	14
第14図	1号土坑出土遺物実測図(1/2)	14
第15図	北東斜面中世表採遺物実測図(1/3他)	15
第16図	曲輪1遺構配置図(1/400)	17
第17図	焼土層出土遺物実測図(1/3)	18
第18図	5号掘立柱建物跡(SB5)実測図(1/80)	19
第19図	6号掘立柱建物跡(SB6)実測図(1/80)	20
第20図	7号掘立柱建物跡(SB7)実測図(1/80)	21
第21図	8号掘立柱建物跡(SB8)実測図(1/80)	21
第22図	9号掘立柱建物跡(SB9)実測図(1/80)	22
第23図	10号掘立柱建物跡(SB10)実測図(1/80)	23
第24図	11号掘立柱建物跡(SB11)実測図(1/80)	23
第25図	12号掘立柱建物跡(SB12)実測図(1/80)	24

第26図	13号掘立柱建物跡(SB13)実測図(1/80)	25
第27図	14号掘立柱建物跡(SB14)実測図(1/80)	25
第28図	15・16号掘立柱建物跡(SB15・16)実測図(1/80)	26
第29図	17号掘立柱建物跡(SB17)実測図(1/80)	26
第30図	18号掘立柱建物跡(SB18)実測図(1/80)	27
第31図	19号掘立柱建物跡(SB19)実測図(1/80)	28
第32図	20号掘立柱建物跡(SB20)実測図(1/80)	29
第33図	曲輪1柱穴出土遺物実測図(1/3)	30
第34図	2・3・4号土坑(SK2・3・4)実測図(1/40)	31
第35図	2・4号土坑及び5号土坑出土遺物実測図(1/3)	32
第36図	3号土坑(SK3)出土遺物実測図(1/3)	33
第37図	5号土坑(SK5)実測図(1/30)	33
第38図	1号地下式土坑実測図(1/60)	34
第39図	1号地下式土坑出土遺物実測図①(1/3)	35
第40図	1号地下式土坑出土遺物実測図②(1/3他)	36
第41図	2号地下式土坑実測図(1/60)	37
第42図	3号地下式土坑実測図(1/30)	37
第43図	2・3号地下式土坑出土遺物実測図(1/3他)	38
第44図	1号溝(SD1)遺構実測図(平面図1/200、断面図1/60)	39
第45図	2号溝(SD2)実測図(1/80)	40
第46図	2号溝出土遺物実測図①(1/3)	41
第47図	2号溝出土遺物実測図②(1/3)	42
第48図	a-a'、b-b'地点土層断面実測図(1/80)	43
第49図	c-c'地点土層断面実測図(1/80)	44
第50図	d-d'地点土層断面実測図(1/60)	44
第51図	d-d'地点出土遺物実測図(1/3)	45
第52図	e-e'地点土層断面実測図(1/80)	45
第53図	曲輪1中世表採遺物実測図(1/3)	45
第54図	曲輪2遺構配置図(1/400)	46
第55図	10号土坑(SK10)実測図(1/30)	47
第56図	10号土坑(SK10)出土遺物実測図(1/3)	47
第57図	f-f'地点土層断面実測図(1/80)	48
第58図	g-g'地点土層断面実測図(1/80)	48
第59図	h-h'地点土層断面実測図(1/80)	48

第60図	i - i' 地点土層断面実測図(1/60)	49
第61図	虎口遺構配置図(1/400)	49
第62図	j - j' 地点土層断面実測図(1/60)	50
第63図	k - k' 地点土層断面実測図(1/60)	50
第64図	l - l' 地点土層断面実測図(1/60)	51
第65図	m - m' 地点土層断面実測図(1/60)	51
第66図	n - n' 地点土層断面実測図(1/60)	52
第67図	虎口中世表採遺物実測図(1/3)	53
第68図	1号近世墓実測図(1/40)ならびに出土遺物実測図(1/3)	56
第69図	2号近世墓実測図(1/40)	56
第70図	6号土坑(SK6)実測図(1/30)	57
第71図	6号土坑(SK6)出土遺物実測図(1/3)	58
第72図	8号土坑(SK8)実測図(1/30)	59
第73図	8号土坑出土遺物実測図(1/3)	59
第74図	9号土坑(SK9)実測図(1/40)	60
第75図	9号土坑出土遺物実測図(1/3)	60
第76図	10号土坑(SK10)実測図(1/40)	61
第77図	3号溝(SD3)実測図(1/80)	62
第78図	SD3及びSD5出土遺物実測図(1/3)	63
第79図	曲輪2周辺表採遺物実測図(1/3)	65
第80図	曲輪2周辺表採遺物実測図(1/3)	66
第81図	曲輪2周辺表採遺物実測図(1/3)	67
第82図	曲輪2周辺表採遺物実測図(1/3)	68
第83図	曲輪2周辺表採遺物実測図(1/3)	69
第84図	曲輪2周辺表採遺物実測図(1/3)	70
第85図	曲輪2周辺表採遺物実測図(1/3)	71
第86図	虎口周辺表採遺物実測図(1/3)	72
第87図	虎口周辺表採遺物実測図(1/3)	73
第88図	北東斜面表採遺物実測図(1/3他)	74
第89図	堀切北側の平場表採遺物実測図(1/3)	75
第90図	上門手遺跡中世末段階想定復元図(1/1000)	82
第91図	上門手遺跡遺構変遷図	83
第92図	上門手遺跡調査前縄張図(1/1000)	84

表 目 次

第 1 表	中世掘立柱建物跡の計測表	53
第 2 表	中世遺物観察表(1)	54
第 3 表	中世遺物観察表(2)	55
第 4 表	近世以後遺物観察表 (1)	76
第 5 表	" (2)	77
第 6 表	" (3)	78
第 7 表	" (4)	79

写 真 図 版 目 次

図版 1	北東斜面全景 (真上)	89
	曲輪 1 全 景 (真上)	89
	曲輪 2 全 景 (真上)	89
図版 2	虎口全 景 (真上)	90
	曲輪 1 土塁 a-a' 地点土層 (西から)	90
	曲輪 1 土塁 a-a' 地点土層 (東から)	90
図版 3	1号地下式土坑前壁遺物出土状況	91
	1号地下式土坑前壁	91
	虎口土塁 n-n' 地点土層 (北から)	91
図版 4	虎口土塁 m-m' 地点土層 (北から)	92
	SK 10 出土状況 (北から)	92
	上門手遺跡全景 (真上から)	92
図版 5	調査前現況遠景 (北東から)	93
	調査前現況遠景 (西から)	93
	千歳村中心部をみる (曲輪 1 から)	93
図版 6	北東斜面 3・4号建物跡付近 (東から)	94
	SK 1 完掘状況 (北から)	94
	曲輪 1 調査前現況 (北西から)	94
図版 7	曲輪 1 調査前現況 (南西から)	95
	曲輪 1 調査前現況 (西から)	95
	1号地下式土坑付近検出状況 (南から)	95

図版 8	SD 1 付近検出状況 (南から).....	96
	SD 2 付近検出状況 (北から).....	96
	1号地下式土坑検出状況.....	96
図版 9	1号地下式土坑検出状況.....	97
	2号地下式土坑検出状況 (東から).....	97
	SD 2 出土状況 (北西から).....	97
図版10	2・3・4号土坑検出状況 (西から).....	98
	2・3・4号土坑遺物出土状況.....	98
	曲輪1 土塁 b - b' 地点土層 (東から).....	98
図版11	曲輪2 検出状況 (西から).....	99
	曲輪2 北西部 堀切からの通路 (南から).....	99
	曲輪2 北西部 堀切からの通路 (北から).....	99
図版12	曲輪5 土塁 g - g' 地点土層 (東から).....	100
	曲輪1・2・3 検出状況 (南東から).....	100
	曲輪2 土塁 f - f' 地点土層 (南から).....	100
図版13	曲輪1 土塁 d - d' 地点土層 (南から).....	101
	虎口登り道 (西から).....	101
	虎口 (西側土塁上から).....	101
図版14	虎口 (曲輪4・北から).....	102
	虎口土塁 c - c' 地点土層 (北から).....	102
	虎口とSD 5 検出状況 (北から).....	102
図版15	虎口土塁 1 - 1' 地点土層 (南西から).....	103
	曲輪2 西側切岸状況 (南から).....	103
	堀切状況 (西から).....	103
図版16	作業風景.....	104
	2001.08.13 現地説明会風景.....	104
	2001.08.13 現地説明会風景.....	104
図版17	出土遺物写真.....	105
図版18	出土遺物写真.....	106

第1章 はじめに

1 調査に至る経過

本遺跡は、大分県大野郡千歳村大字下山字上門手^{か も ん で}に所在する。

遺跡のすぐ北側には大野川の支流である茜川が東に流れる。現在当地は水田として利用されており、まとまった平野部の少ない千歳村にあっては、村内の中核的水田地帯となっている。また、茜川の北側には奥文語の幹線道路である国道57号が走る。近年、国道57号と平行するように中九州道路が計画されており、当地付近にはそのインターが造られる予定である。今回の発掘の原因となった県道三重新殿線は、この中九州道路と近年急速な発展をとげ大野郡の中心的な町となりつつある三重町とを結ぶものである。農業を基幹産業とする千歳村では、水田よりも広大な火山灰台地が広がる畑地を利用した生産が盛んである。これら畑地では葉たばこや野菜栽培が盛んであるが、これらの営農をさらに効率的なものにするため、昭和50年頃より畑地帯総合整備事業が実施されてきた。これらの事業実施に伴い多くの遺跡が確認され、主に旧石器時代から古墳時代にかけての遺跡が調査された。このような畑地帯総合整備事業が実施された後でも、葉たばこ栽培の畑地では、表土の黒色土を黄褐色土と入れ替えるいわゆる「天地返し」が実施されてきた。また、水田部では圃場整備事業が行われ、狭小な水田を広い圃場に変えている。以上のように、千歳村では農業振興に全力を注ぎ、村の発展を図ってきたところではあるが、全国的な趨勢である過疎化の波は食い止めることができず今日を迎えている。大分県全体としても同様な問題を抱えることから、県はその一つの打開策として県内の交通体系整備を最重点課題としてあげ、九州横断道や東九州自動車道などの高速道路やそれにつながる道路の整備に力を入れている。

毎年、大分県教育委員会では、埋蔵文化財の保護と工事の円滑な実施を目的として、県土木建築部所管の全事業について埋蔵文化財の有無を事前に調査している。本事業を含め、平成13年度県土木建築部実施予定事業の一括協議が土木建築部企画検査室から県教育委員会にあった。県教育委員会では、一括協議のあった県土木建築部実施予定事業すべてについて事前の分布調査を行い、A周知遺跡の地区、B遺跡の可能性が高く試掘調査が必要な地区、C遺跡の可能性があり立会調査が必要な地区、D遺跡の可能性が低く工事着手に問題のない地区に分け、回答した。県道三重新殿線予定地内では、試掘調査を経て、平成12年に本遺跡と茜川との中間の水田地帯で大園遺跡を発掘調査した。その際、大園遺跡の南側丘陵に土塁が存在することが踏査によって判明した。協議の結果、三重土木事務所の依頼をうけ、県教育委員会文化課が平成13年3月から本調査を始め、同年10月末に終了した。なお平成13年8月13日に、現地説明会を行った。

2 調査団の構成

上門手遺跡調査団の構成は、以下のとおりである。

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	田中 恒治	大分県教育委員会教育長	
	岩尾 康晴	大分県教育庁文化課長	
	麻生 祐治	同	参事兼課長補佐
調査員	清水 宗昭	同	参事兼課長補佐
	高橋 信武	同	主 幹
	五十川雄也	同	嘱 託（現在、大分市教育委員会）

第2章 遺跡の立地と環境

上門手遺跡の立地する大分県大野郡千歳村は、県内最大河川である大野川の中流域に位置している。大野川は、主に祖母・傾山系及び久住山系を源とし、東流しながら大分平野に抜け、別府湾に注いでいる。特に大野川の中上流域は、阿蘇熔結凝灰岩の堆積による火山灰台地が発達しているのが地理的特徴である。千歳村内では、発達した火山灰台地の間を北から柴北川、茜川、大野川などの河川が狭小な沖積平野を造り出している。また火山灰台地上には旧石器時代から近現代に至るまで、濃い密度で人の生活痕跡を辿ることができる。これは火山灰台地上が、この地域の生活にとって、重要な要素であったろう。

千歳村周辺の歴史的環境は、特に火山灰台地とその間に造られた沖積地の地理的特徴をうまく利用しながら、各時代において生活の痕跡がたどれる。

旧石器時代は、大野川中上流域の火山灰台地上に展開するものが多い。大野町郡山南遺跡では、陥し穴遺構を数基検出している。千歳村内では原田遺跡、大迫遺跡また鹿道原台地などで展開する。

縄文時代は、早期から大野川中上流域の台地上で発展している。特に千歳村内においては、高添台地で早期及び後期を中心に展開しており、土偶なども出土している。

弥生時代に至っても、火山灰台地上を拠点として生活している。千歳村内では、前期に高添台地上で、壺棺墓、甕棺墓などの墓地が形成される。前・中期の集落は今まで確認できているものは少ないが、後期段階になると高添台地や鹿道原台地を中心に爆発的に集落が広がる。このことは、大野川中・上流域をみても言えそうなことである。特に鹿道原遺跡は県下最大集落で、竪穴遺構が200基を越え、掘立柱建物跡(倉庫)も多く確認されている。このような弥生時代後期から展開する集落は、古墳時代前期までつづくものが多い。なぜ、弥生時代後期・末を中心にこの大野川流域で集落が一気に広がるかは不明である。社会システムの変容に伴うものだろうか。

古墳時代前期は台地上に弥生時代からの集落が引き続き営まれるものが多いようであるが、中期以降は一変して、今までの調査では台地上にはあまり確認できていない。生活の拠点が台地上から沖積地への移動によるものであろうか。このことは県内各地の状況と類似する。

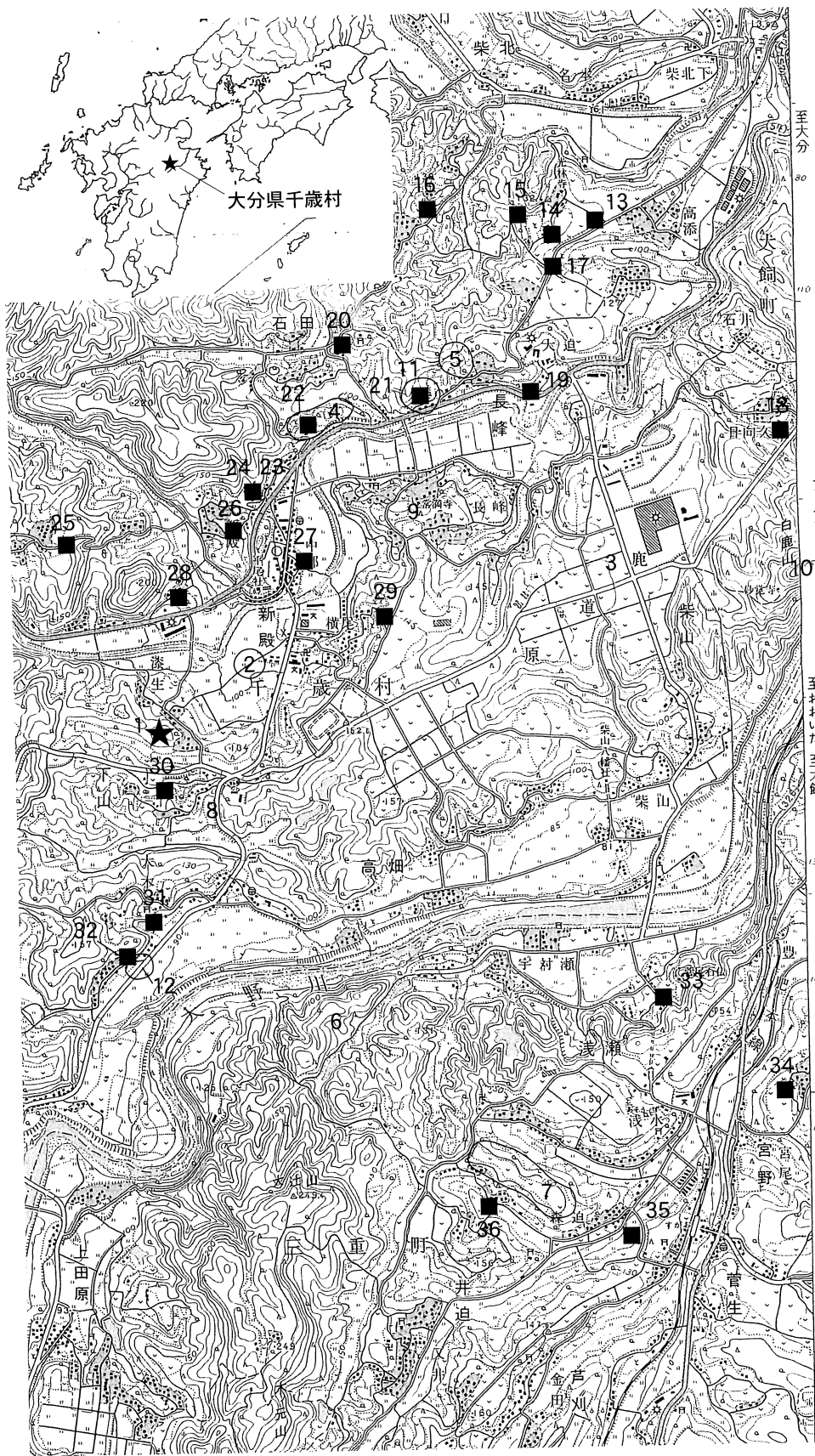
墳墓に関しては、村内において、横穴墓などが確認されているのみである。

歴史時代においては、古代はほとんど知られず、中世においてもその調査例は数少ない。高添遺跡石五道原地区で地下式横穴を検出している。また五郎丸山城の部分的発掘調査などがある。しかし、千歳村内では、石幢などの石造物が数多く残る土地でもあり、特に14世紀半ばから増加傾向にある様で、古いものには、1340年宝塔、1382年宝篋印塔、1385年宝篋印塔などが残る。16世紀半ばにも集中して宝塔・五輪塔などが建立されるようである。山城に関しては、前述した五郎丸山城をはじめ、大迫の城跡などが確認でき、大野川を挟んで南(三重町)には、森迫氏の館跡とされる惣田遺跡、また菅尾磨崖仏などがある。

平成12年度に調査された大園遺跡においては、12世紀後半段階の掘立柱建物群や屋敷墓になるであろう土壇墓が確認され、この時期の下層農民層をはるかに上回るクラスの屋敷と考えられている。しかし、中世の調査事例は千歳村内では少なく、中世の地域史を解明していくためには、もう少し調査事例が増えるのを待たねばならないであろう。

註1 千歳村教育委員会 2001 『鹿道原遺跡』

註2 大分県教育委員会 2001 『大園遺跡』



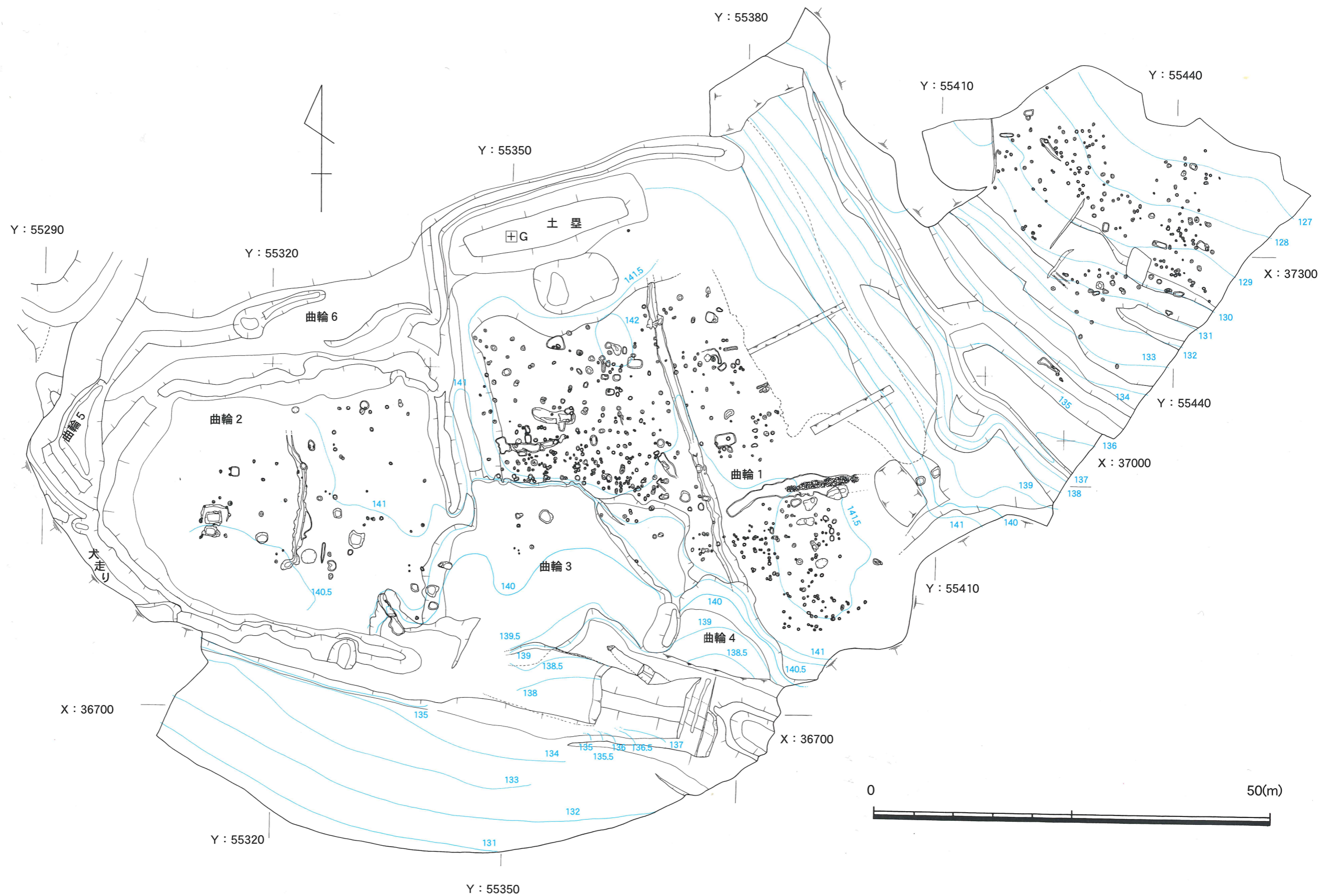
1. 上門手遺跡
2. 大園遺跡
3. 鹿道原遺跡
4. 五郎丸山城
5. 大迫の城跡
6. 宇対瀬城
7. 森迫氏館跡
8. 庵の平遺跡
9. ジョウフク寺跡
10. 妙覚寺
11. 長慶寺跡
12. 法積寺跡
- 犬 13. 高添の石幢(1561)
- 銅 14. 石五道の石幢(1349)...
15. 高添上の板碑(1537)
16. 久保上の宝篋印塔
17. 石五道の石幢(1526)
18. 日向久保の宝篋印塔(1382)
19. 大迫磨崖仏
20. 楠の宝塔
21. 長慶寺跡地八仏傘地(1460)
22. 五郎丸の板碑(1492~1501)
23. 大乘寺境内宝篋塔(1385)
24. 大乘寺の石造五輪塔
25. 上ノ久保の宝塔
26. 岡の笠塔婆(1561)
27. 平尾社の石造(1340)
28. 宝塔など(1561)
29. 平尾社鳥居(1509)
30. 漆生の笠塔婆
31. 大木の宝塔
32. 上津留の石幢
33. 菅生磨崖仏
34. 脇清水の石幢
35. 間所の石幢
36. 森迫の石幢

第1図 遺跡の立地と環境 (1/30000) (国土地理院「田中」1/25000使用)



アミかけは三重新殿線路線図
 (大分県教委2001「大園遺跡」より抜粋)

第2図 周辺地形図 (1/5000)



第3図 上門手遺跡遺構配置図 (1/500)

第3章 調査の概要

1. 上門手遺跡の位置と調査区(第1・2図)

上門手遺跡は大分県大野郡千歳村大字下山に所在する。

当該地は、千歳村内を流れる茜川とその南を東流する大野川に挟まれた東西に長く延びる火山灰台地から分岐した丘陵の先端部に位置している。標高は約140mで、比高差約40m弱ほどの台地上に立地する。台地の北側には、茜川による沖積地が広がり、現在の千歳村の中心地となっている。また台地の南側は谷と丘陵が連続しながら、1kmほどで大野川に到達する。上門手遺跡から東側を望む眺めは良好である。

県道三重新殿線は、茜川と直交するように、河岸段丘を横断するかたちで、三重町まで延びる予定である。平成12年度にはその開発に伴って、上門手遺跡の北側にある大園遺跡の調査が実施された。大園遺跡は12世紀後半を中心とする掘立柱建物跡や土壙墓が確認され、この地域の中世初期の状況を踏まえる上では、重要な遺跡であろう。



第4図 調査前地形図 (1/1000)

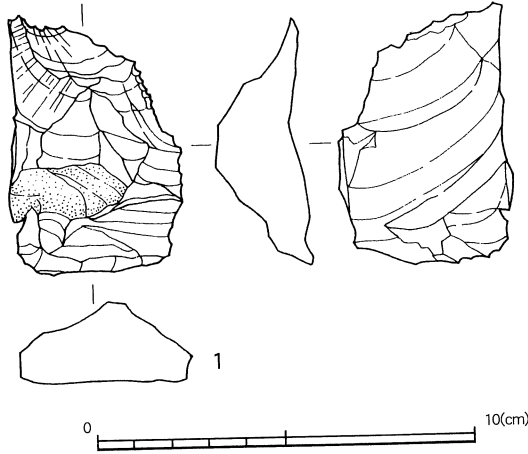


第5図 遺構配置図挿入図 (1/1000)

上門手遺跡は、火山灰台地上に立地する遺跡である。上門手遺跡の調査対象面積は、約10,000㎡である。調査区は、丘陵先端部に北東から南西方向に向けて設定した。ちょうど調査区の中央部が一番標高が高い場所となる。上門手遺跡は、旧石器時代の表採遺物をはじめ、調査区の北東側では古代から中世前期の遺構が検出された。また丘陵上の頂部には、中世・戦国時代の遺構、特に土塁や溝、土坑、地下式土坑、掘立柱建物跡、虎口などを検出した。周辺部に土塁と切岸を構築し、また丘陵が延びる調査区の北西には大きな堀切があり、折り曲げながら入る虎口の状況などから、中世後半～末期(16世紀代)には、この場所が有力者の館城であったと推測できる。ただ当地は、昭和前半期まで人の生活があったようで、中世の遺構は、近世以後の土地の造成により部分的に大きく破壊されていた。近世以降の遺構・遺物は、土坑や土壇墓などが検出でき、さらに調査区内は、近世から昭和にかけて多くの陶磁器類が表採できた。中世以降もずっと人の生活があったことがわかる。

ここで中世の段階の遺構を調査区の曲輪1(主郭か)、そのすぐ南西側を曲輪2、曲輪1南の出入り口を「虎口」として解釈する。

2. 旧石器時代の調査



第6図 旧石器時代の表採遺物 (1/2)

(1) 表採遺物 (第3・6図)

旧石器時代の遺物は、調査中央の曲輪1北側で遺構検出時の表採遺物として見つかった。1は、流紋岩製のもので、自然面は残っていない。片面に多くの剥離作業が観察でき、部分的に細かい調整の剥離を行っている。

3. 古代及び中世の調査

ここでは、古代及び中世の調査を述べていくが、面積が広いので、調査区を大きく4箇所に分けて説明する。1つは調査区中央部曲輪1から北東にかけて急斜面と緩斜面がつづく「北東斜面」、丘陵上の「曲輪1」、「曲輪2」、「虎口」に設定して説明していく。



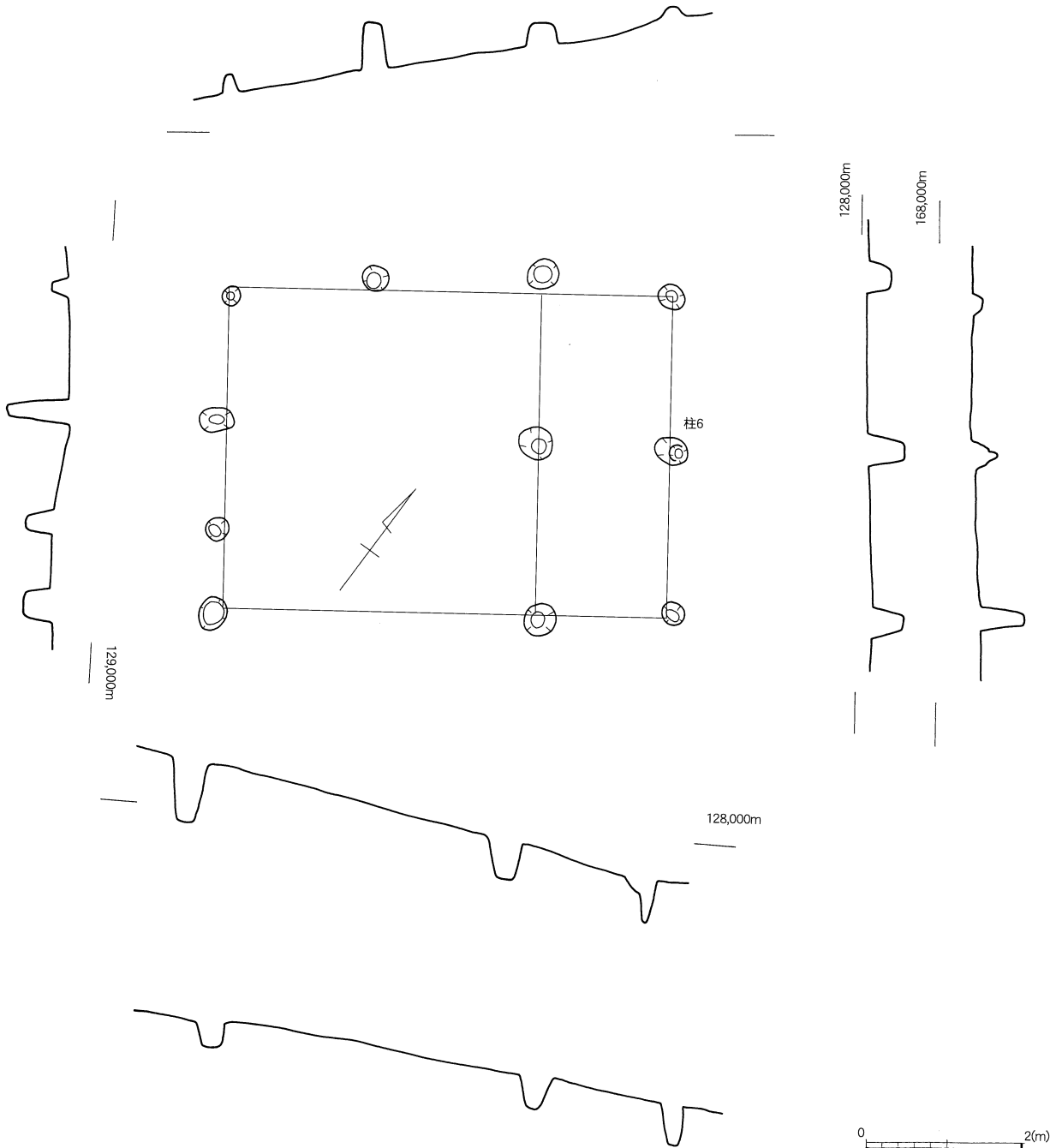
第7図 北東斜面遺構配置図 (1/400)

(1) 北東斜面の調査 (第7図)

北東斜面の調査では、緩斜面で、掘立柱建物跡4棟、柱穴列、土壇墓などが検出できた。柱穴からは、古代の遺物と中世の遺物が確認できた。柱穴が検出できた標高は130m弱くらいである。また急斜面には削平段がいくつか見られるが、遺構検出の折も近世の遺物が出土したため、近世以後の削平と推測できる。

(a) 掘立柱建物跡 (第7図)

北東斜面では、掘立柱建物跡は4棟確認できた。また柱穴列もいくつか確認できた。柵列状かもしくは掘立柱建物跡の一部であろう。



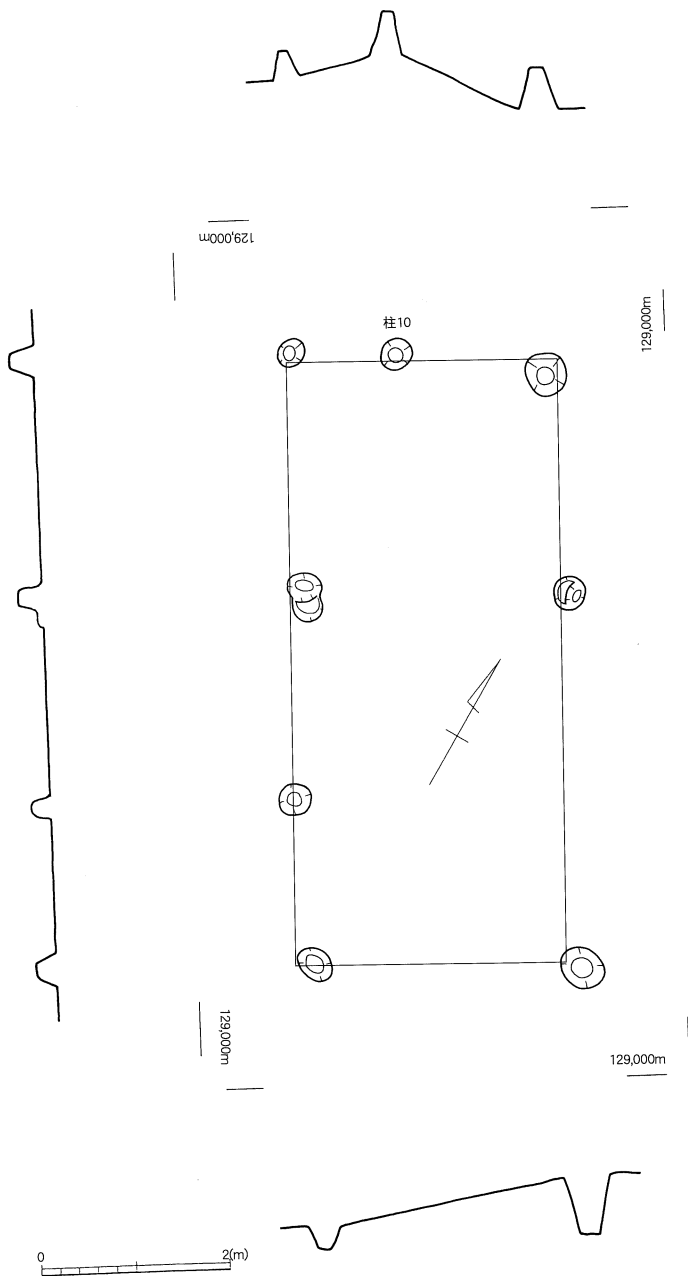
第8図 1号掘立柱建物跡 (SB1) 実測図 (1/80)

1号掘立柱建物跡 (S B 1) (第8図)

1号掘立柱建物跡は、2号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴の切合関係はない。1号建物跡は、北東方向に長軸をもつもので、東側に庇を有する。

1号建物跡の桁行は3間、西側梁行3間、東側梁行2間を有し、方位はN - 55° - Eである。桁行間が東側の1間が他よりも若干短い。身舎面積は15.60㎡である。

出土遺物は柱6から土器片が出土したが図示できるものではない。



2号掘立柱建物跡 (S B 2)

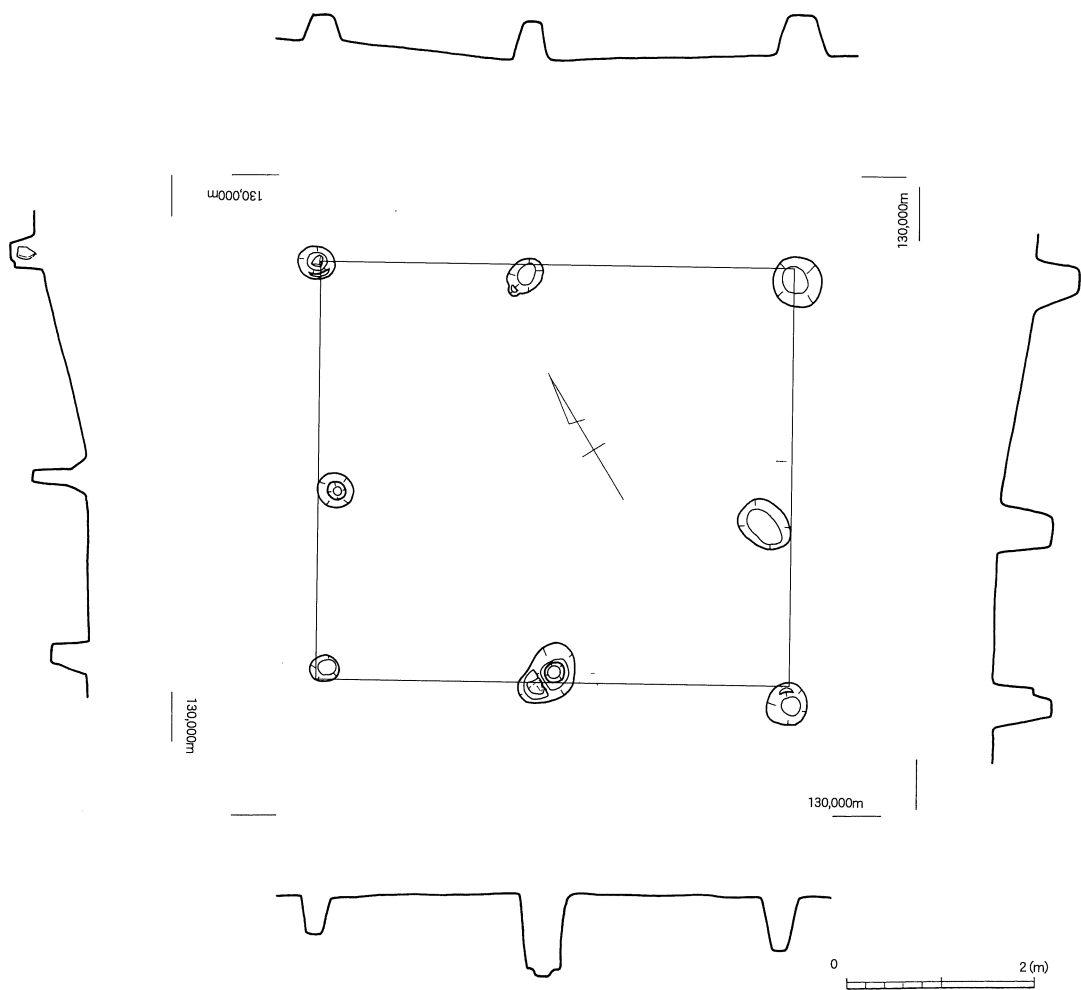
(第9図)

2号掘立柱建物跡は、1号掘立柱建物跡と重複するが、その新旧関係はわからない。

2号建物跡は長軸が南北軸からやや西側に振る。N 30° Wである。庇などは持たず、桁行は3間、梁行は2間である。東側桁行と南側梁行が柱をそれぞれ1つ欠く。身舎面積は17.92㎡である。

出土遺物は柱10から土器片が出土したが、図示できるものではない。

第9図 2号掘立柱建物跡 (S B 2) 実測図 (1/80)



第10図 3号掘立柱建物跡 (S B 3) 実測図 (1/80)

3号掘立柱建物跡 (S B 3) (第9図)

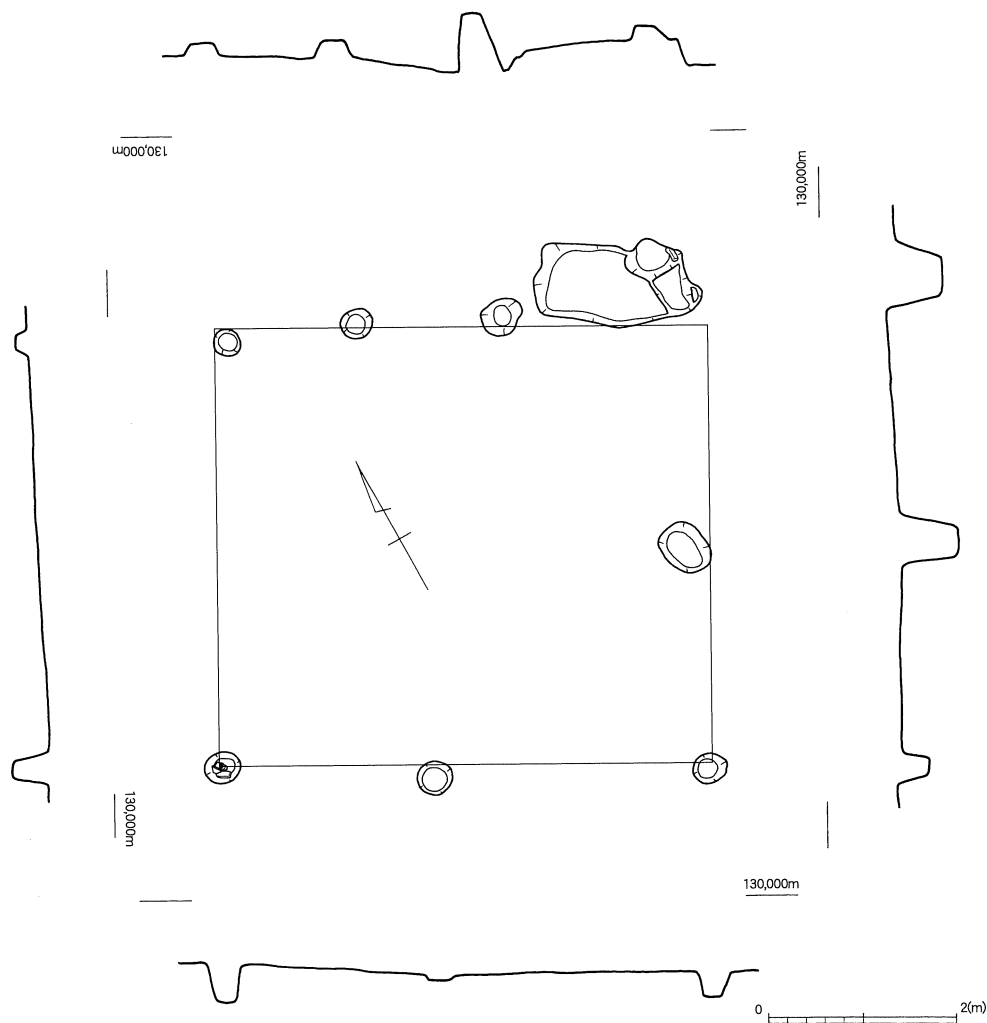
3号掘立柱建物跡は、4号掘立柱建物跡とほぼ同規模で重複しており、1・2号掘立柱建物跡の東に位置している。柱穴の切合関係において、4号建物跡を切っている。また西側に隣接するかたちで、1号土壌がある。3号建物跡はほぼ方形の形態であるが、若干ではあるが東西方向に長い。建物規模は梁行2間、桁行2間である。身舎面積は19.36㎡である。建物方位はN45° Eである。4号建物跡と建物規模、方位ともに類似することから、大差のない時期差で関連がありそうである。また柱穴列1・2・3が柵列状のものだとすると関連がありそうである。

出土遺物は柱穴から土器片と陶磁器片が出土しているが図示できるものではない。

4号掘立柱建物跡 (S B 4) (第10図)

4号掘立柱建物跡は、3号掘立柱建物跡とほぼ同規模で重複し、1・2号掘立柱建物跡の東に位置する。柱穴の切合関係によって、3号建物よりは古い。またすぐ西側に1号土壌が近接する。4号建物跡はほぼ方形の形態をとり、若干ではあるが東西方向に長い。建物規模は梁行2間、桁行3間である。ただし、西側行の真中の柱穴と桁行の南側の柱穴を欠いている。身舎面積は24㎡である。建物方位はN63° 西で、前述したように3号掘立柱建物跡と関係がありそうである。また柱穴列1・2・3の方位を考えると関連がありそうである。

出土遺物はない。



第11図 4号掘立柱建物跡 (SB 4) 実測図 (1/80)

柱穴列 (第7図)

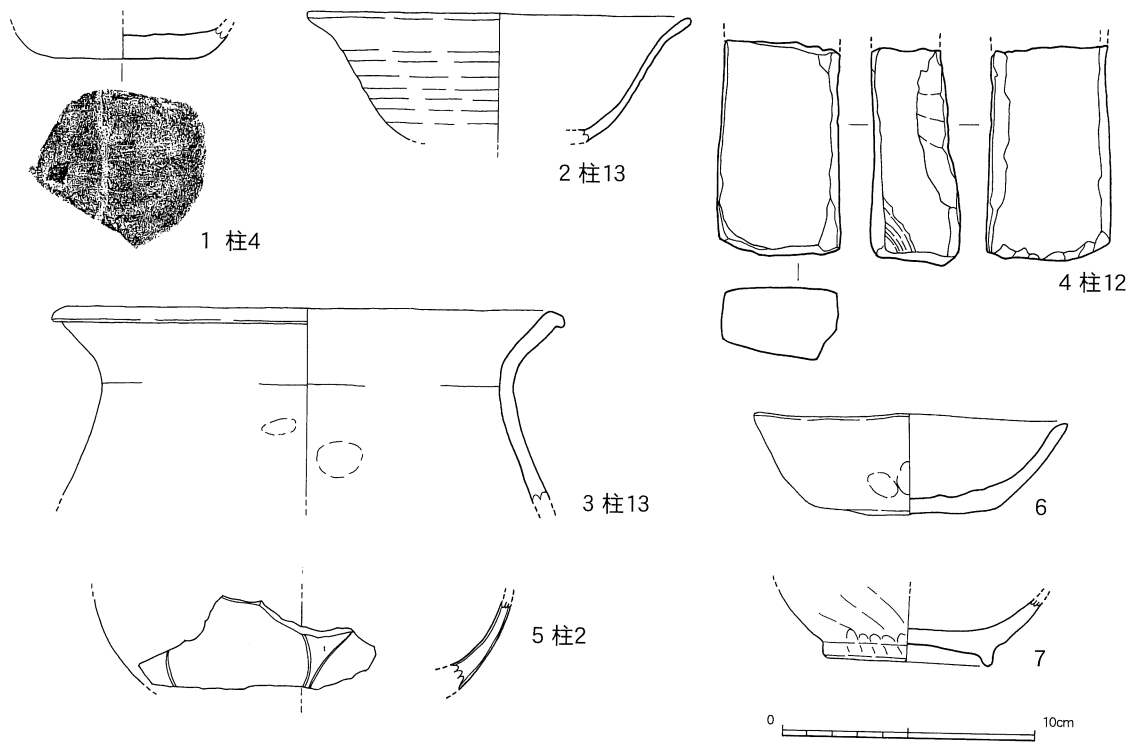
北東斜面で、柱穴列は3基確認できた。緩斜面なため柱穴列3などは掘立柱建物跡になる可能性も考えられる。北東斜面の中で、この柱穴列と平行関係にあるのは、3・4号掘立柱建物跡である。出土遺物は、柱穴列1からは中国龍泉窯系鎬蓮弁の青磁碗が出土した。このことから柱穴列1は13世紀くらいの所産であろう。柱穴列3からは、古代の所産と思われる9世紀代の土師器碗や甕が出土した。よって柱穴列3に限っては古代の可能性はある。

また3・4号掘立柱建物跡は柱穴列1と同等の埋土であり、それを柵列と考えた場合、中世前期の所産が考えられる。

出土遺物 (第12図)

北東斜面の柱穴から出土した遺物を図示する。

1は柱4からの出土で、底部ヘラ切りの土師器である。2と3は柱13からの出土遺物で、2は土師器碗である。口縁部がやや外反する。3は口縁部が「く」の字状に湾曲する甕である。4は柱12からの出土で、砥石である。両面とも使用痕跡が認められる。5は柱2からの出土で、中国龍泉窯青磁碗で、外面に鎬蓮弁文を施す。6は本調査前の試掘段階での出土遺物で、古代のものである。また7は曲輪2での表採遺物で、高台付土師器碗である。

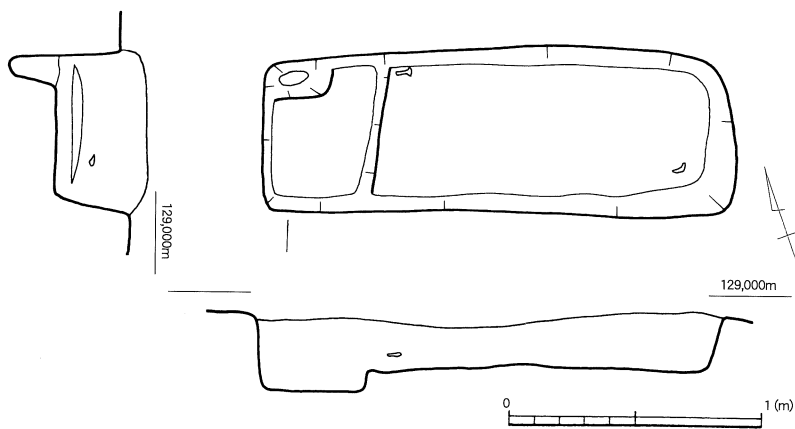


第12図 北東斜面柱穴出土遺物及び古代の表採遺物 (1/3)

(b) 土坑

北東斜面では1基の土坑が確認できた。

1号土坑 (SK 1) (第13図)

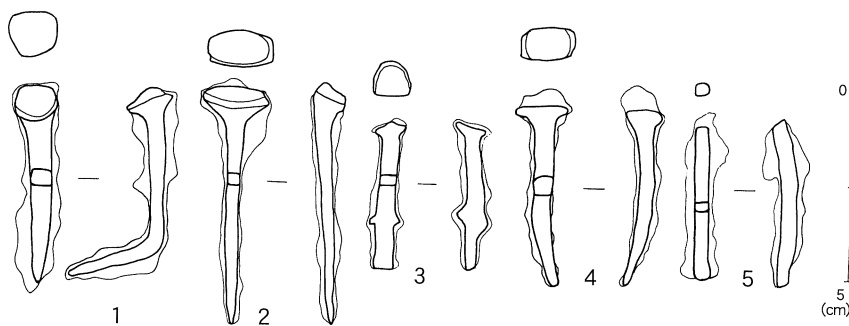


第13図 1号土坑(SK 1)実測図 (1/30)

1号土坑は3・4号掘立柱建物跡の西側に隣接する状況で確認できた。他の遺構との切合関係はない。平面形態は長方形を呈する。東西方向に軸をもち、主軸方位はN70°Wである。規模は長軸1.9m、短軸0.65mである。深さは0.2~0.3mである。出土遺物は鉄釘が出土したため、この遺構はその形状も加味して考えて、木棺墓であった可能性が考えられる。

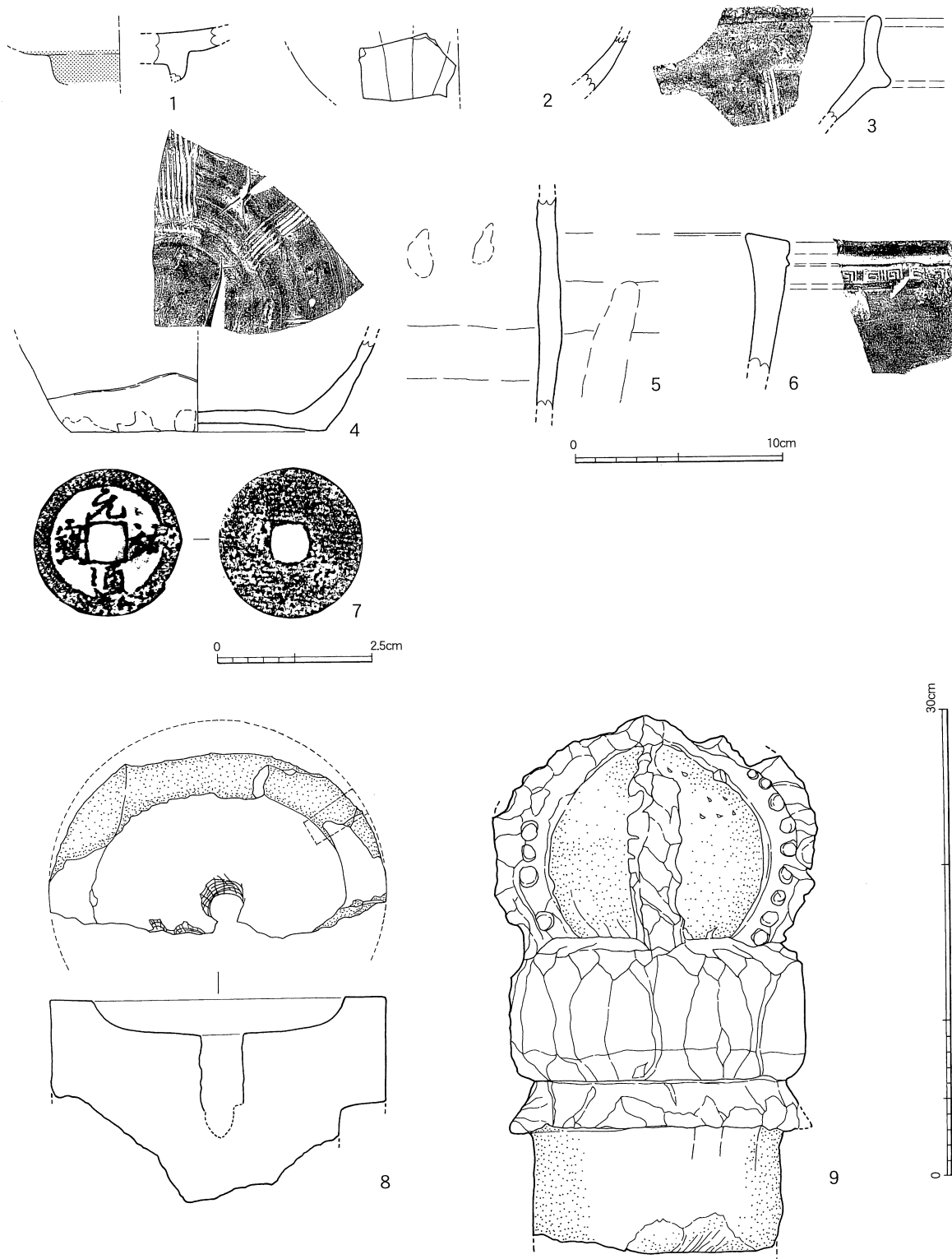
出土遺物 (第14図)

は、鉄釘が5本のみ出土した。1は長さ5.5cmを計り、重さ11.2gである。下部が屈曲している。2は長さ6.5cmで、重さ7.3gである。3は長さ4cmで、重さ4.4gである。4は長さ



第14図 1号土坑出土遺物実測図 (1/2)

5.2cmで重さ6.6gである。下部が少し屈曲する。5は長さ5.3cmで、重さ8.4gである。



第15図 北東斜面 中世表採遺物実測図 (1~6は1/3、7は1/1、8・9は1/4)

(c)表採遺物 (第15図)

北東斜面ではいくつかの中世の遺物が表採できた。

1は中国龍泉窯青磁碗の底部である。2は中国龍泉窯青磁碗で、外面に鎬蓮弁文を施しているようである。3・4は備前焼の播鉢で、3は口縁部、4は底部であり、摺り目が確認できる。5は備前焼で胴部である。6は土製の火鉢で、外面に2条の突帯とその間に雷文を施す。7は銭貨で、「元祐通寶」である。

8・9は石製品である。8は石臼である。9は宝塔の上部火焰宝珠であろう。

(2)曲輪1の調査 (第16図)

曲輪1は、設定した調査区のほぼ中央にあたり、丘陵の最高所となるところである。曲輪1の平面積はおおよそ4500㎡弱である。曲輪1の南には進入路となる虎口があり、また西側には隣接していたであろう附属施設の曲輪2がある。しかし、曲輪1は近世以降の改変をかなり受けており、主郭北側にある大きな穴は、粘土質の土取りをした痕跡である。また土塁の多くもかなり削平を受けていると見てよいだろう。

検出遺構は掘立柱建物跡が16棟、溝2条、地下式土坑3基、土坑、土塁などである。特に2号溝は人頭大ほどの石を一部に集中的に入れている。2条の溝は曲輪1を3つの空間に分割している状況である(同時存在したかどうかは不明)。柱穴群は1号溝の西側と1号溝と2号溝に挟まれた空間(曲輪1の南東部)に集中してみられた。土坑は4基である。また曲輪1の東から北にかけて一連に土塁を巡らしていることが判明した。また曲輪1南東部の溝に囲まれた空間には、掘立柱建物跡と地下式土坑2基確認できた。地下式土坑は他にもう1基、1号溝に切られる状況で、1号溝底部から検出できた。曲輪1を重機で表土剥ぎした時に、曲輪1平面積の50%ほどに焼土をかなり多く含んだ薄い層が堆積していた。

曲輪1と曲輪2の間には、幅のある溝状になっている個所がある。d-d'地点の土層観察より後世の削平の可能性が高い。また曲輪1の南には一段低い場所(曲輪3)があるが、ここでは中世のピットはまったく見られない。近世の遺物が散乱していた。その状況から近世の削平を受けている可能性が高いと考える。また、曲輪1の土塁下からは遺構は検出できなかった。

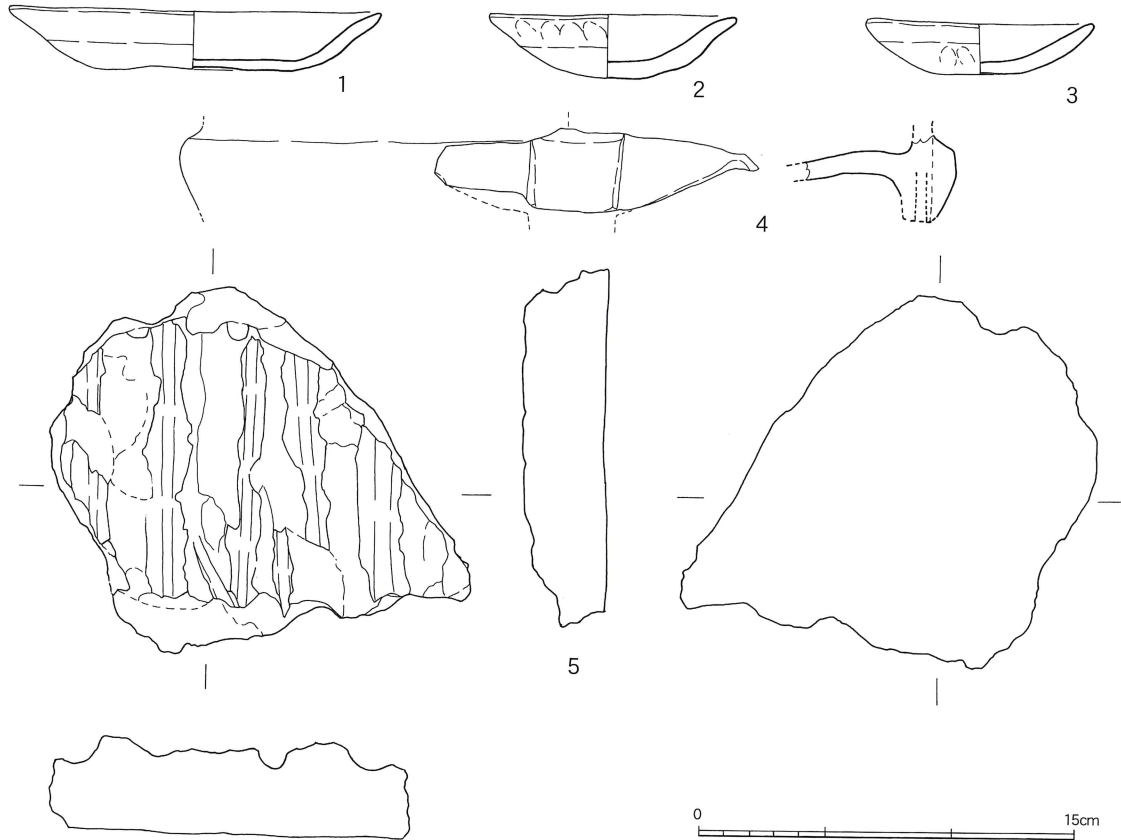
(a)焼土層 (第16図)

焼土層は曲輪1のほぼ半分くらいを占める割合で焼土層下で検出できる遺構をパックするように覆っていた。状況から判断して、中世の土門手遺跡の廃絶に深く関係がありそうである。

焼土層中からは、少量の出土遺物があり、図示できるものを報告する。

焼土層 出土遺物 (第17図)

1～3は非口クロ土師器皿であり、いわゆる京都系土師器と呼ばれるものである。1は口径14.6cm、高さ2.3cmである。2は口径9.7cm、高さ2.5cmであり、やや小ぶりである。口縁部外面に少々強いナデを施し、そこにユビオサエで調整する。3もやや小ぶりのものである。口径9.0cm、高さ2.0cmである。外面にユビオサエの痕跡が確認できる。しかしどれも内面のナデアゲ痕跡などは確認できなかった。4は、瓦質の火鉢で、脚部であろう。脚のつく個所には外面を少し突出したふうに製作している。5は、掘立柱建物の壁土であろう。外面はナデられてフラットな面を有し、内面は竹と思われる痕跡が残されている。2次焼成を受けている。



第17図 焼土層出土遺物実測図 (1/3)

(b) 掘立柱建物跡

曲輪1の調査では、掘立柱建物跡は16棟検出できた。掘立柱建物跡の軸をみると、北西軸、南北軸、東西軸の3群に分割できる。柱穴の切合関係から、東西・南北軸の建物のほうが、北西に軸をもつものよりも新しいことがわかった。これにより、掘立柱建物跡は2時期から3時期に分けられるであろう。また1×1間の掘立柱建物跡も3棟確認できた。これらの建物はすべて曲輪1の北東側、掘立柱建物跡が集中するところよりはむしろ離れた個所に位置し、土塁際もしくは眺望の良好なところに建てられている。櫓跡の施設の可能性が考えられる。またすべての建物跡の軸が1号溝と平行関係にないという状況である。

5号掘立柱建物跡 (SB5) (第18図)

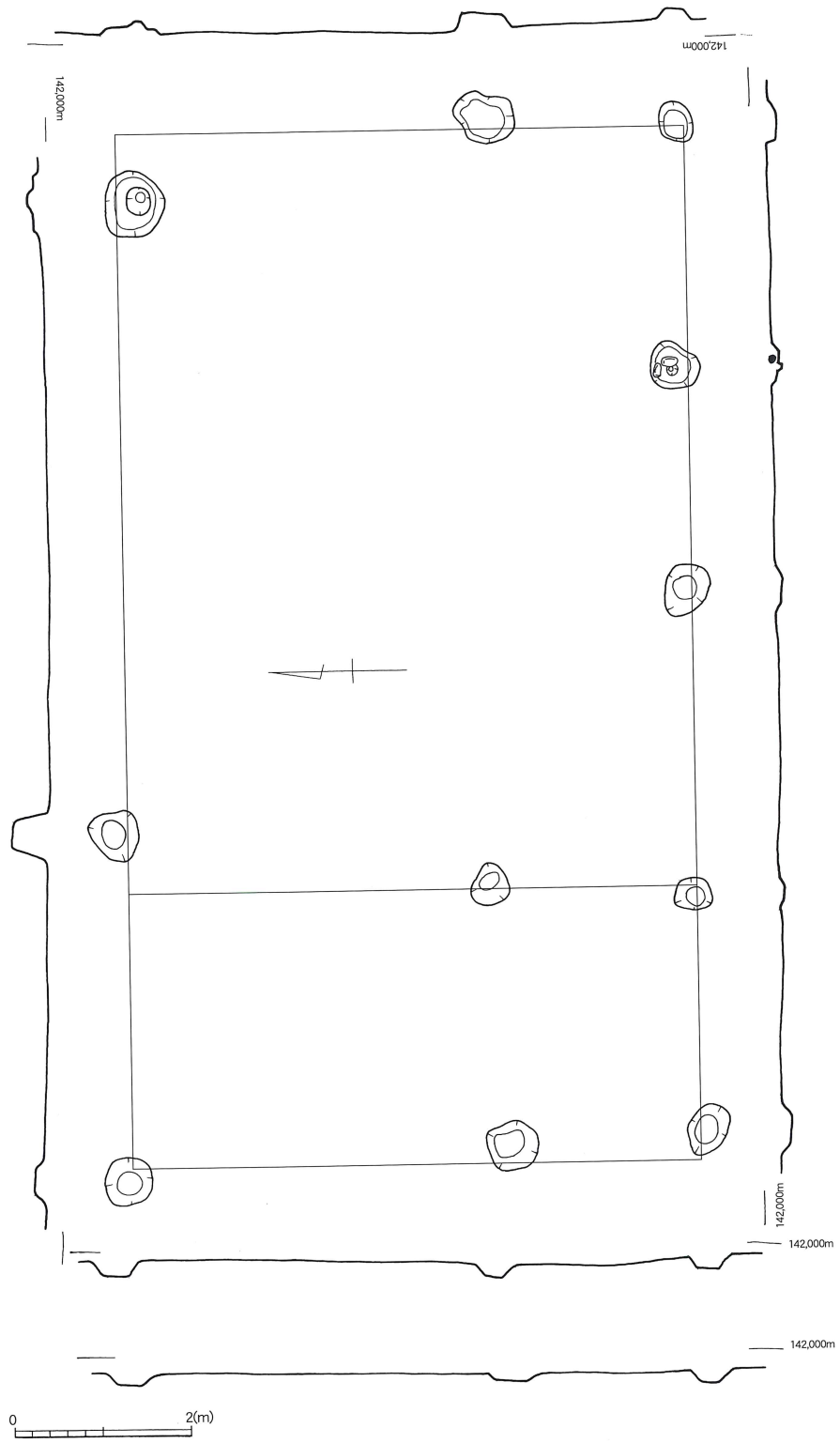
5号掘立柱建物跡は1号溝の西側にあり、6号掘立柱建物跡と重複する。5号建物は東西方向に長軸をもつもので、梁行2間、桁行4間の規模を有する。西側に庇がつく。建物方位はN-0° Eである。柱穴の配置は北側の桁行の柱穴を東から2つめ、3つめを欠く。また梁行の柱穴の間隔が南側の1間分が半分ほど短い。建物規模は身舎面積で54.6㎡であり、曲輪1の掘立柱建物跡のなかでは最大の面積である。

柱穴からの出土遺物はない。

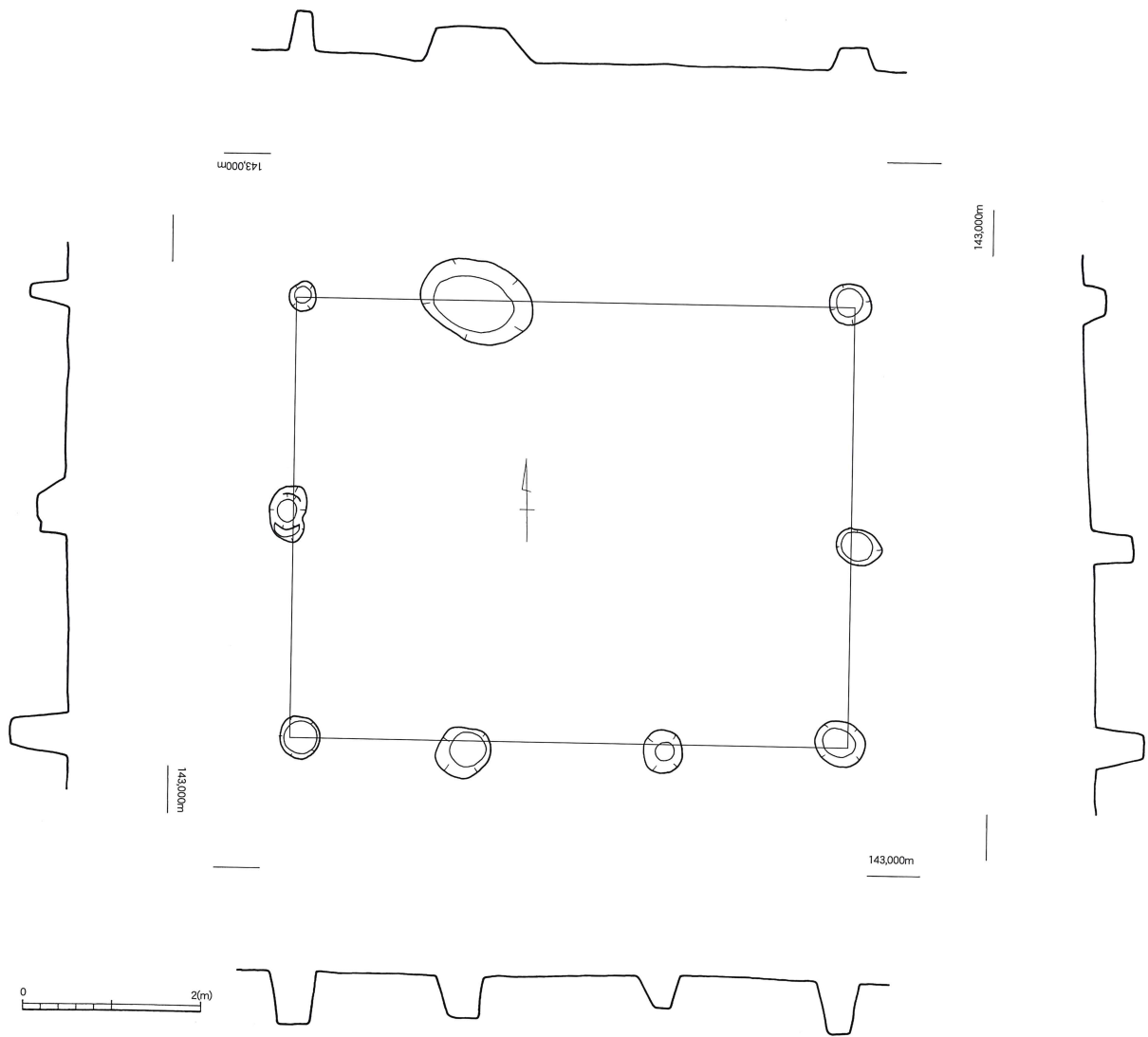
6号掘立柱建物跡 (SB6) (第19図)

6号掘立柱建物跡は、1号溝の西側にあたり、5号掘立柱建物跡と重複する。6号建物は5号建物と同じく、東西方向に長軸をもつ。建物規模は梁行2間、桁行3間である。建物方位はN90° Eである。柱穴の配置は北側の桁行のラインで東側から2つめの柱穴を欠く。建物規模は身舎面積で、31.0㎡を測る。

出土遺物はなかった。



第18図 5号掘立柱建物跡 (SB5) 実測図 (1/80)



第19図 6号掘立柱建物跡 (SB6) 実測図 (1/80)

7号掘立柱建物跡 (SB7) (第20図)

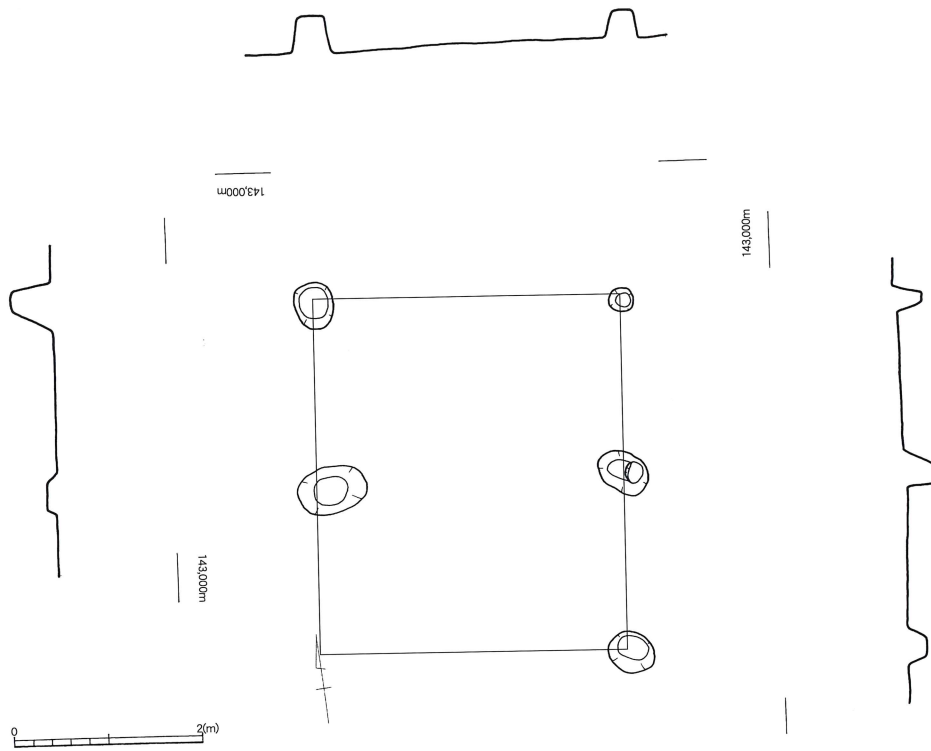
7号掘立柱建物跡は6号掘立柱建物跡の南に近接し、9・13号掘立柱建物跡と重複する。7号建物跡は南北方向に長軸をもち、梁行1間、桁行2間である。建物方位は $N6^{\circ} E$ である。西側の桁行ラインで南側から1つめの柱穴を欠く。建物規模は身舎面積で $12.8m^2$ である。

出土遺物はなかった。

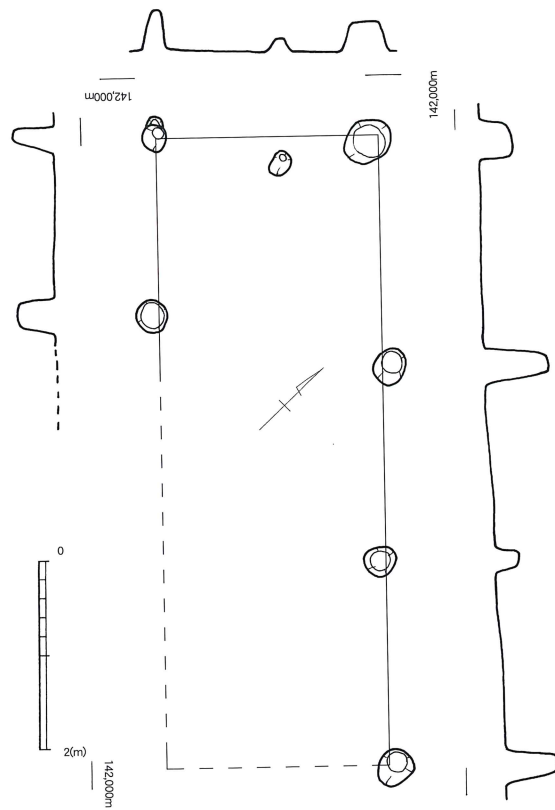
8号掘立柱建物跡 (SB8) (第21図)

8号掘立柱建物跡は、1号溝の西側で、7号掘立柱建物跡の南に位置する。12号掘立柱建物跡と重複する。8号建物跡のすぐ西側は、一段低くなる。8号掘立柱建物跡は北西方向に軸をもち、同じく東側に近接する10号掘立柱建物跡も同軸で、18号掘立柱建物跡、少し軸がズレるが19号掘立柱建物跡とも桁行を同一方向にもち、関連がありそうである。8号建物跡は梁行1間、桁行3間である。建物跡方位は $N45^{\circ} W$ である。建物規模は身舎面積で、 $16.3m^2$ である。

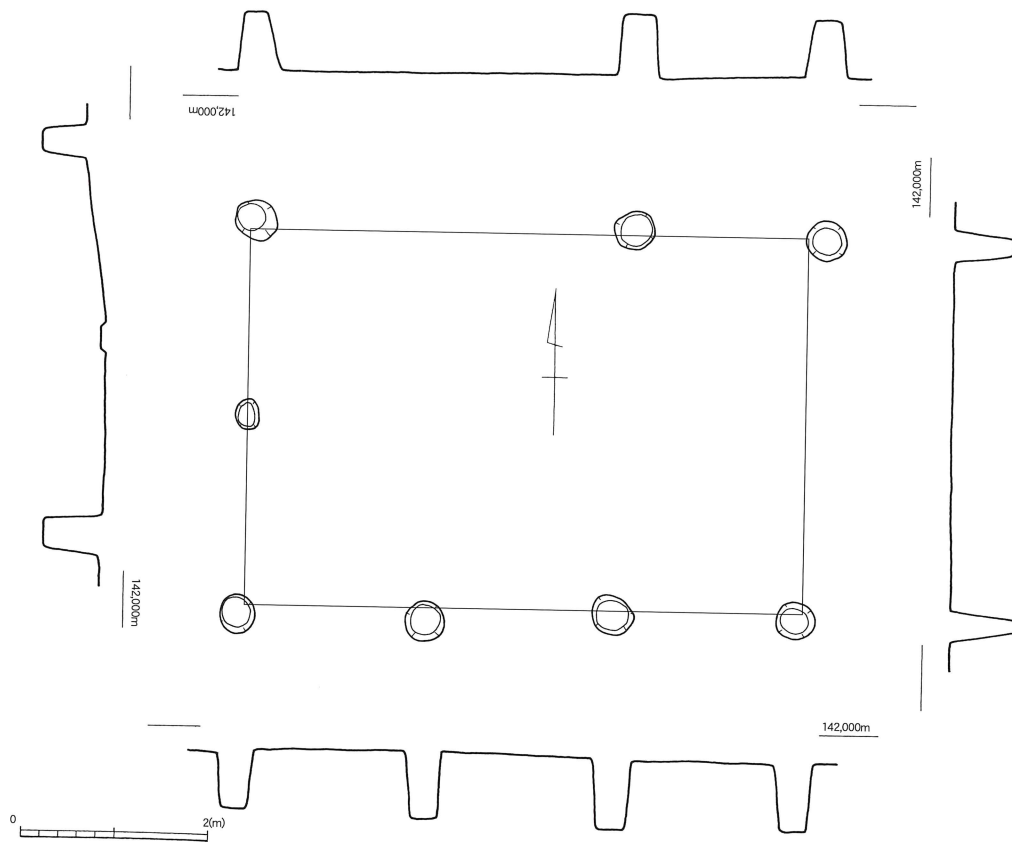
出土遺物はなかった。



第20图 7号掘立柱建物跡 (SB7) 実測図 (1/80)



第21图 8号掘立柱建物跡 (SB8) 実測図 (1/80)



第22図 9号掘立柱建物跡 (SB9) 実測図 (1/80)

9号掘立柱建物跡 (SB9) (第22図)

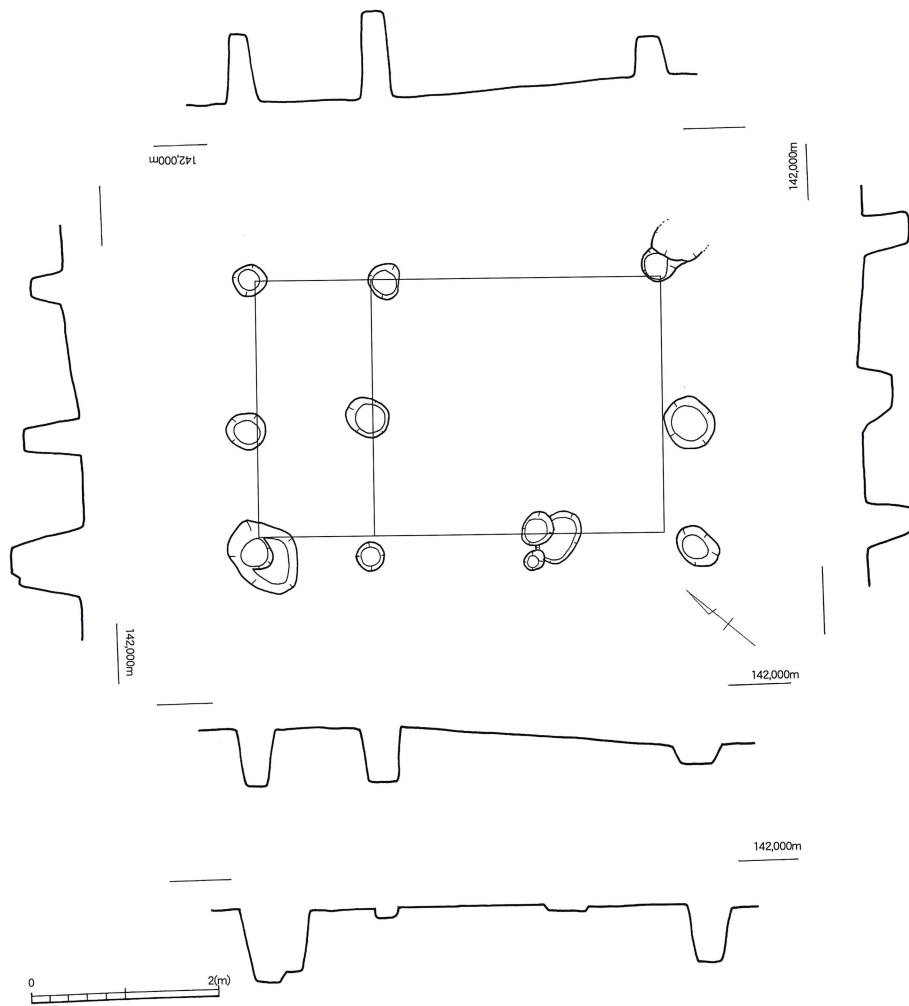
9号掘立柱建物跡は1号溝の西側にあたり、6号掘立柱建物跡の南に位置する。また7・8・13号掘立柱建物跡と重複する。9号掘立柱建物跡は、東西方向に軸をもつもので、梁行2間、桁行3間を有し、建物方位はN90°Eである。身舎面積は24.0㎡である。また桁行の北ラインの西から2番目の柱穴を欠く。さらに梁行の東ラインで、北から2番目の柱穴を欠いている。

出土遺物はない。

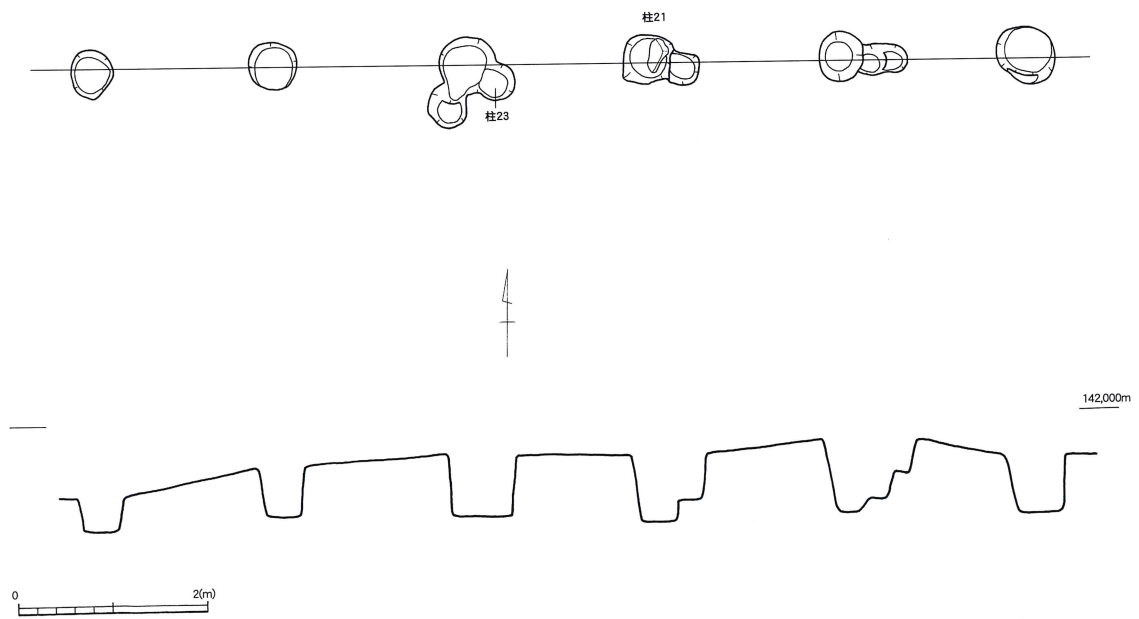
10号掘立柱建物跡 (SB10) (第23図)

10号掘立柱建物跡は、1号溝の西側にあたり、8号掘立柱建物跡の東に隣接する。重複建物はない。10号掘立柱建物跡は北西に長軸をもつものである。この軸をもつものは、8号・10号・18号・19号掘立柱建物跡で、関連が指摘できる。規模は梁行2間、桁行3間である。西に庇がつく。身舎面積は12.32㎡である。建物方位はN38°Wである。また桁行の東側のラインは南から2番目の柱穴を欠く。また桁行の北側から1間目の庇の間隔は狭い。

出土遺物はない。



第23图 10号掘立柱建物跡 (SB10) 実測図 (1/80)

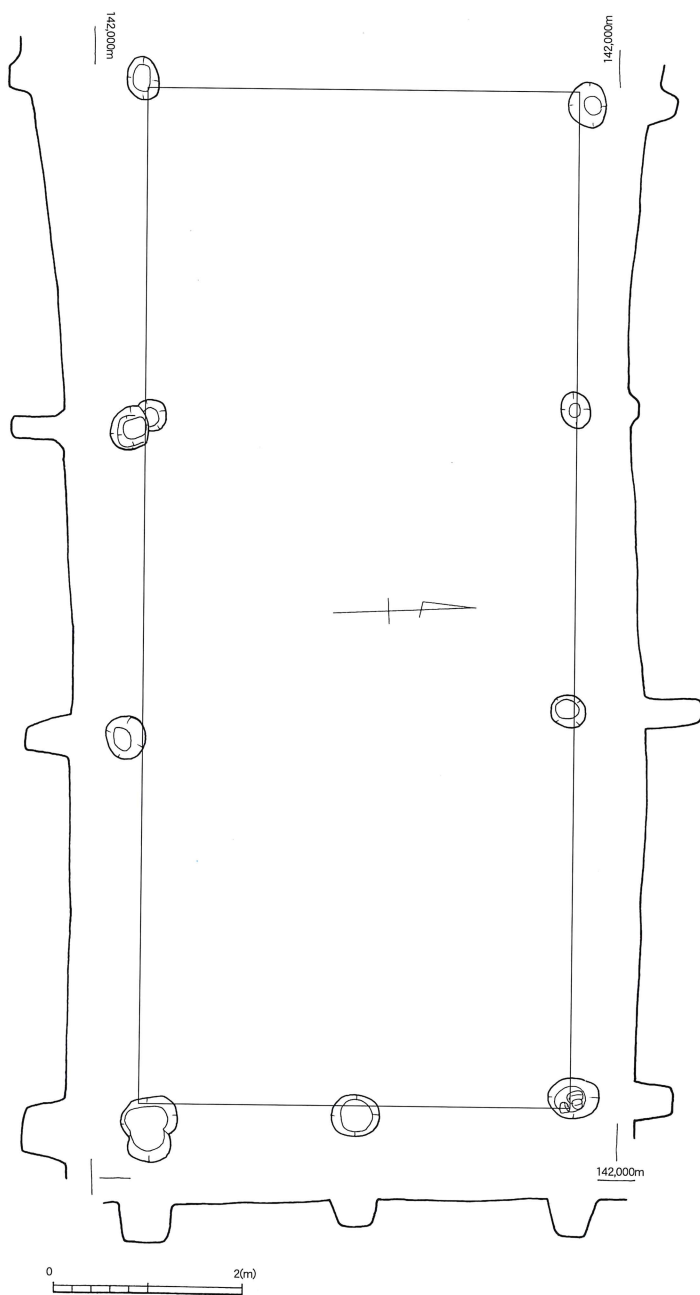


第24图 11号掘立柱建物跡 (SB11) 実測図 (1/80)

11号掘立柱建物跡 (SB11) (第24図)

11号掘立柱建物跡は、1号溝よりも西側に位置し、12号掘立柱建物跡の南、8号掘立柱建物跡の西にあたる。重複する遺構はない。11号建物はすぐ南に一段低くなる場所(曲輪3)の落ち際に並んでいる。そのため、この柱穴列は柵列と考えることができるが、曲輪3には中世の遺構が存在せず、近世の遺物が多いため、近世以後に削平を受けている可能性が考えられ、掘立柱建物跡の一部と考えることもできる。またこの11号建物跡の柱穴は他の掘立柱建物跡のなかでも深く、規模も大きい。さらにいくつかの柱跡からは京都系土師器がほぼ完形で出土した。よって、南側に展開する建物跡の一部である可能性のほうが柵列状遺構よりも高いと思われる。

出土遺物は柱21から京都系土師器が出土した。状況から抜き取り跡の祭祀的行為と思われる。



12号掘立柱建物跡 (SB12) (第25図)

12号掘立柱建物跡は1号溝の西側にあたり、5号掘立柱建物跡の南、11号掘立柱建物跡の北側にあたる。13・14号建物跡を切る。2・3・4号土坑と重複する。12号建物は梁行2間、桁行3間である。梁行の西ラインで、北から2番目の柱穴を欠く。建物は南北方向に長軸をもつ。建物方位はN3°Wである。身舎面積は49.68㎡である。

出土遺物はない。

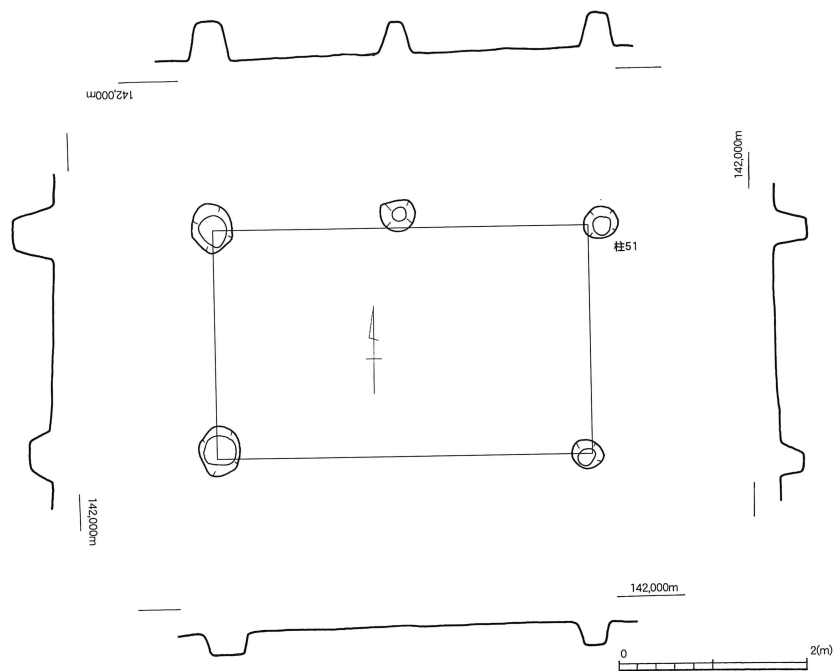
13号掘立柱建物跡 (SB13) (第26図)

13号掘立柱建物跡は、1号溝の西側に位置し、6号建物跡の南、8号建物跡の北にあたる。また7・9・12号掘立柱建物跡と重複し、12号建物跡に切られる。

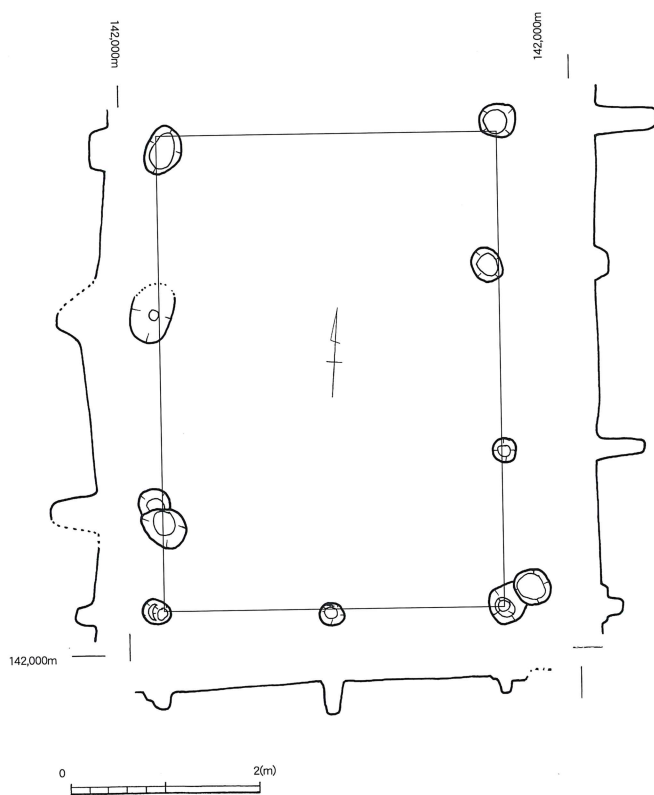
13号掘立柱建物跡は、梁行1間、桁行2間である。桁行の北側ラインで東から2つめの柱穴を欠く。建物跡は東西方向に長軸をもち、建物方位はN90°Wである。身舎面積は9.6㎡である。曲輪1の掘立柱建物跡の中では小型である。

出土遺物は、柱51から備前焼播鉢・京都系土師器などが出土した。第33図の4・8・9である。

第25図 12号掘立柱建物跡 (SB12) 実測図 (1/80)



第26図 13号掘立柱建物跡(S B13)実測図 (1/80)

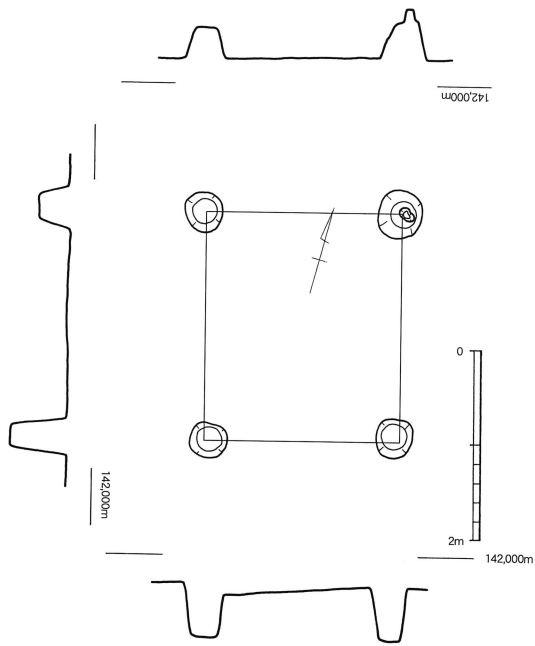


14号掘立柱建物跡(S B14) (第27図)

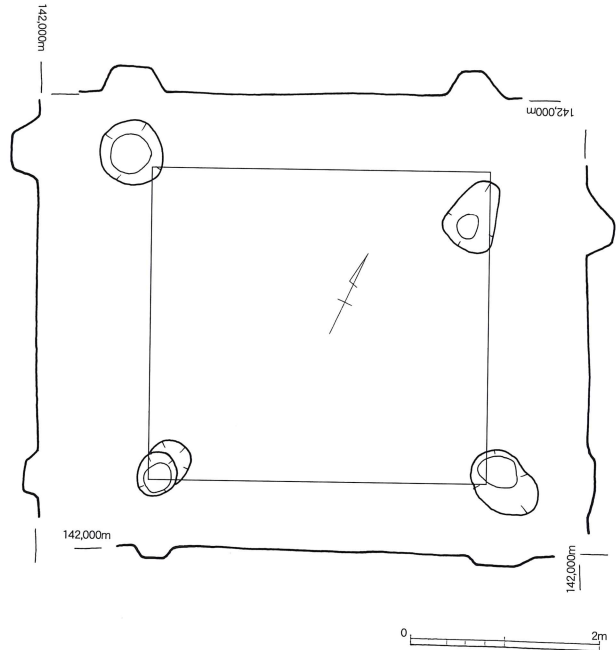
14号掘立柱建物跡は、1号溝の西側、5号建物跡より南、11号建物跡よりも北側に近接する。12号建物及び2・3・4号土坑と重複し、どちらにも切られる。14号建物は、南北方向に長軸をもち、建物方位 $N5^{\circ}W$ である。建物は梁行2間、桁行3間である。北側の梁行ラインの東から2番目の柱穴を欠く。また桁行西側ラインで、南から1つめの柱間が他と比べて短い。建物規模は身舎面積 $18.36m^2$ である。

出土遺物は確認できない。

第27図 14号掘立柱建物跡(S B14)実測図 (1/80)

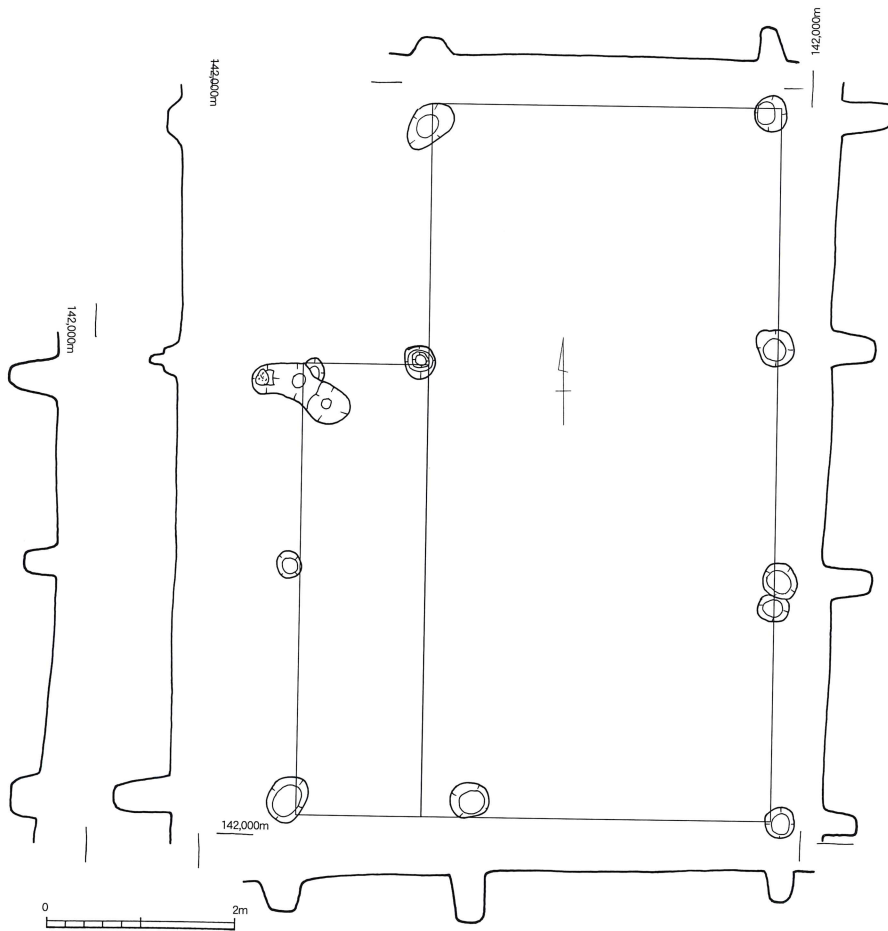


15号掘立柱建物跡 (SB15)



16号掘立柱建物跡 (SB16)

第28図 15・16号掘立柱建物跡(S B 15・16)実測図 (1/80)



第29図 17号掘立柱建物跡(S B 17)実測図 (1/80)

15号掘立柱建物跡 (SB15) (第28図)

15号掘立柱建物跡は1号溝よりも東側にあたり、土塁の際に建てられる。重複する遺構はない。15号建物跡はほぼ方形であるが、若干、南北軸が長い。1×1間である。建物方位はN15°Eである。身舎面積は5.28㎡である。その建物の性格としては、その眺望の良好な北東側を望める立地などから櫓跡などの施設ではないだろうか。

出土遺物はない。

16号掘立柱建物跡 (SB16) (第28図)

16号掘立柱建物跡は曲輪1の北側、1号溝よりも東側に位置し、柱穴列1の北側にあたる。また曲輪1の北西隅にあたり、南北方向に延びる土塁が東西方向に屈曲する地点でもある。建物跡はほぼ方形であるが、若干、東西方向が長い。建物方位はN25°Eである。1×1間であり、建物跡の身舎面積は11.52㎡である。この14号掘立柱建物跡も13号掘立柱建物跡と同様、眺望が良好な立地条件から、櫓跡かとも思われる。

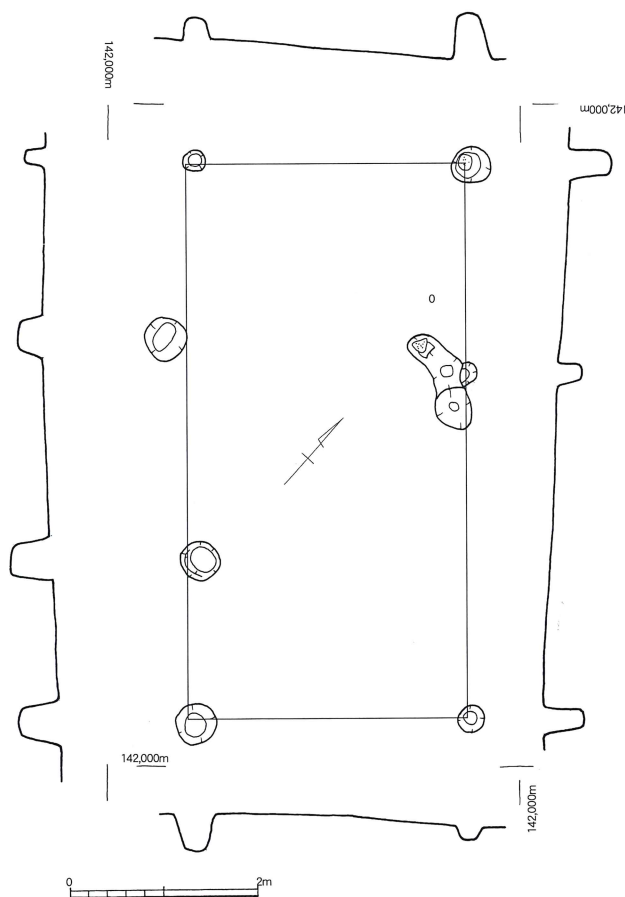
出土遺物はない。

17号掘立柱建物跡 (SB17) (第29図)

17号掘立柱建物跡は、1号溝の東、及び2号溝の南の空間に位置する。また東側と北側に隣接するように1号地下式土坑と2号地下式土坑が展開する。18号掘立柱建物跡と20号掘立柱建物跡と重複し、それらを切っている。17号建物跡は南北方向に長軸をもつもので、建物方位はN0°Eである。建物規模は梁行2間、桁行3間で、桁行西側ラインは南から2間で、西面庇となろう。

南側梁行ラインで、西から2番目の柱穴はやや東側に設定している。身舎面積は28.88㎡である。

出土遺物はない。

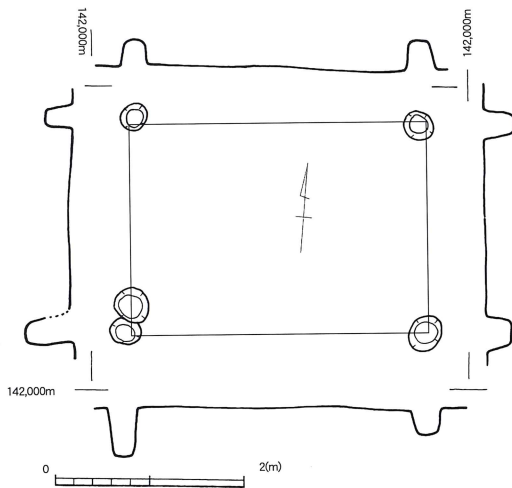


第30図 18号掘立柱建物跡(SB18)実測図 (1/80)

19号掘立柱建物跡 (SB19) (第31図)

19号掘立柱建物跡は、1号溝の東側、2号溝の南側に位置している。15号掘立柱建物跡の南側にあり、重複する建物はない。建物跡は東西方向からやや南に振る長軸をもち、建物方位は $N70^{\circ}W$ である。8号・10号・18号掘立柱建物跡とこの建物跡は若干軸がズレるが関連がありそうである。建物規模は梁行1間、桁行4間である。桁行南側ラインは東側の2つの柱穴を欠く。桁行の柱間も2・4間目がやや間隔が狭い状況である。身舎面積は 31.20m^2 である。

出土遺物はない。



20号掘立柱建物跡 (SB20) (第32図)

20号掘立柱建物跡は、1号溝の東側、2号溝の南側に位置する。17号掘立柱建物跡と重複し、これに切られる。建物は東西方向に長軸をもつもので、建物方位は $N86^{\circ}E$ である。建物規模は梁行1間、桁行1間である。身舎面積は 7.04m^2 である。建物の構造から、15号・16号掘立柱建物跡で考えられる檣跡としての性格も考慮することができよう。

出土遺物はない。

第32図 20号掘立柱建物跡(S B20)実測図 (1/80)

柱穴列 (第16図)

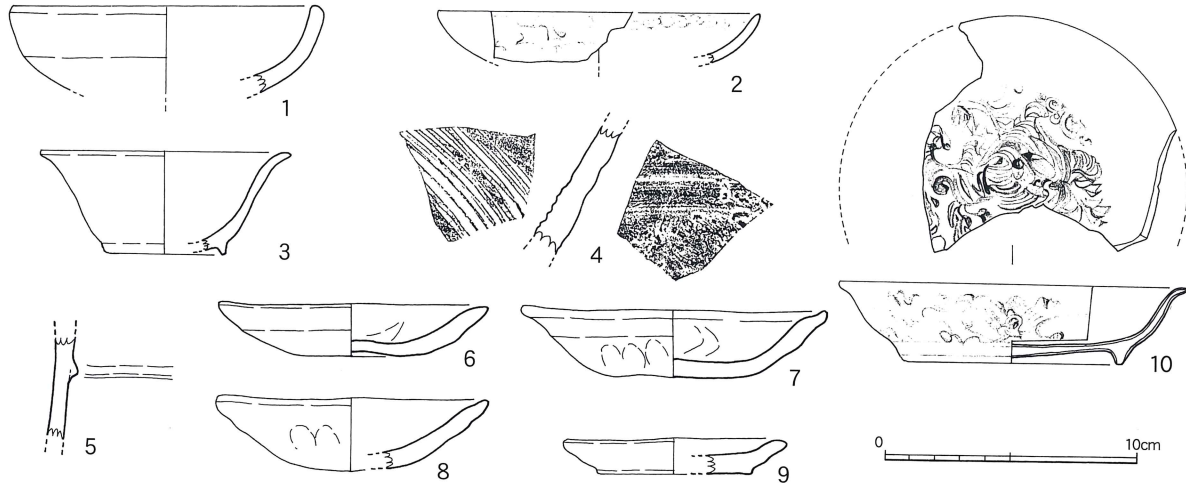
曲輪1での柱穴列は、5つのラインが考えられた。柱穴列1は、1号溝の東側にあり、1号溝を切る。東西方向に延び、方位 $N81^{\circ}E$ である。柵列状と考えられそうである。柱穴列2は、1号溝の西側、曲輪1のほぼ中央にあたる。南北に延び、東西方向に屈曲する。軸は8・10・18号掘立柱建物跡と類似しそうで、柵列状、もしくは掘立柱建物跡となる可能性もある。柱穴列3は1号溝の西側にあたり、5号・6号掘立柱建物跡と重複する。その北西方向の列は南で北東方向に屈曲する。北西に長軸プランをもつ掘立柱建物跡と同時期かと思われる。性格は、柵列よりも北東側へ展開する掘立柱建物跡の可能性はある。そうした場合、方位を $N31^{\circ}W$ にもち、東西方向に軸をもつ5号掘立柱建物跡と同様に、北西方向に軸をもつ建物の中では最大規模の身舎面積となるものであろう。柱穴列4は1号溝の東と2号溝の南の空間に位置する。柱穴列4は軸を方位 $N45^{\circ}E$ に持つが、付近の掘立柱建物跡でこの軸と平行関係になるものはない。柱穴列5は、北西方向に軸を持ち、方位 $N39^{\circ}W$ である。これは、すぐ北側の18号掘立柱建物跡などと平行関係にあたり、柵列の性格を有すると思われる。

(c) 柱穴出土遺物 (第33図)

曲輪1の柱穴より出土した図示可能な遺物を掲げる。

1は柱22からの出土で、青磁碗である。2は柱25からの出土である。中国景德鎮窯産である。3は柱23からの出土であり、白磁皿である。16世紀代の所産であろう。4は柱51からの出土である。備前焼播鉢片である。内面の摺り目は交叉摺り目であろう。16世紀末段階の所産と考えられる。5は柱26からの出土で、火鉢片である。胴部の下部か上部に1条の突帯が付く。6は柱20からの出

土である。非ロクロ土師器皿で、いわゆる京都系土師器である。内面にユビナデアゲが残る。7は柱24からの出土で京都系土師器柱51からの出土で、外面口縁端部に少々強いナデ痕跡が残る。内面にはユビナデアゲが残る。8は手づくね土師器皿（京都系土師器）で、外面にユビオサエが残る。9は柱51からの出土で、在地のロクロ土師器坏である。上門手遺跡から出土した唯一のロクロ使用土師器坏である。10は柱25からの出土で、中国景德鎮窯産染付皿である。



第33図 曲輪1 柱穴出土遺物実測図 (1/3)

(d) 土坑

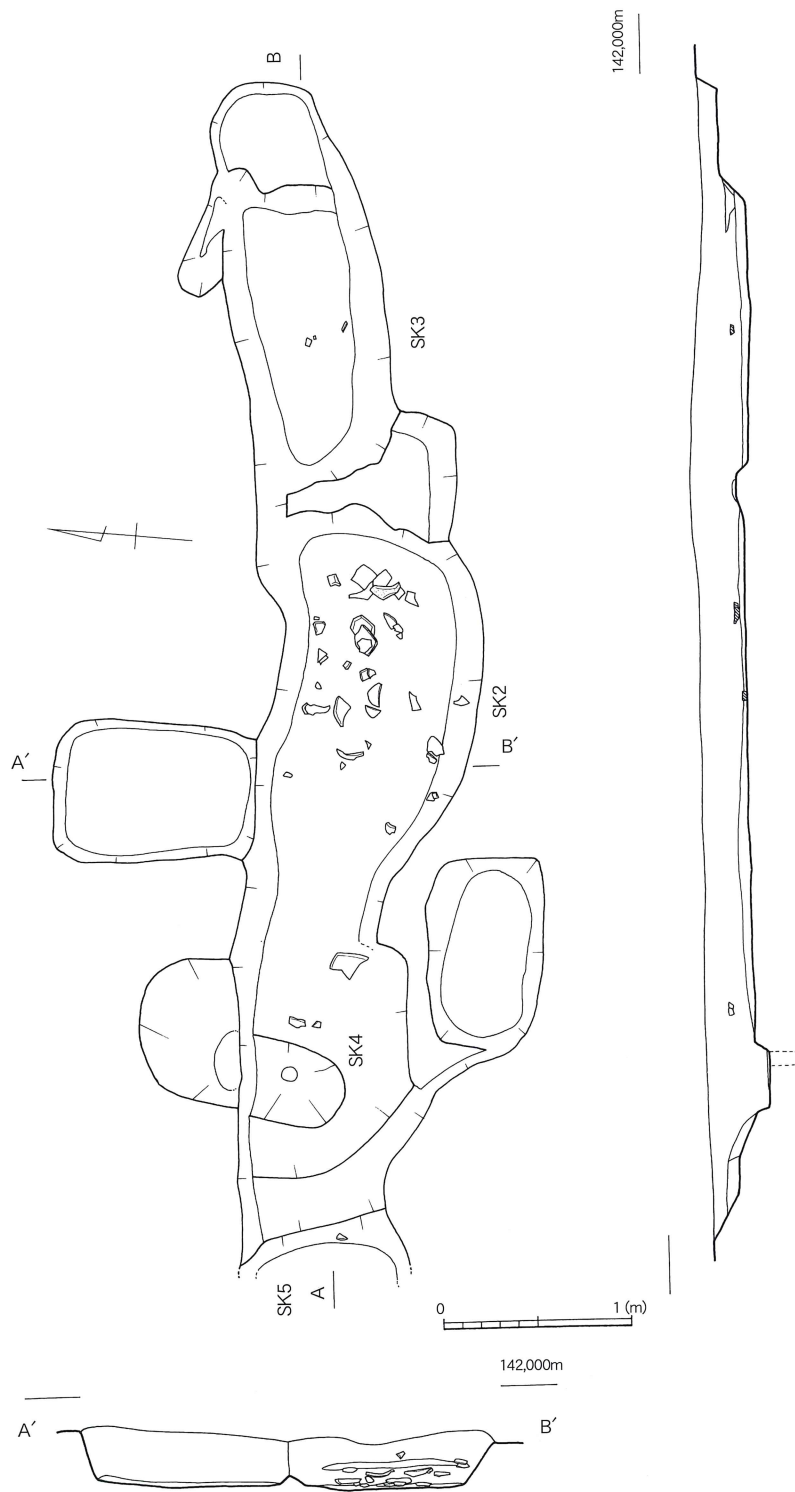
曲輪1で土坑は4基確認した。2・3・4号土坑は、調査時は土坑番号を細別したが、実際は埋土や規模が類似し、連続する土坑であると考ええる。

2・3・4号土坑（SK2・3・4）（第34・35・36図）

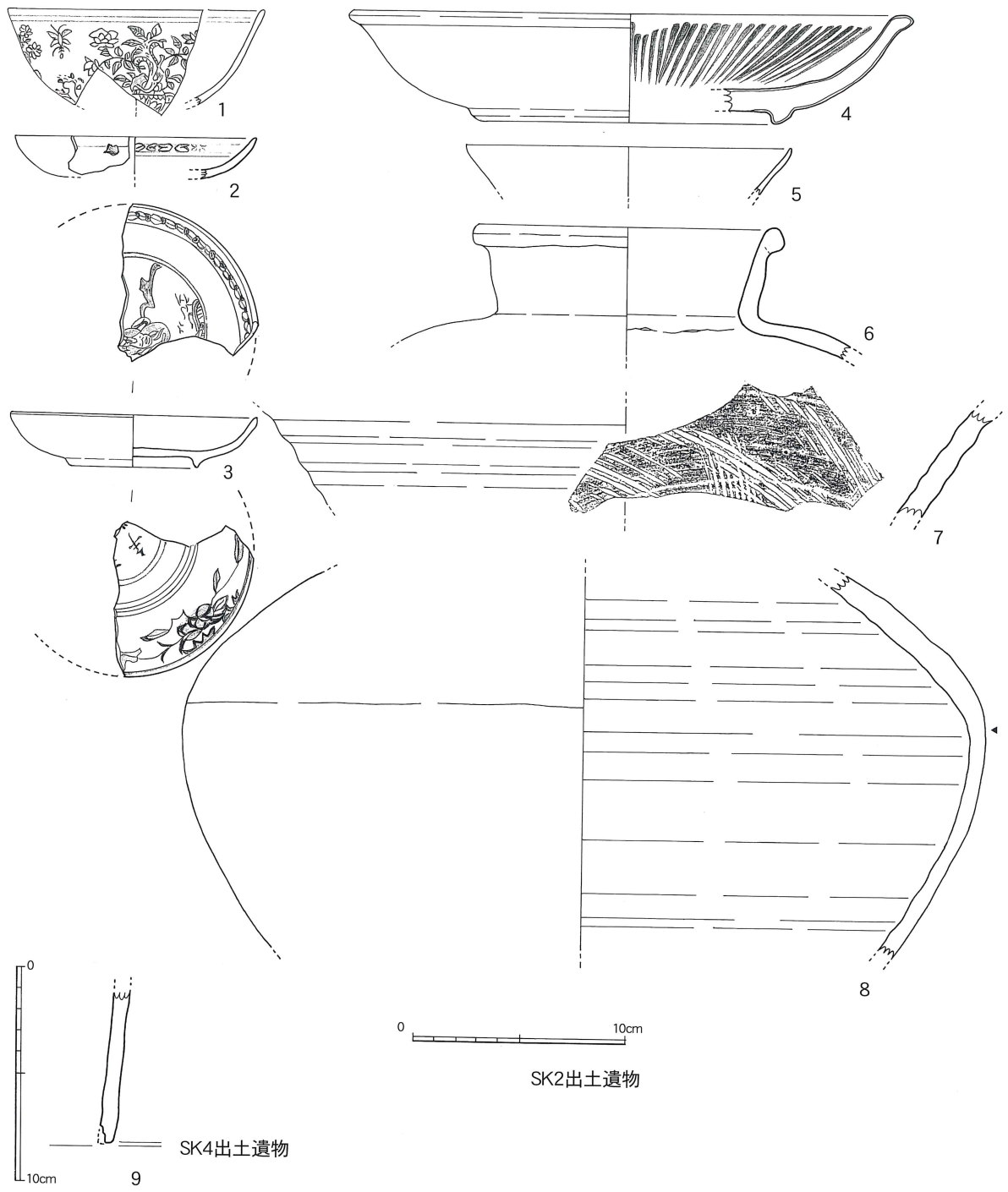
2・3・4号土坑は、1号溝より西側で、12号掘立柱建物跡と14号掘立柱建物跡と重複するものである。また切り合い関係は5号土坑、及び14号掘立柱建物跡を切る。2・3・4号土坑の全体の平面プランは、不定形な長方形を呈し、長軸6m、短軸0.6～1.1m、最大深0.4mを測る。

出土遺物（第35・36図）は、2号土坑からの遺物は、1は赤絵の中国明の五彩碗である。2は中国景德鎮窯染付け皿である。3は中国景德鎮窯染付け皿である。内面見込には山水人物を描く。また外面は花鳥折枝文様である。4は中国龍泉窯産青磁盤である。口縁端部は外に屈曲させる。内面胴部に線描蓮弁文を施している。5は朝鮮王朝産である。6は備前焼甕の口縁部であろう。7は備前焼播鉢の胴部片である。内面には交叉摺目が確認できる。8は中国産の黒褐釉陶器壺の胴部片か。3号土坑（第36図）は、1は非ロクロ土師器皿で、いわゆる京都系土師器である。外面口縁端部には強いナデが確認できる。2は漳中国 州窯染付け碗である。外面には唐草文様を施す。4号土坑からは、1点の出土で、9は土師質火鉢の底部片である。

出土遺物から、この連続土坑は16世紀後半～末の所産であると考ええる。



第34図 2・3・4号土坑(SK2・3・4)実測図 (1/40)

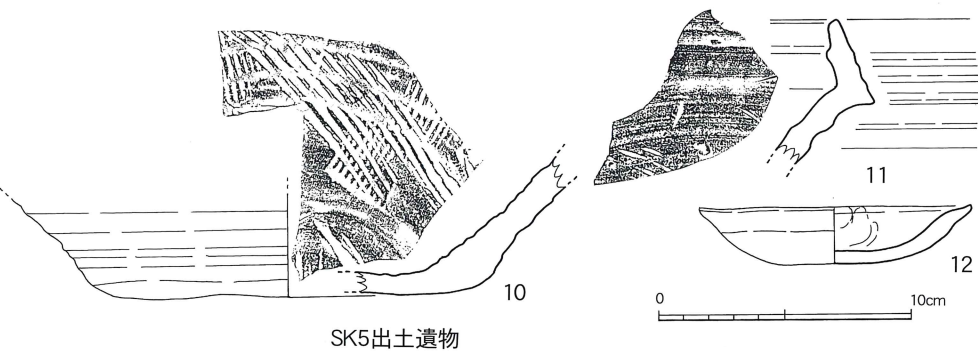


SK2出土遺物

SK4出土遺物

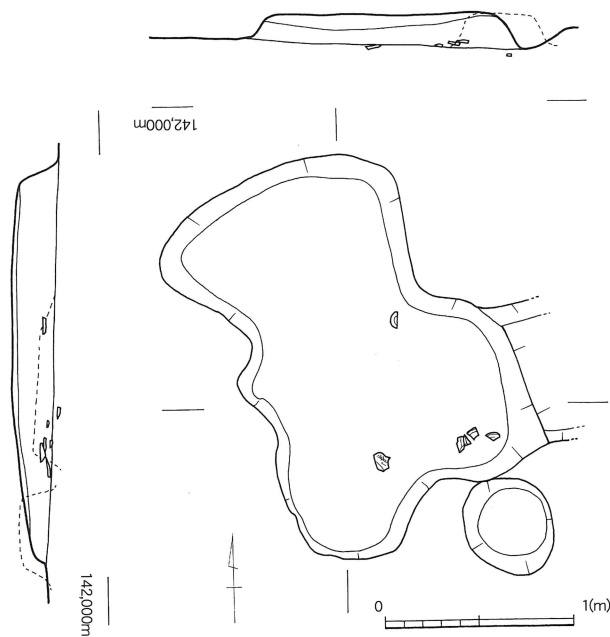
9

10cm

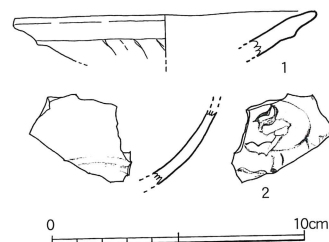


SK5出土遺物

第35図 2・4・5号土坑出土遺物実測図 (1/3)



第37図 5号土坑(S K 5)実測図 (1/30)



第36図 3号土坑(S K 3)出土遺物実測図(1/3)

5号土坑 (S K 5) (第37図)

5号土坑は、1号溝の西側にあたる曲輪1の空間の西端に位置する。切り合い関係は2・3・4号土坑と重複し、これに切られる。平面プランは不定形であり、長軸2.1m、短軸0.9m、最大深0.3mを計る。出土遺物(第35図)は、10は備前焼播鉢の底部片である。内面には交叉摺り目が確認できる。11も備前焼播鉢で口縁部片である。

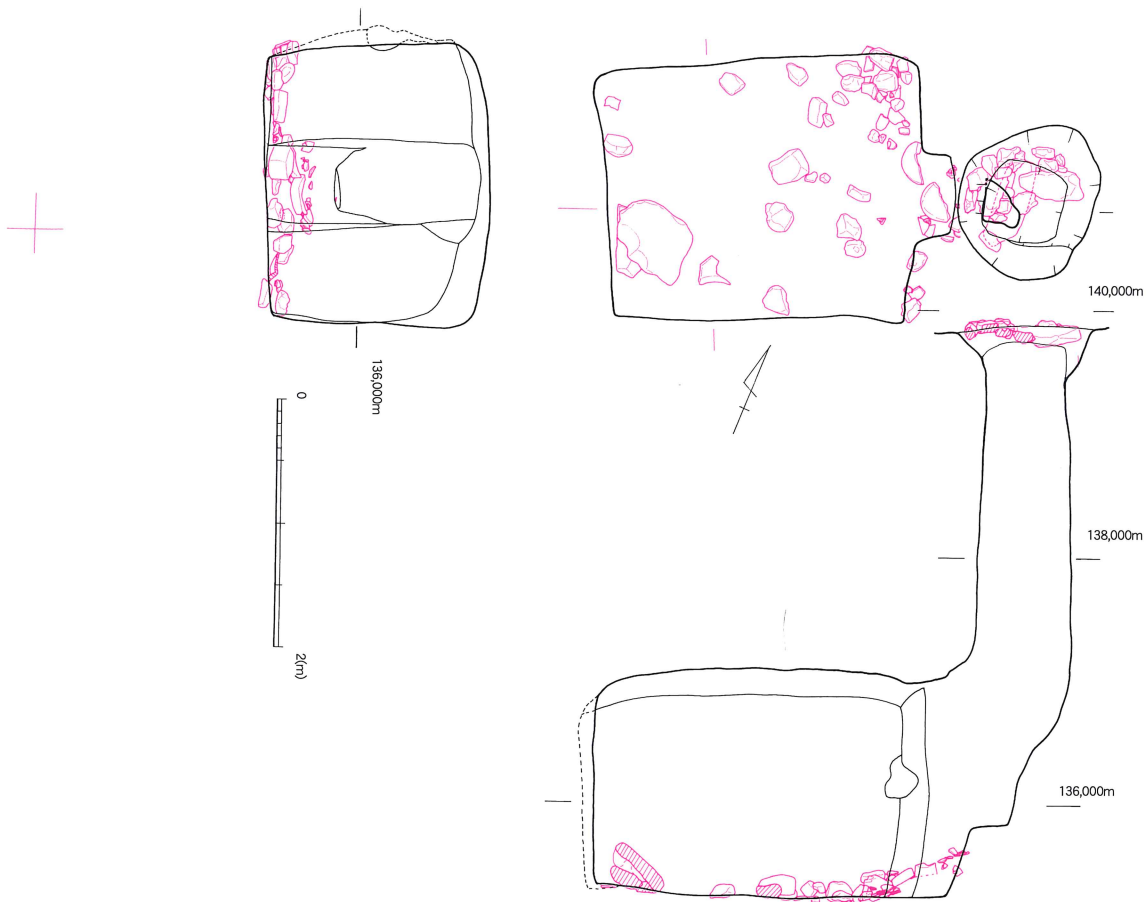
12は非ロクロ土師器皿でいわゆる京都系土師器である。口縁端部を外側へ屈曲させ、外面口縁端部には強いナゲ痕跡が残る。内面には、ユビナデアゲ痕跡が確認できる。

(e) 地下式土坑

地下式土坑は、曲輪1で3基検出できた。1・2号地下式土坑は、1号溝の東側、2号溝の南側で検出した。1・2号地下式土坑は、この1・2号溝に挟まれた空間に位置する。1号地下式土坑の残存状況は良好で、地下へ降りるその入り口部を凝灰岩で塞いでおり、また土砂の内部への流入が少量であったのと、地下室も天井などの崩落はまったく見当たらない状況であった。2号地下式土坑は、地下室の天井部が崩落しており、地下室へ降りる入り口部に土砂が完全に流入していた。また3号地下式土坑は、1・2号地下式土坑の北西にあり、1号溝に切られる状況で検出した。3号地下式土坑に限っては、完掘することができなかった。

1号地下式土坑 (第38図)

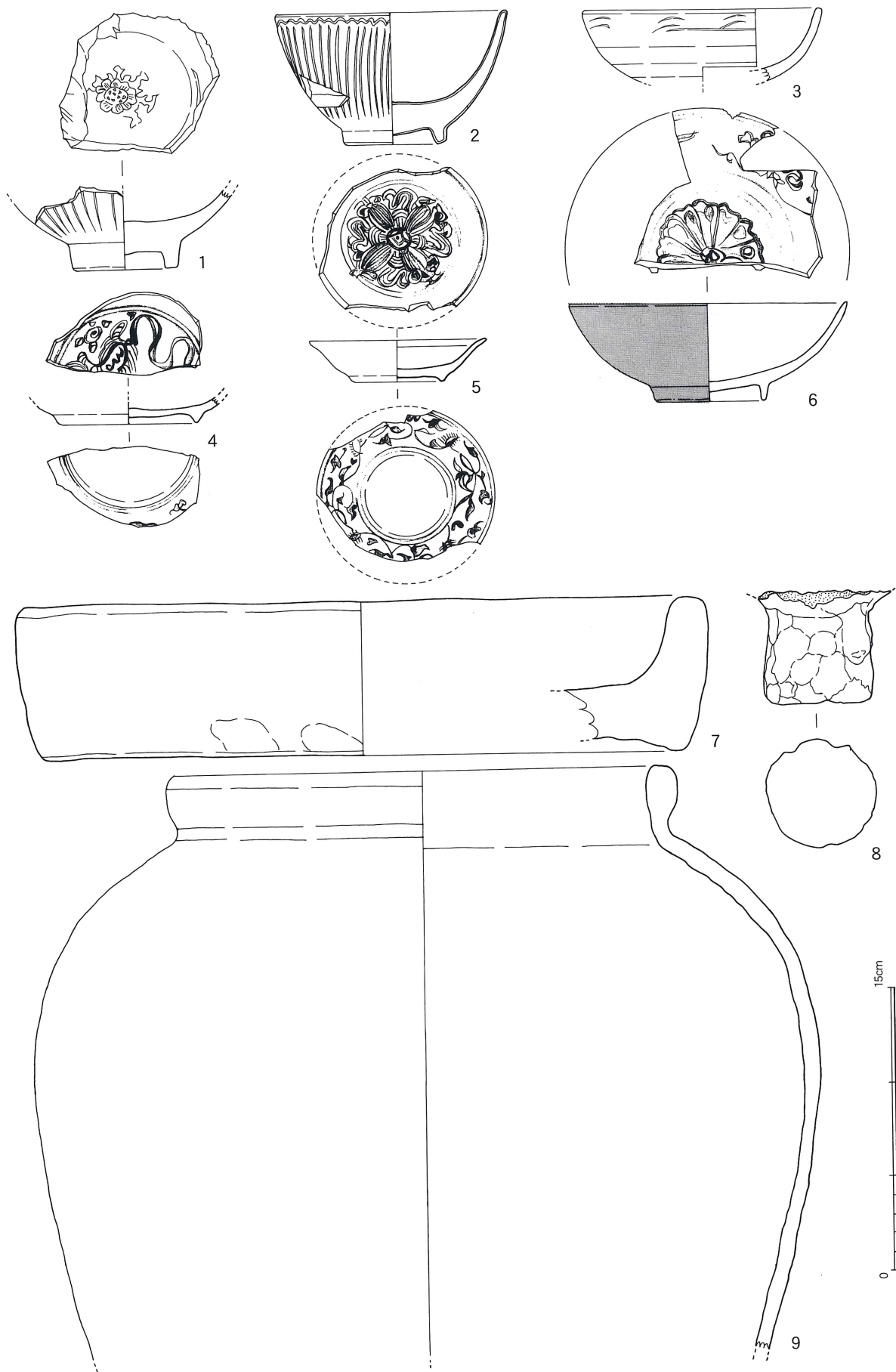
1号地下式土坑は、1号溝の東側、2号溝の南側の空間に位置し、その空間の中に限ってはほぼ中央に位置している。また17号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。1号地下式土坑は、入り口部と地下室中央の軸線で方位N68°Eである。開口部は、やや不定形な円形プランで、長軸0.4m、短軸0.38mを計る。またこの開口部の閉塞施設として、大小の凝灰岩を利用していた。開口部から下に行くと、約4.0mで安定したフラット面に辿りつく。その安定面から0.7m下がって、地下式土坑の底面である。開口部から地下室の底部まで約4.7mである。地下式土坑の平面プランは東西2.5m、南北2.1mでやや東西に長い、ほぼ方形である。



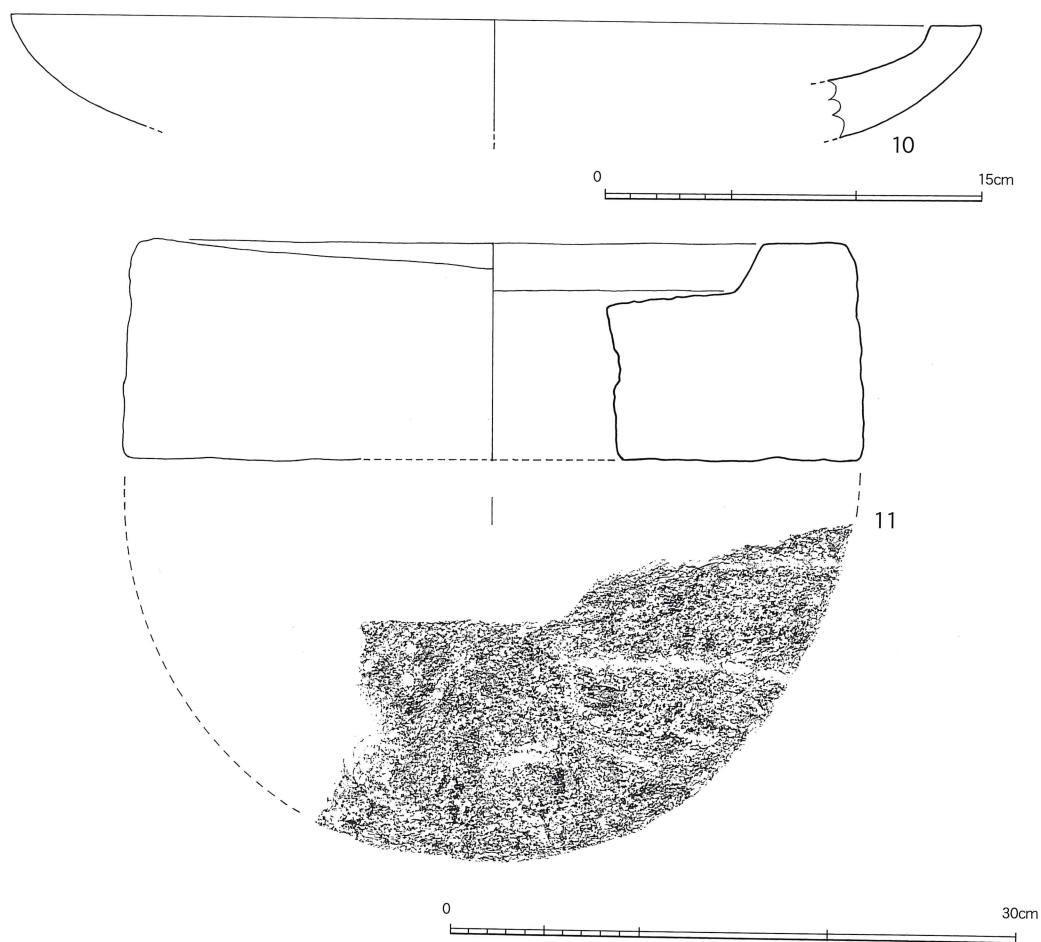
第38図 1号地下式土坑実測図 (1/60)

前壁ラインで2.1m、奥壁ラインで1.9mを計り、奥壁のほうが若干すばまる。また底部から天井部までの最大高さは1.8mである。天井はドーム型である。地下室床面には、1m弱ほどの凝灰岩から、拳大の石まで散乱していた。出土遺物は前壁際の床面から一段東に上がる箇所、多少の土砂の流入があったようで、床面より若干高い位置で出土した。出土遺物は床面直上のものが多く、良好な状態であった。人骨は出土しなかった。

出土遺物 (第39,40図) は、そのほとんどが、地下土坑内からの出土であった。1は、中国龍泉窯青磁碗である。外面は線描蓮弁を施す。また内面見込み部には花を描く。2は中国龍泉窯青磁碗で、外面には剣先蓮弁文を施す。3は中国龍泉窯青磁碗であり、外面口縁部に、2条の曲線を等間隔に描く。雷文帯の退化したものであろう。4は中国景德鎮窯染付け皿である。内面見込みには玉取獅子を施す。5は中国景德鎮窯染付け皿である。内面見込み部に十字花文文様を施す。6は碗で、外面は青磁で、内面は染付け技法である。内面見込みには花文様であり、内面胴部に唐草文様を描く。7は風炉か。8は7と同一個体になりそうで脚付きのものになりそうである。9は備前焼甕である。10は石臼で、茶臼の上臼であろう。11は石臼である。



第39图 1号地下式土坑出土遺物実測図① (1/3)

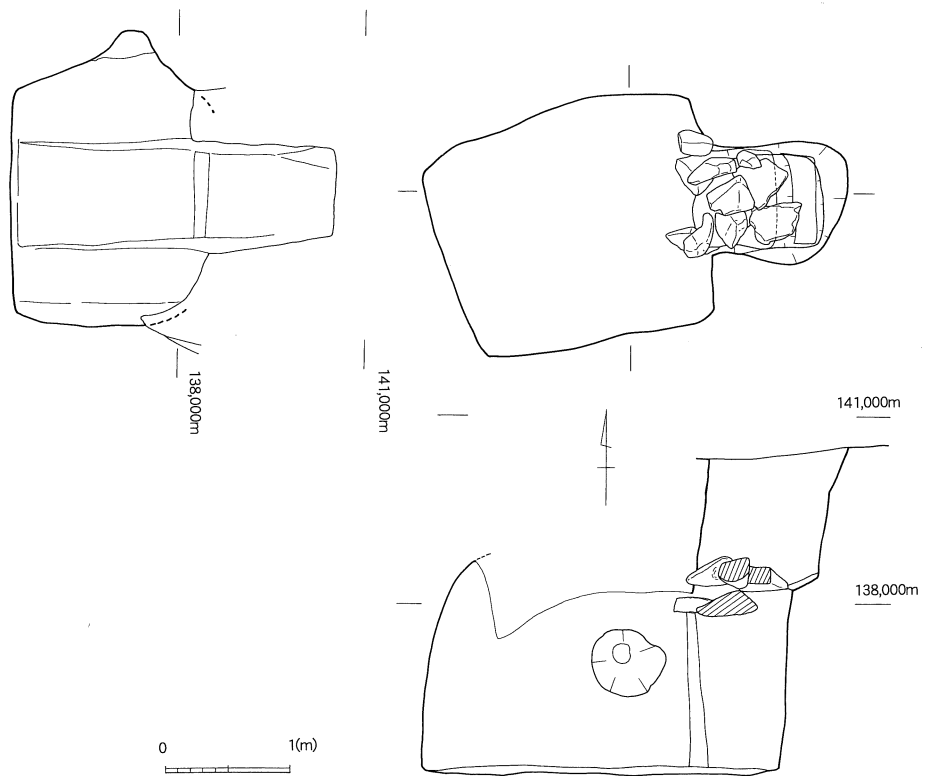


第40図 1号地下式土坑出土遺物実測図② (10は1/3、11は1/4)

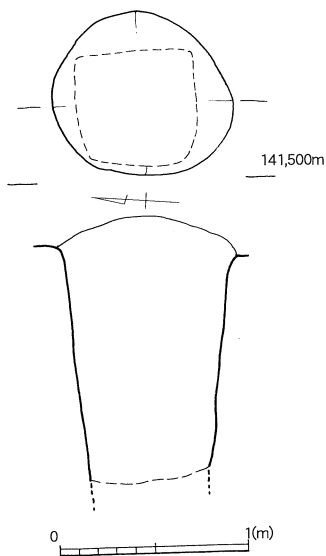
2号地下式土坑 (第41図)

2号地下式土坑は、1号溝の東側と2号溝の南側の空間で検出した。1号地下式土坑の北にあたる。15号掘立柱建物跡と重複するが、その新旧関係は明らかでない。2号地下式土坑の開口部の平面プランは西側が地下室天井の崩落のため確認できないが、やや不定形の円形であったと思われる。開口部の確認できる規模は長軸1.1、短軸1.0mである。開口部から地下室の奥壁の中心に伸ばした軸の方位はN80°Eである。1号地下式土坑とほぼ同じ方位である。開口部から下に行くと、1.0m降りたところで西側の壁に若干フラットな面が検出できる。ちょうどその高さで閉塞石と思われる凝灰岩があったが、当初からこの箇所に配置してあったものというより、開口部の閉塞石だったものが流れ込んだものであろう。開口部から地下室の床までは約2.6mで到達する。地下式土坑の床面のプランはほぼ方形である。南北1.9m、東西2.2mである。前壁ラインで1.8m、奥壁ラインで1.5mを計る。床面はフラットであった。また天上部は崩落のため形状は掴めない。床面から天上部まで現状で確認できる高さは1.7m + α である。また南壁には穴があいていた。意図的なものかどうかはわからない。

出土遺物 (第43図) は、1点のみであった。1は鉛製の薄型の円形をしたものである。用途などは不明である。



第41図 2号地下式土坑実測図 (1/60)

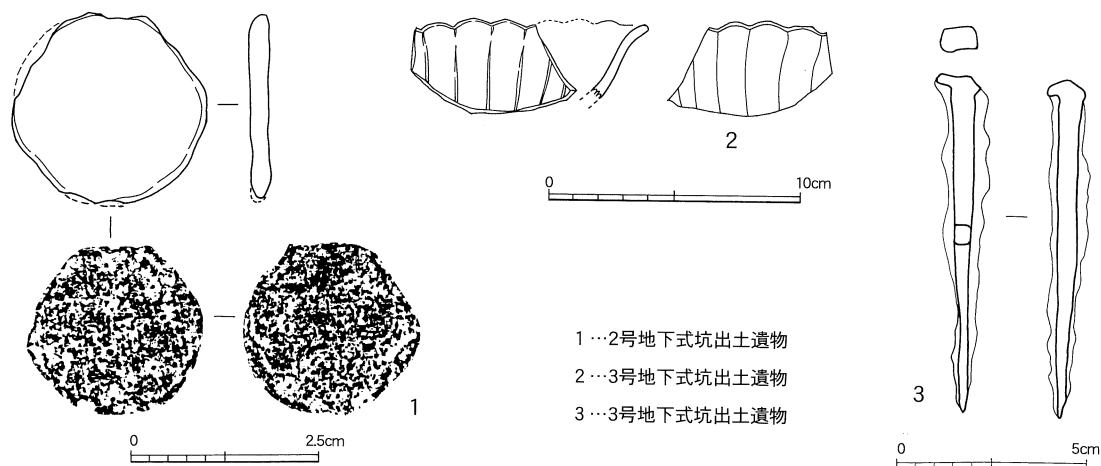


第42図 3号地下式土坑実測図 (1/30)

3号地下式土坑 (第42図)

3号地下式土坑は1・2号地下式土坑の北西に位置し、1号溝中央付近の底部から検出できた。このため、1号溝に切られているのは間違いない。前述したように3号地下式土坑は、完掘することができなかつた。床面まで掘りぬいていないため、地下式土坑であるという確実な証拠には至らないが、検出できた平面プランとそこからまっすぐ掘り下げられる状況から他の遺構を想像しづらく、地下式土坑として掲げた。開口部の平面プランはほぼ円形である。南北軸1.0m、東西軸0.85mである。掘り下げた深さは検出面より1.2mである。

出土遺物 (第43図) は、2点であった。2は白磁菊花皿である。3は鉄釘であり、長さ9.0cm、重さ12.8gを測る。



第43図 2・3号地下式土坑出土遺物実測図 (1は1/1、2は1/3、3は1/2)

(f) 溝 (SD)

曲輪1の溝は、2条確認できた。1号溝は南北方向に延びる溝で、2号溝は曲輪1南東部で東西に延びる溝で、1号溝と重複はしないが、直交する状況である。しかし、同時存在したかどうかはわからない。2号溝の一部に焼けた礫が集中している。

1号溝 (SD1) (第44図)

1号溝は、曲輪1のほぼ中央を南北に縦断し、曲輪1を大きく2つに区画している。1号溝の長さは40.24mであるが、北端と南端を近世以後の造成により切られているため、実際の長さは $+ \alpha$ があるものと思われる。最大幅は2.0mで、深さは0.4mである。方位はN17°Wである。他の遺構との重複関係は、柱穴列1・4に切られる。また3号地下式土坑を切る。1号溝と平行もしくは直交する関係がある掘立柱建物跡は見つからない。

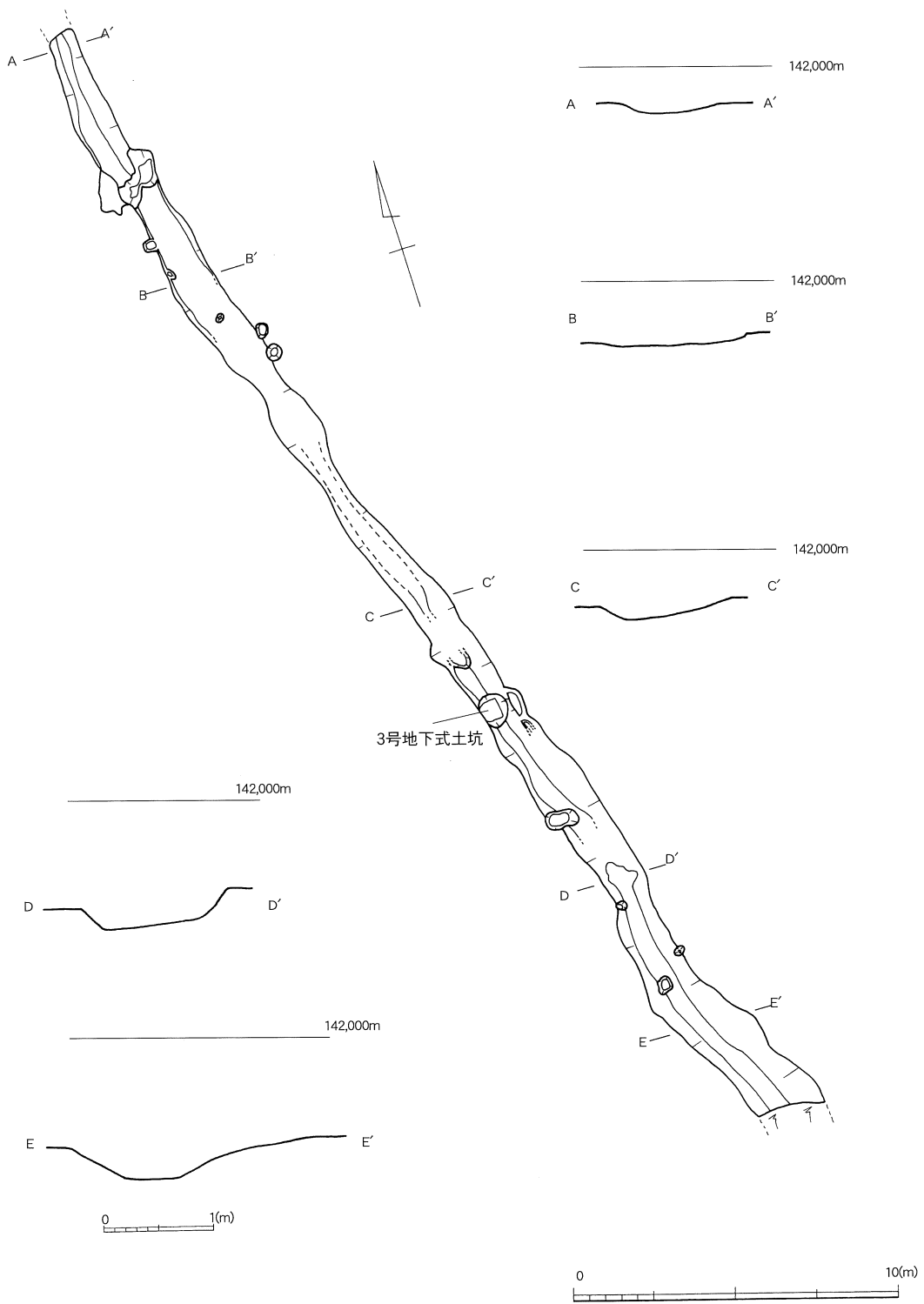
出土遺物は、図示できないほどの土器片がごく少量出土したのみであるので、1号溝の年代を決定する根拠を欠くが、3号地下式土坑より16世紀後半に置かれる白磁菊花皿が出土している。切合から3号地下式土坑よりも新しく、柱穴列1・4よりも古いということは言える。

2号溝 (SD2) (第45図)

2号溝は、曲輪1の南東部を東西に延びる。1号溝と直交するような状況で、確認できた長さは17mで、最大幅は2.6m、深さは0.3mである。一部を土坑に切られる。主軸方位はN85°Eである。しかし2号溝と平行もしくは直交するような掘立柱建物跡は確認できない。また2号溝の東側をのばすと後述するがちょうど土塁線の南側の始まりにあたるようで、関連がありそうである。2号溝の中央部から東側にかけて、焼けた石を廃棄しており、遺物も多く出土した。

出土遺物 (第46、47図) は、そのほとんどが焼けた石が集中している個所から出土した。

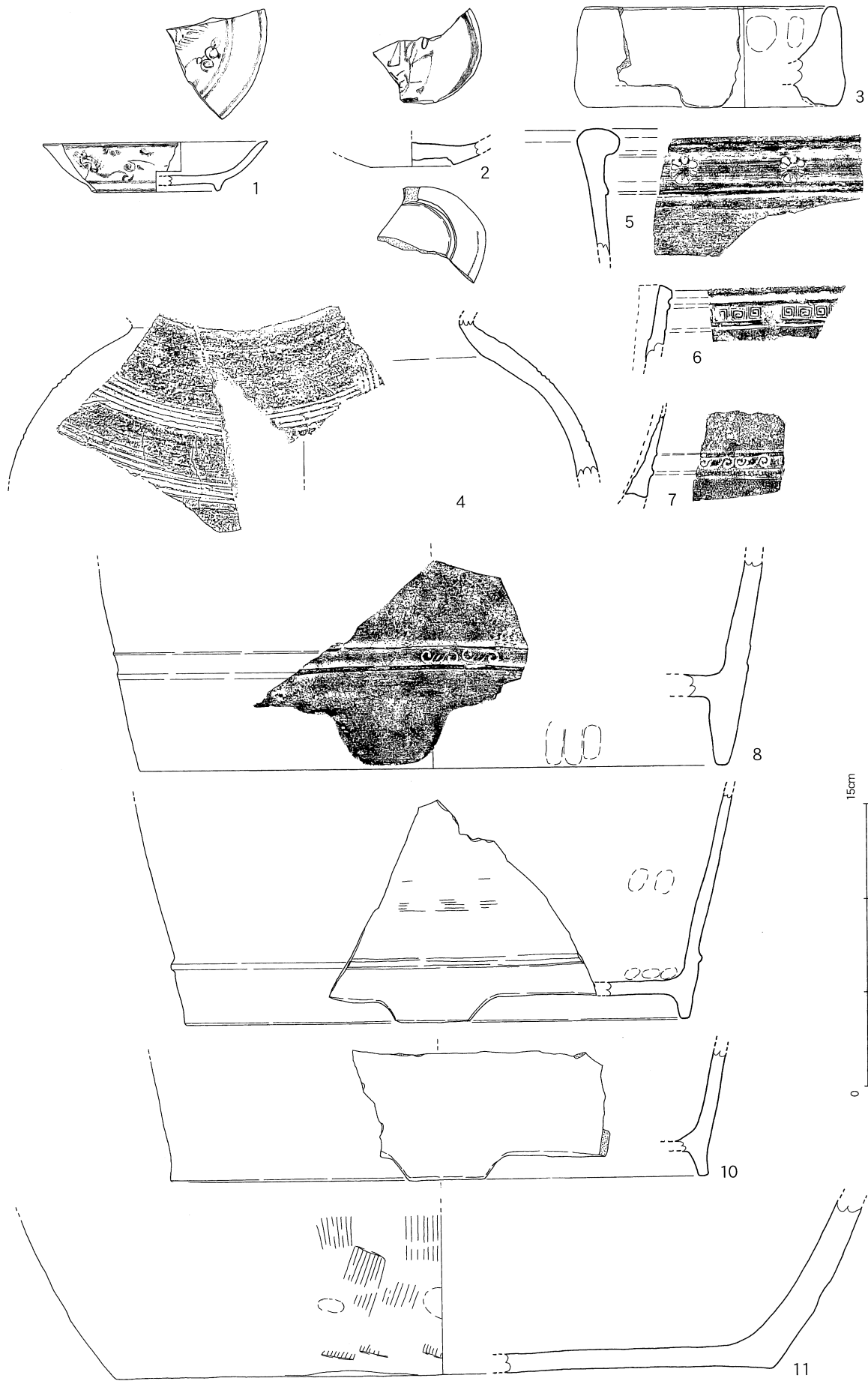
1は中国景德鎮窯染付け皿である。外面は花鳥折枝文様、内面見込み部に山水人物文様を施す。2は中国景德鎮窯染付け皿である。外面底部は碁笥底であり、内面見込み部に「寿」字文様を施す。3は土製の脚付き容器か。4は中国産の黒褐釉陶器壺。5～10は火鉢である。5は瓦質で、口縁部外面に2条の突帯を巡らし、その間に花卉をスタンプしている。6は土製で、外面口縁端部に2条の沈線とその間に雷文を施す。7は土製火鉢で、底部である。底部外面端部に、2条の突帯とその間に文様を施す。8も土製火鉢で、胴部の底部付近で、外面低部ある。9・10も土製火鉢で、脚付きである。9は外面底部に2条の突帯を施し、スタンプ文を施す。11は、土製で、甕か鉢であろう。外面には少しの縦方向のハケがみえる。12・13は石臼であろう。茶臼は上臼である。その底部を回転するときの痕跡が残る。15は石臼で、下臼は14・15・16・17は石臼である。14・16の裏面にも石臼を利用した時の痕跡が残っている。17は、石臼である。下臼であろう。



第44图 1号沟 (SD1) 遺構実測図 (平面図1/200、断面図1/60)



第45図 2号溝 (SD 2) 実測図 (1/80)



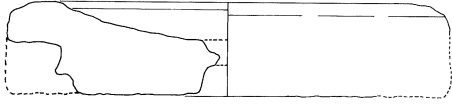
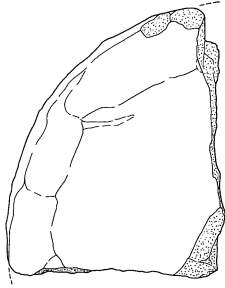
第46图 2号沟出土遗物实测图① (1/3)



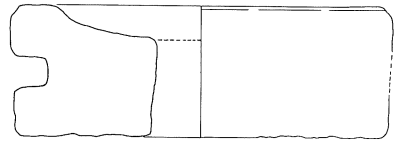
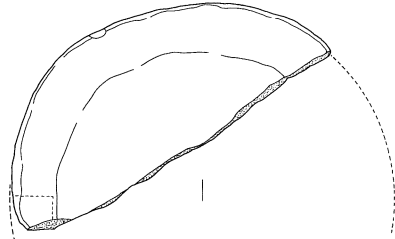
12



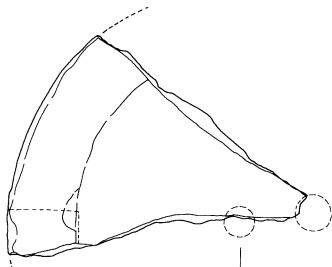
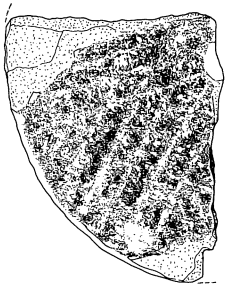
13



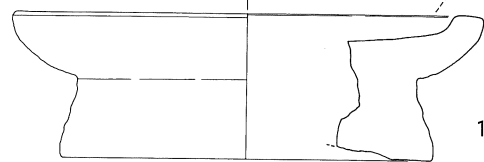
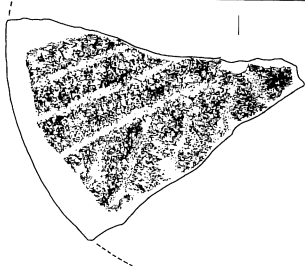
14



15



16



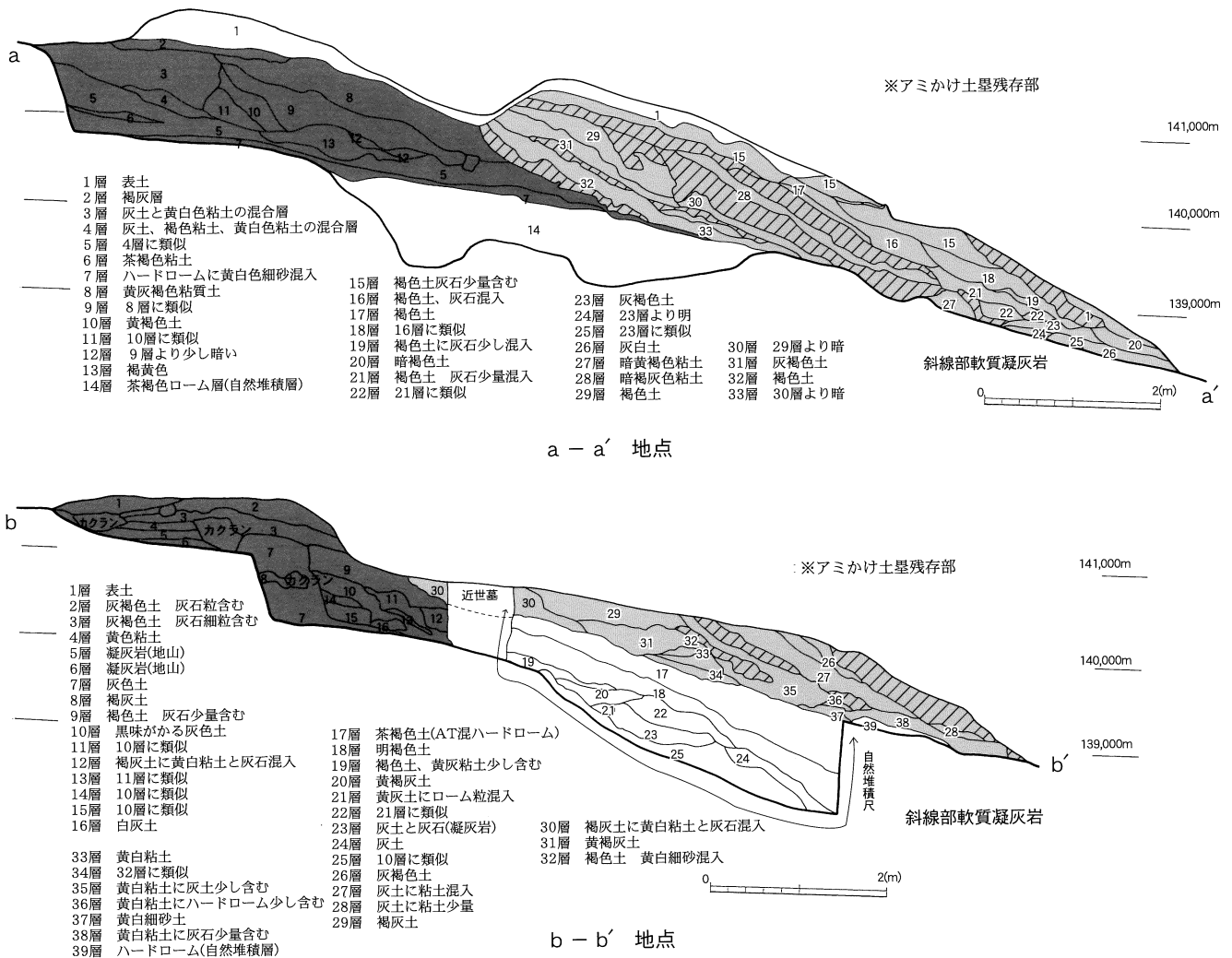
17



第47図 2号溝 (SD2) 出土遺物実測図② (1/6)

(g) 土塁

土塁は、調査前の段階では、曲輪1の北東斜面側に0.5mほどの土盛りがあり北側のやや大規模な土塁、とそのさらに北側を小さな土塁が廻っていた。東側から南に屈曲し、10mほどで西側に屈曲して、曲輪2のほうへ続いていく。また曲輪3と4の間にも高い土塁状のものがあつた。実際に土塁の規模と堆積状況を把握するためにトレンチをいれ、土層観察を行った。トレンチを入れた個所は、北東斜面側に2本のトレンチ（北側をa-a'、南側をb-b'）、北側に1本(c-c'）、西側に1本(d-d'）、南の曲輪3と4の間に1本(e-e')を入れた。



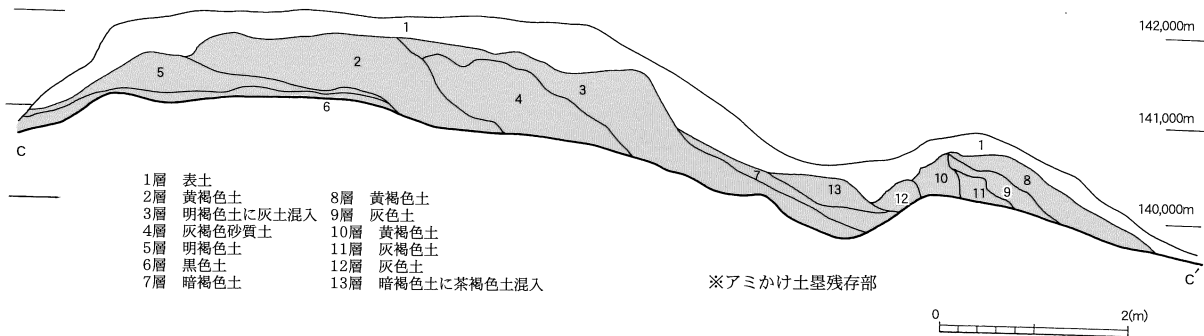
第48図 a-a' ,b-b' 地点土層断面実測図 (1/80)

a-a' 地点 (第48、16図)

a-a' 地点は、曲輪1東側の土塁に直交させる状況で東西方向にいったものである。b-b' 地点の北側に設定した。この個所の土塁は、掘り込み事業を伴った土塁構築を行っていることが判明した。まず曲輪1側から凝灰岩の地山を掘り下げていき、そのまま北東斜面方向に掘り下げて、切岸に連結させる。土塁の積み土の方法は大きく2つ確認できた。一つは2層から13層で、掘り込み事業を伴い、やや傾斜を付けながら盛っていく方法で。もう一つは15層から33層までで、粘土と凝灰岩性の灰色の土を交互に斜めに積上げて行くという方法である。明確な遺物が出土していないため、この土塁構築に時期差があるのか、一連の事業で構築したのかはわからない。同じような積み土は、b-b' 地点、c-c' 地点、1-1' 地点などで共通する。土塁幅は12.8mを測る。掘りこみ事業を伴う土塁構築は、基底部の幅からも当時の土塁の規模は大きかったと思われる。

b-b' 地点 (第48、16図)

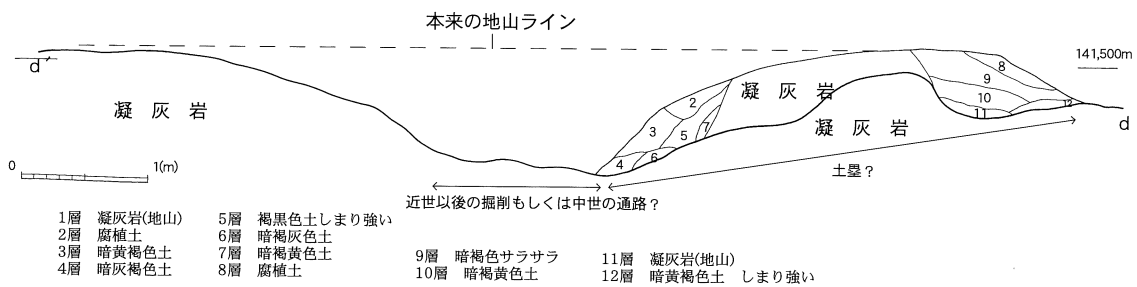
この地点は、a-a' 地点の南にあたり、曲輪1の東端に展開する土塁に対して直交するかたちでトレンチを入れ、土層観察を行った。その結果、この箇所でも、a-a' 地点と同じく、曲輪1側から掘りこみ事業を伴い、箱掘りになりながら、北東斜面の切岸に連動するものである。土塁の積み土の方法も類似し、やや斜めに粘土を主体として積上げて行くもの(1層から16層)と粘土と凝灰岩性の灰土を交互に斜めに積むという方法(29層から39層)を確認した。ここも明確な遺物が出土していないため、積み土の違いに時期差があるのか一連のものなのかは判断できない。この地点の土塁幅は最大で11.6m(時期差を考慮すれば、最初の土塁構築時で4.8+αm)である。



第49図 c-c' 地点土層断面実測図 (1/80)

c-c' 地点 (第49,16図)

この地点は、曲輪1の北側(堀切方面)に残存していた土塁に直交するように南北方向のトレンチを入れ、土層観察を行った。調査前、この箇所は南側から残りのいい土塁とその北側の小規模な土塁で通路を構成していると考えていた。しかし、土層観察の結果、南側を大まかに土を積上げ(2層から6層)、さらにその北側の切岸に連動させる部分には、a-a' 地点、b-b' 地点と同様に粘土と灰土を交互に斜めに積上げて行く技法(7層から13層)を確認した。掘り込み事業は確認できなかった。このことから調査前、通路と考えていた箇所は、近世以後に改変された可能性が高いと思われる。またこの土塁の構築に関し、時期差の有無は、不明である。土塁の最大幅は12mであり、もし時期差があれば、最初の構築時のものは8.8mである。

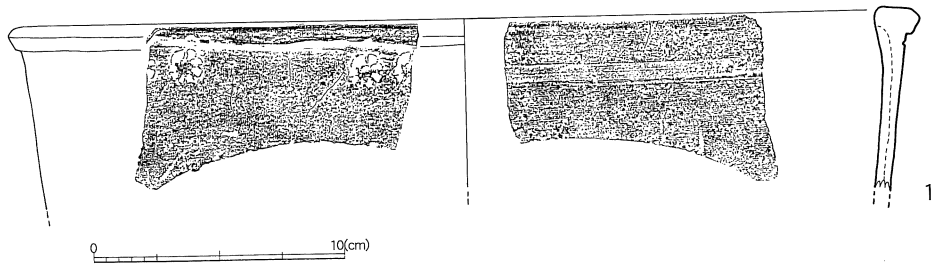


第50図 d-d' 地点土層断面実測図 (1/60)

d-d' 地点(第50、16図)

この地点は曲輪1の西側で曲輪2との間にある通路状のものと曲輪2にある土塁状のものに直交するかたちで東西方向にトレンチをあけた。土層観察の結果、その中央部を凝灰岩が2次堆積している状態で、その曲輪2側と通路側に土層が堆積しているようである。ただこの箇所の土層は、中央の凝灰岩の2次堆積の下部に有る実際の地山である凝灰岩が盛りあがったように確認できる。これは、実際はこの土塁中央部の盛りあがり曲輪1のフラットな面に続いていたのではないかと想定できる。通路状のものは、その北側に近世以後の土とり痕跡穴、もしくは通路状のものが北側に続いている(c-c' 地点参照)ので、近世以後の攪乱と思われる。

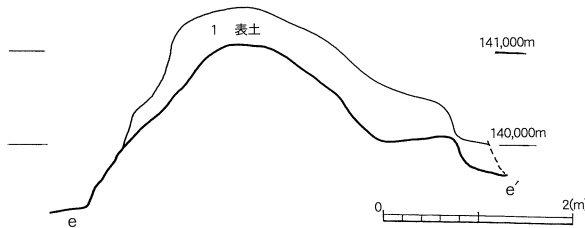
出土遺物(第50図)は、トレンチ設定した箇所の通路状の直上から出土したもので、1は瓦質の火鉢である。口縁端部を外側にツマミだし、その下部に花卉のスタンプを施す。



第51図 d-d' 地点出土遺物実測図 (1/3)

e-e' 地点(第52、16図)

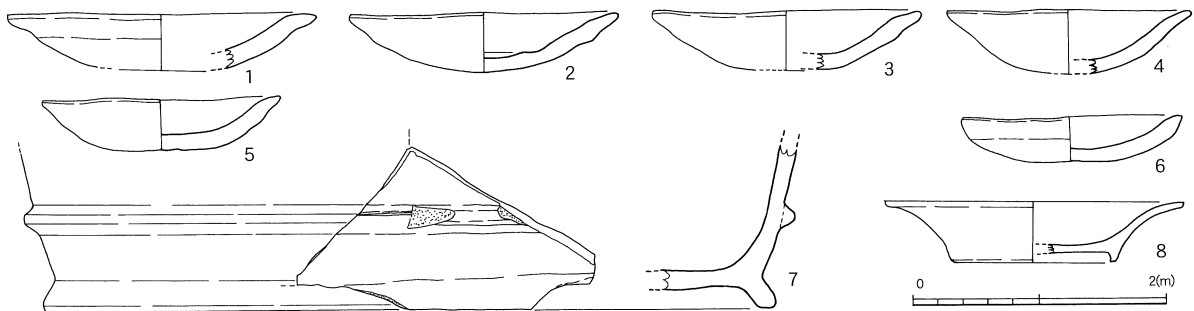
この地点は、曲輪1の南にあたり、曲輪3・4の間にある土塁状の高まりである。東西方向にトレンチを入れた結果、その土層は表土が被さっているだけで、そのほとんどが凝灰岩の地山であった。またその表土下の凝灰岩の地山のレベルは曲輪1の遺構検出面の高さとあまり変わらない。



第52図 e-e' 地点土層断面実測図 (1/80)

このことから、曲輪4および曲輪3は検出面よりそのほとんどが近世以後の遺物しか出土しないので、近世以後の削平を受けている。中世段階では、曲輪3、曲輪4は曲輪1の高さとあまり大差なく、曲輪1の空間であったのではないだろうか。

曲輪1の土塁は、東側から北側(堀切側)にかけて、かなり強固に土塁を盛っていたことがわかった。北東斜面にしっかりとした土塁を築くと、北東方面に広がる平野からは曲輪1の内部の様子を外から見ることはできなかつたろう。また土塁の掘り方の痕跡を確認し、北東部が一部攪乱のため不明であるが、東側から北側にかけて一連に土塁を築いていたことが判明した。また東側で、その南側には土塁が途切れるところがあった。ここにはちょうど2号溝を延長した時に接触するため、関連がありそうである。また東側の土塁が廻っていないところには、その隣接して東側に平場が続いている。これは切岸を真横からみることで確認できるため防御するには適していると思われる。



第53図 曲輪1 中世表採遺物実測図 (1/3)

曲輪1の表採遺物 (第53図)

1~6は非ロクロ土師器皿で、いわゆる京都系土師器と呼ばれているものである。1は外面口縁部に強いナゲ痕跡を残す。4は器高が他と比べると若干高いか。5は主郭北側土塁上での表採である。7は瓦質火鉢底部である。外面胴部に1条の突帯を設ける。また脚部は外側に開く。8は、中国産白磁皿である。胴部から口縁部にかけて外側に大きく外反する。



第54図 曲輪2 遺構配置図 (1/400)

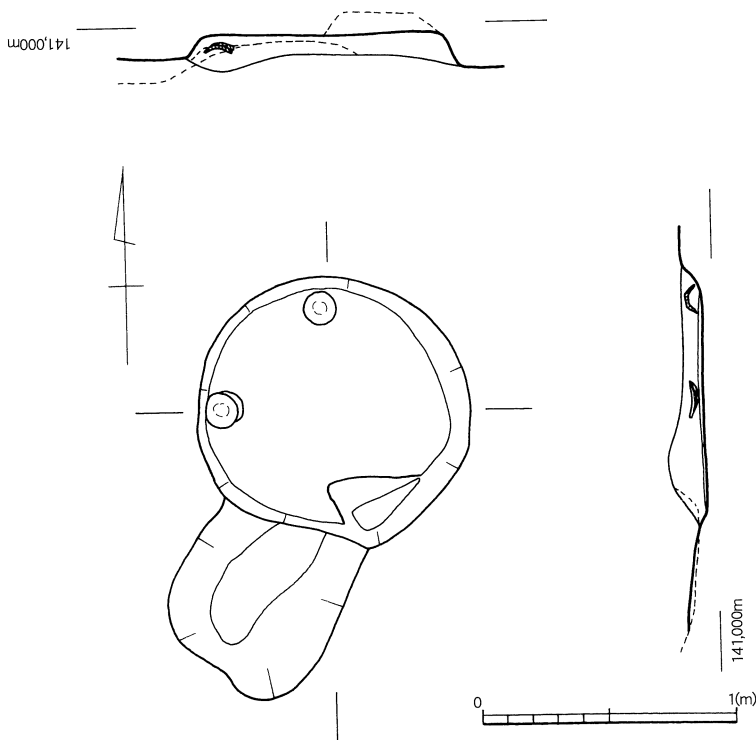
(3) 曲輪2の調査

曲輪2は曲輪1の西側にあたる平場である。面積は約1200㎡である。北側から西側、南側にかけて土塁が巡る。西側には土塁から一段下に曲輪5が存在し、その南に竪堀状の遺構があり(通路)、堀切りへと続く。曲輪2の西には犬走り状の平場が南に約17mほど続く。曲輪2から北側に土塁を挟んで曲輪6がある。切岸や堀切を牽制する平場であろう。東側には曲輪3があるが、大きく一段下がっている。曲輪2の検出した遺構は、そのほとんどが、近世以後であり、中世に帰属する遺構

は土坑1基のみである。また曲輪2は曲輪1の標高よりも0.5mほど低くなる。曲輪2には、昭和前半まで人の生活があったらしく、土塁も削平されている。確実な中世の遺構は、土坑1基のみで、他にはないとすると、遺構の密度は曲輪1ほどはなかった可能性が考えられる。

(a) 土坑

曲輪2では中世の土坑を1基確認した。その他は近世以後の土坑である。

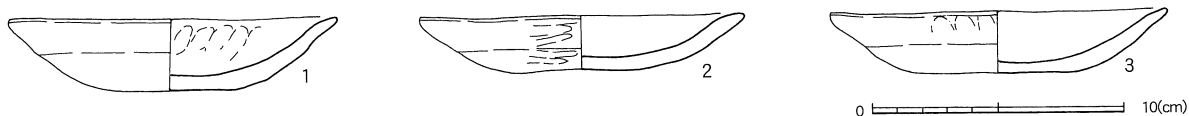


第55図 10号土坑 (SK10) 実測図 (1/30)

10号土坑 (SK10) (第55図)

10号土坑は、曲輪2の北東付近、土塁との際で検出した。平面プランはほぼ円形で、東西軸1.1m、南北軸1.1m、深さ0.15mである。北端の床直上と、西端の床直上には、京都系土師器が意図的に置かれている状況で確認できた。特に西側の京都系土師器は2枚重ねである。3枚ともほぼ完形であったため、廃棄土坑とは考えにくく、土器祭祀遺構ではないかと考える。

出土遺物 (第55図) は、非ククロ土師器皿、いわゆる京都系土師器が3枚である。1は外面口縁部に若干強くナデ痕跡が残る。また内面口縁に近いところにユビオサエが連続的に確認できる。2は外面を横方向に細かくナデている。3は若干底部の器壁が薄い。外面口縁部にユビオサエ痕跡が連続して残る。



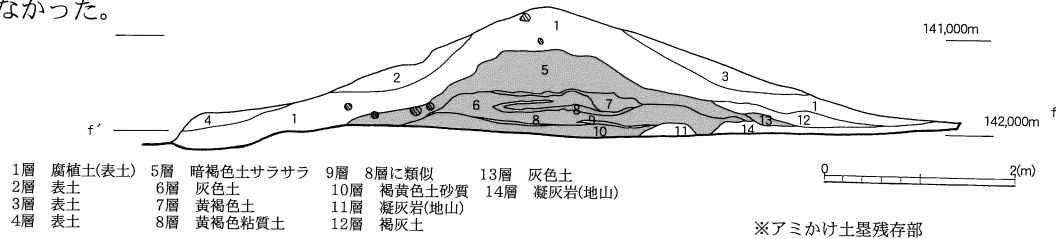
第56図 10号土坑(SK10)出土遺物実測図 (1/3)

(b) 土塁

土塁は、曲輪2の北側、西側、南側に巡っている。また曲輪5にも土塁を築いている。曲輪2では、曲輪1同様、土塁の積土方法を土層観察で調べるために、トレンチ設定を4箇所行った。北側の土塁（f-f'）、曲輪5から豎堀状の通路にかけて（g-g'）、南西の土塁（h-h'）、西側の土塁と犬走りの部分（i-i'）が終息するところである。

f - f' 地点 (第57図)

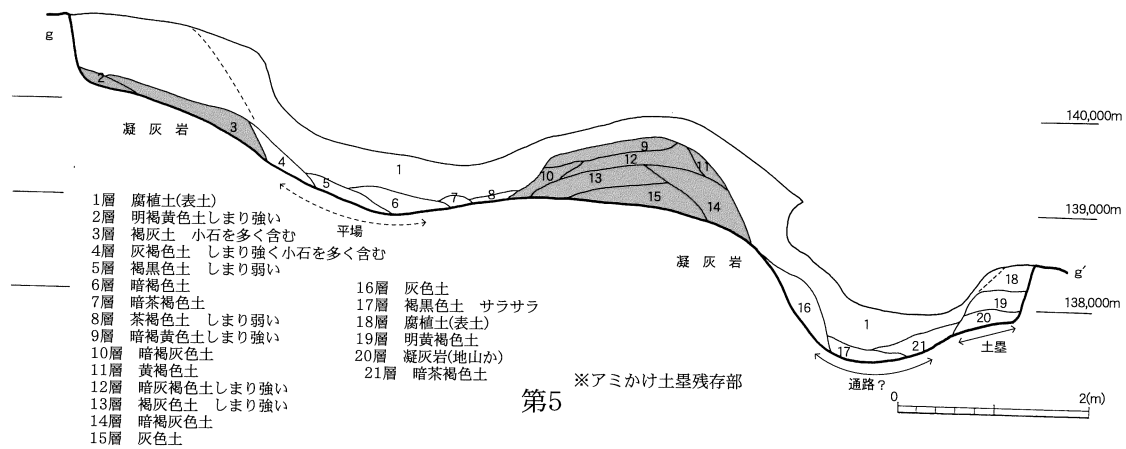
この地点は、北側の土塁に直交するかたちで、南北方向に設定した。土層観察の結果、土塁の中央部、特に下部から中ほどまでを細かい粘土を使いながら丁寧に盛っている。土塁の最大幅は4.8+2mであった。ただ曲輪1で検出できた灰土を使用した斜め積み堆積や掘りこみ事業は確認できなかった。



第57図 f - f' 地点土層断面実測図 (1/80)

g - g' 地点 (第58図)

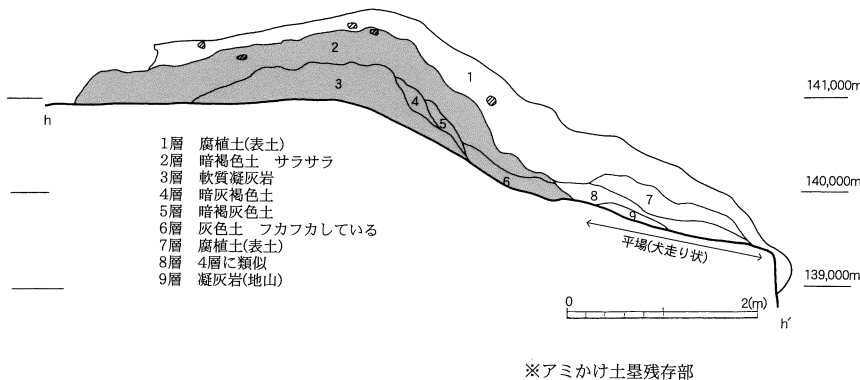
この地点は、曲輪5から豎堀状の通路にかけて設定した。トレンチは曲輪5の平場から西にむけて土塁、豎堀状の土塁、土塁にやや東西方向で設定した。土層観察の結果、曲輪5の土塁は細かく土を積上げて、やや小規模であるが、残存状況は良好であった。またその土塁から西側の豎堀状の通路にかけては急斜面となり（高さ2.2+αm）、豎堀状のややフラットな面は幅1.2mである。



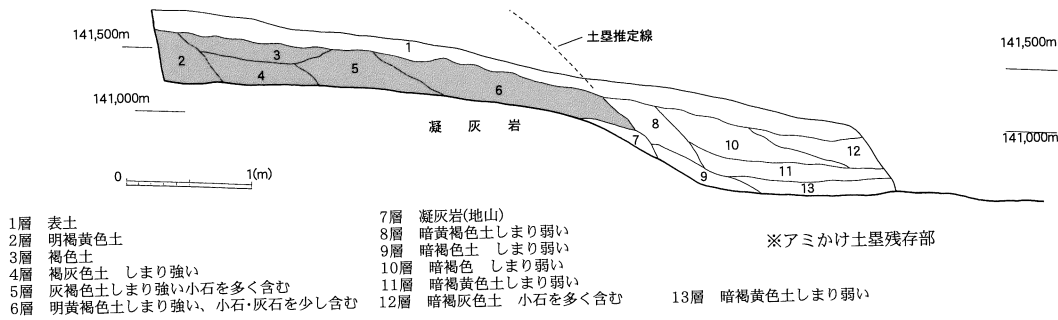
8図 g - g' 地点土層断面実測図 (1/80)

h - h' 地点 (第59図)

この地点は曲輪2の西側の土塁にあたる。東西方向にトレンチを設定し、土層観察を行った。土塁の盛土の積み土は大まかであった。また土塁から犬走り状のややフラットな面を検出し(幅2.0mほど)、そのまま切岸へと連結する構造であった。



第59図 h - h' 地点土層断面実測図 (1/80)

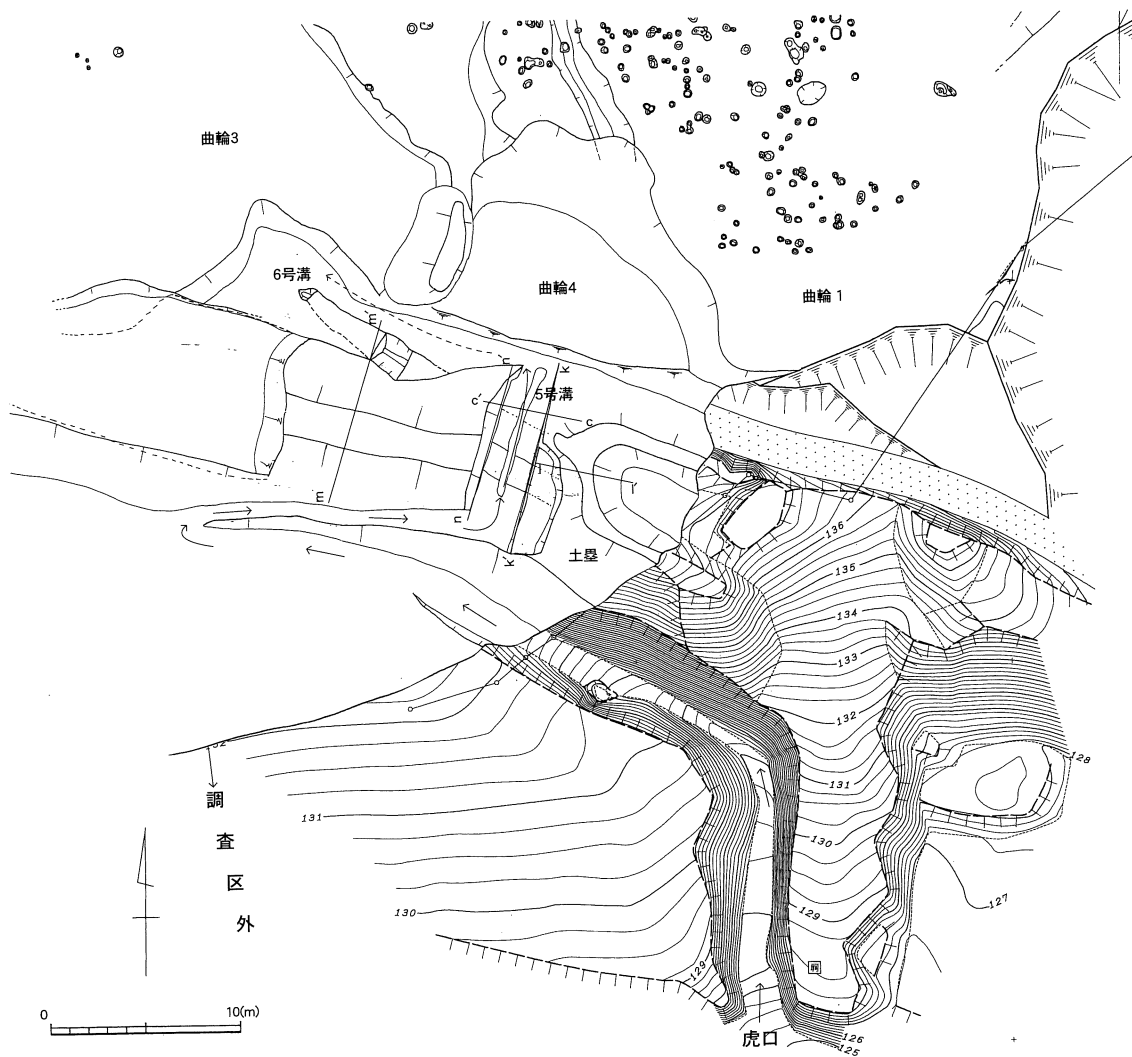


第60図 i-i'地点土層断面実測図 (1/60)

i-i' 地点(第60図)

この地点は、西側の犬走りが終息する地点に横断面と縦断面にトレンチを入れた。縦断面を掲載する。土壘が多量に流出していたが、土壘を構築していたことは最低限、確認ができた。当初、堀切から竪堀状の通路を通して、犬走りに入り、曲輪2に行く出入口があることを想定したが、土壘はやはり全周している状況である。

曲輪2の土壘は、曲輪1の土壘とは少し様相が違い、土壘構築のための掘りこみ事業や斜め積みなどは確認できなかった。土層観察でも簡易的な盛土であった。



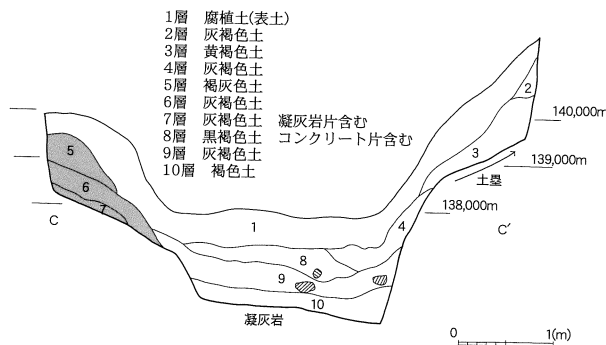
第61図 虎口遺構配置図 (1/400)

(4)虎口の調査

虎口は上門手遺跡の全体からみると南に位置している。まず上門手遺跡の南側には丘陵と丘陵に挟まれた細い谷部が形成されており、現在は水田が段々と連なっている状況である。この谷部から、北に向けて通路が開いており、14mほどいったところで、90° 近く西に屈曲する。そこから8mほど登れる状況が調査前にわかっていた。また曲輪1の南には土塁と土塁が途切れる空間があり、そこが虎口と判断した。しかし、その虎口から下方に見える大きな掘り方の切り通しから曲輪までの順路は不明瞭であった。その順路が調査で検出できるかがポイントであった。発掘調査によって、現状でわかる何度も屈曲して進入する虎口と、溝状遺構 (SD6) が土塁の下から検出できたことにより、土塁構築前の通路も合わせて確認できる結果となった。虎口だけでみると最低2時期の変遷が認められた。

(a) 土塁

土塁は、近世以後の造成によって、大きく削平を受けるが、虎口の西側に接続する土塁と曲輪2の南にある土塁とが連結すると推測する。虎口の調査も調査区外と近接するため、詳細な調査はできなかった。まず虎口の開口部には大量の土が堆積していたのでこの断面を東西軸で切り(c-c')、また虎口の東の土塁で囲まれた空間を東西軸で断面を切る(1-1')。虎口西の土塁について南北軸で土層観察を行った。(m-m', n-n')



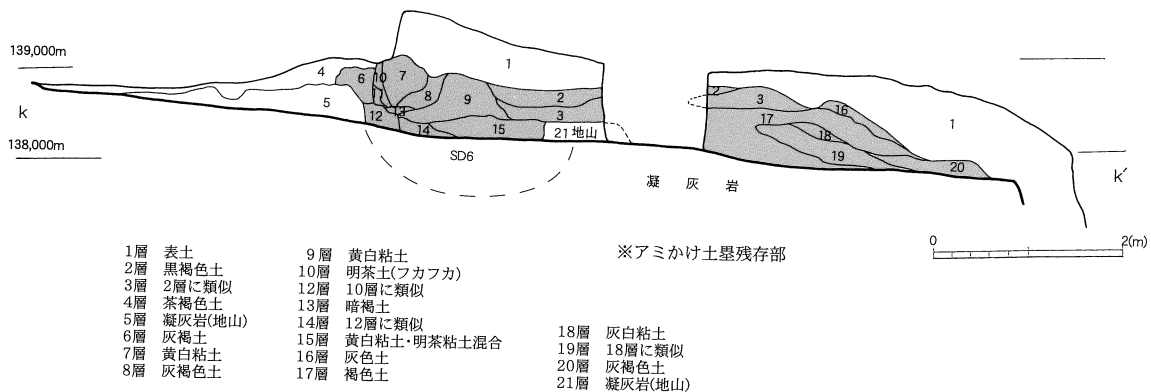
第62図 j-j' 地点土層断面図 (1/60)

j-j' 地点 (第62図)

この地点は、虎口を東西軸で切り、虎口の幅と構造を検出する目的で設定した。土層観察の結果、虎口部の幅は1.9mで、西と東側にもその堆積状況から土塁があることが確認となった。5層から7層は西側の土塁である。

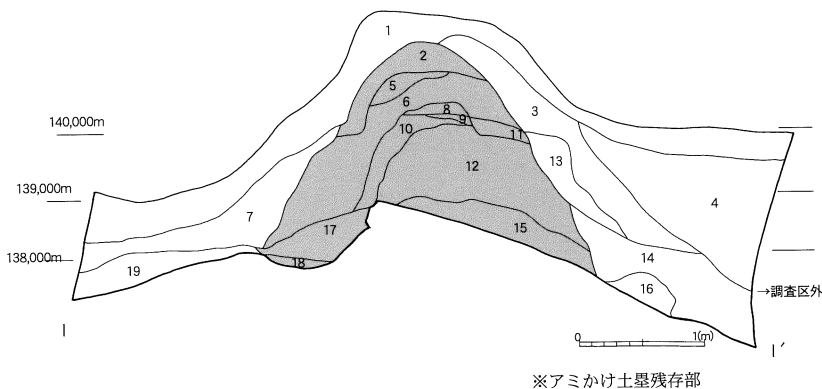
k-k' 地点(第63図)

この地点は、虎口内部の西側の土塁の南北軸でとったものである。盛土の堆積状況と凝灰岩の残存部、その隣の溝状遺構が検出できた。この溝状は土塁m-m'地点、n-n'地点でも確認ができる。



第63図 k-k' 地点土層断面実測図 (1/60)

- 1層 表土
- 2層 褐色土 部分的に灰土含む
- 3層 茶褐色土
- 4層 茶褐色土 礫混入
- 5層 褐色土 灰土少し含む
- 6層 褐色土
- 7層 茶褐色土 バサバサ
- 8層 黄褐色土 粘質
- 9層 灰土主体
- 10層 灰土主体 褐色土少し含む
- 11層 褐色土
黄白色粘土ブロックを多く含む
- 12層 灰土(2次堆積)
- 13層 明茶褐色土
- 14層 黄褐色土
- 15層 灰土主体
黄白色粘質ブロックを少量含む
- 16層 灰褐色土
- 17層 灰土主体 褐色土少量含む
- 18層 黄白色粘土
- 19層 地山凝灰岩



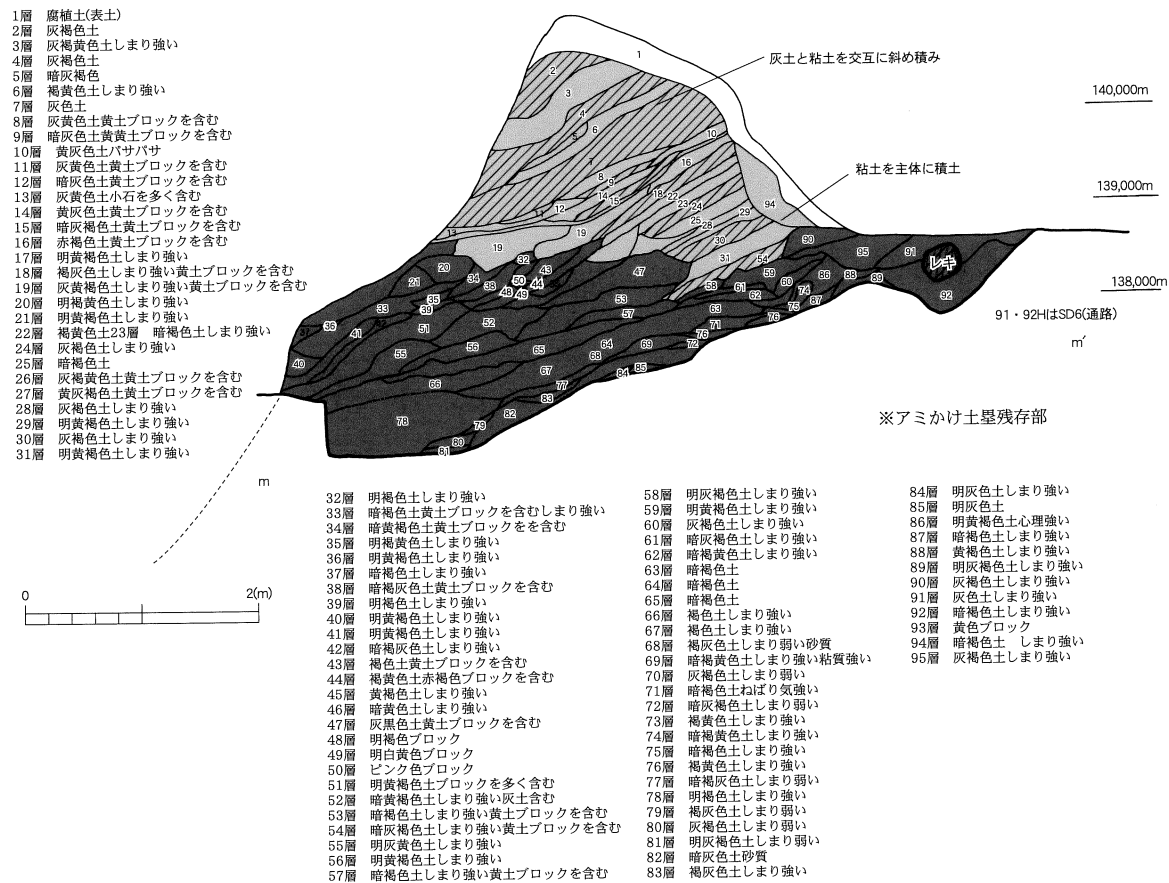
第64図 1-1' 地点土層断面実測図 (1/60)

1-1' 地点 (第64図)

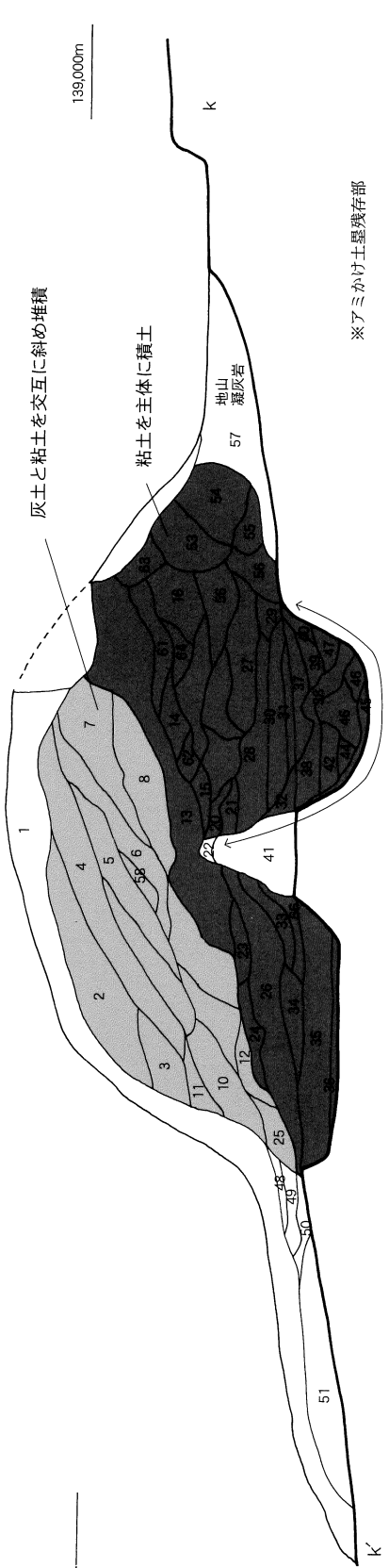
この地点は、虎口の東側に接続する土塁を東西方向でトレンチ設定したものである。積み土は細かく、大雑把に積んでいる。この地点の土塁は、東側からの尾根線を遮断するためのものと思われる。土塁の最大幅は5.6+2mである。

m-m' 地点(第65図)

この地点は、虎口の開口部から西側に接する土塁を南北軸で切った土層である。溝状遺構は91・92層である。そのあとに土塁が築かれる。土層断面観察によると、曲輪1の北側の土塁状のように掘り込み事業と斜め積み堆積を行っている。下層は褐色の粘土を主体に使っており、やや斜め積みを行っている。この段階で土塁構築時の掘りこみ事業を行っている。そしてその上に灰と粘土を交互に斜め積みしている状況が伺える。ただ、この堆積状況に時期差があるのか、もしくは一連の事業でやっているものなのかは不明である。土塁の最大幅は6.8mである、



第65図 m-m' 地点土層断面図 (1/60)



第66図 n-n'地点土層新面実測図 (1/60)

SD6 (通路)

※アミかけ土塁残存部

- | | | | | | | |
|-----|------------------|---------------------|-----|---------------------|-----|--------------------|
| 1層 | 腐植土(表土) | 黄褐色土灰石を少し含む | 29層 | 黄褐色土灰石を少し含む | 57層 | 暗褐色土しまり強い黄土ブロックを含む |
| 2層 | 暗褐色土しまり弱い | 褐黄色土しまり強い 炭化物を少し含む | 30層 | 褐黄色土しまり強い | 58層 | 明灰褐色土しまり強い |
| 3層 | 暗灰色土しまり弱い | 褐黄色土黄土ブロックを含む | 31層 | 褐黄色土黄土ブロックを含む | 59層 | 明黄褐色土しまり強い |
| 4層 | 暗褐色土しまり弱い | 明黄白色土ブロック状に入る | 32層 | 明黄白色土ブロック状に入る | 60層 | 灰褐色土しまり強い |
| 5層 | 暗灰色土しまり弱い | 暗灰褐色土しまり強い小石を多く含む | 33層 | 暗灰褐色土しまり強い小石を多く含む | 61層 | 暗灰褐色土しまり強い |
| 6層 | 黄褐色土しまり弱い | 明黄褐色土しまり強い白色粘土を含む | 34層 | 明黄褐色土しまり強い白色粘土を含む | 62層 | 暗褐色土しまり強い |
| 7層 | 暗褐色土しまり弱い | 明黄白色土しまり強い | 35層 | 明黄白色土しまり強い | 63層 | 暗褐色土 |
| 8層 | 暗灰褐色土しまり弱い | 灰黒色土 | 36層 | 灰黒色土 | 64層 | 暗褐色土 |
| 9層 | 暗褐色土しまり弱い | 明黄褐色土しまり強い | 37層 | 明黄褐色土しまり強い | 65層 | 暗褐色土 |
| 10層 | 暗褐色土しまり弱い | 明黄白色土しまり強い | 38層 | 明黄白色土しまり強い | 66層 | 褐色土しまり強い |
| 11層 | 暗褐色土しまり弱い | 暗褐色土黄土ブロックを少し含む | 39層 | 暗褐色土黄土ブロックを少し含む | 67層 | 褐色土しまり強い |
| 12層 | 暗褐色土しまり弱い | 明黄褐色土しまり強い | 40層 | 明黄褐色土しまり強い | 68層 | 褐灰色土しまり弱い砂質 |
| 13層 | 明褐色土 | 暗褐色土黄土ブロックを少し含む | 41層 | 暗褐色土黄土ブロックを少し含む | 69層 | 暗褐色土しまり弱い |
| 14層 | 褐色土 | 明黄褐色土しまり強い | 42層 | 明黄褐色土しまり強い | 70層 | 暗褐色土ねばり強い |
| 15層 | 明褐色土 黄土ブロックを含む | 暗褐色土黄土ブロックを少し含む | 43層 | 暗褐色土黄土ブロックを少し含む | 71層 | 暗褐色土しまり弱い |
| 16層 | 褐黄色土 | 褐色土赤褐色土ブロックを含む | 44層 | 褐色土赤褐色土ブロックを含む | 72層 | 暗褐色土しまり弱い |
| 17層 | 明褐色土 | 黄褐色土しまり強い | 45層 | 黄褐色土しまり強い | 73層 | 褐黄色土しまり強い |
| 18層 | 明黄褐色土 | 暗褐色土黄土ブロックを少し含む | 46層 | 暗褐色土黄土ブロックを少し含む | 74層 | 暗褐色土しまり強い |
| 19層 | 褐灰色土 黄土ブロックを含む | 灰黒色土黄土ブロックを含む | 47層 | 灰黒色土黄土ブロックを含む | 75層 | 暗褐色土しまり強い |
| 20層 | 明黄褐色土 | 明褐色土ブロック | 48層 | 明褐色土ブロック | 76層 | 褐黄色土しまり強い |
| 21層 | 明黄白色土 | 明黄色土ブロック | 49層 | 明黄色土ブロック | 77層 | 暗褐色土しまり強い |
| 22層 | 褐灰色土 | ピンク色土ブロック | 50層 | ピンク色土ブロック | 78層 | 明褐色土しまり強い |
| 23層 | 明褐色土 黄土ブロックを含む | 明黄褐色土黄土ブロックを多く含む | 51層 | 明黄褐色土黄土ブロックを多く含む | 79層 | 褐灰色土しまり弱い |
| 24層 | 明褐色土 土ブロックを含む | 暗褐色土黄土ブロックを含む | 52層 | 暗褐色土黄土ブロックを含む | 80層 | 灰褐色土しまり弱い |
| 25層 | 褐色土しまり強い | 暗褐色土黄土ブロックを含む | 53層 | 暗褐色土黄土ブロックを含む | | |
| 26層 | 明黄褐色土白色粘土ブロックを含む | 暗灰褐色土しまり強い黄土ブロックを含む | 54層 | 暗灰褐色土しまり強い黄土ブロックを含む | | |
| 27層 | 褐黄色土 | 明灰黄色土しまり強い | 55層 | 明灰黄色土しまり強い | | |
| 28層 | 黄褐色土しまり強い | 明黄褐色土しまり強い | 56層 | 明黄褐色土しまり強い | | |

n-n' 地点 (第66図)

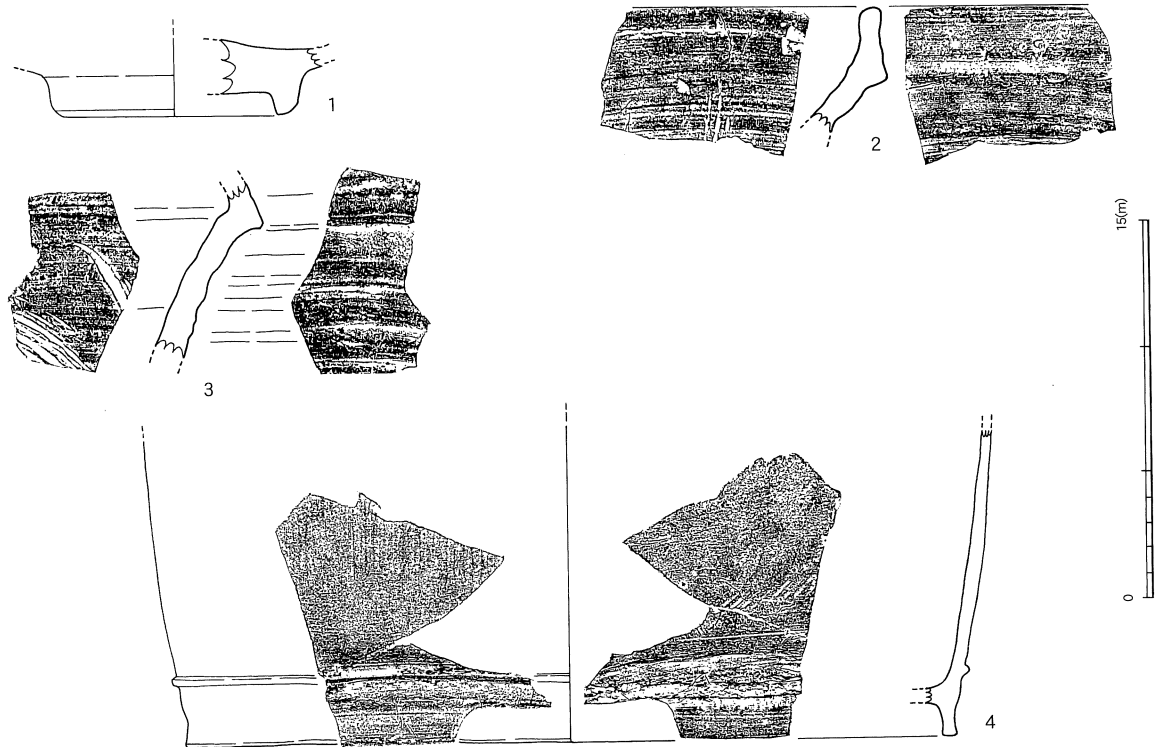
この地点は、虎口の西側にある土塁を南北方向でトレンチ設定した。土層観察より、溝状遺構と土塁の積み土を確認した。溝状遺構は土塁によって埋められているため、土塁構築よりは古い。また土塁は2つの方法で盛られている。1つは褐色の粘土を主体的に使って盛る方法とあとは、灰土と粘土を交互に積みながら斜め堆積していているということである。

土塁の最大幅は約6.2mである。また南側のフラットな面は虎口から下への通路である。

虎口周辺部 中世表採遺物 (第67図)

虎口周辺部にはいくつかの中世遺物が表採資料として拾えた。

1は中国龍泉窯青磁碗の高台部であろう。2は備前焼播鉢口縁部片である。3は同じく備前焼播鉢、口縁部で、交叉摺り目であると思われる。4は瓦質の火鉢である。脚が付き、底部外面に1条の突帯が付く。



第67図 虎口中世表採遺物実測図 (1/3)

第1表 中世堀立柱建物跡の計測表

掘立柱建物跡(SB)	主軸方位	梁行(m)	梁行(m)	身舎面積	備 考
1号建物跡(SB1)	N55° E	西側 1.6+1.4+1.0(北より) 東側 1.9+2.1(北より) 1.7(庇)	北側 1.9+2.0(西より) 南側 3.9(西より)	15.6m ²	片面庇
2号建物跡(SB2)	N30° W	西側 1.2+1.6(西より) 南側 2.8+	西側 2.3+2.2+1.9(北より) 東側 2.6+3.8(北より)	17.92m ²	
3号建物跡(SB3)	N45° E	西側 2.5+1.9(北より) 東側 2.6+1.8(北より)	北側 2.1+2.3(西より) 南側 2.6+1.8(西より)	19.36m ²	
4号建物跡(SB4)	N63° W	西側 4.8 東側 (2.6)+2.2(北より)	北側 1.5+1.6+(0.9)(西より) 南側 2.2+2.8(西より)	24.0m ²	
5号建物跡(SB5)	N0° E	西側 4.1+2.4(北より) 3.1(庇) 東側 4.1+2.4(北より)	北側 8.4 南側 2.6+2.6+3.2	54.60m ²	片面庇
6号建物跡(SB6)	N90° E	西側 2.5+2.5(北より) 東側 2.7+2.3(北より)	北側 2.0+4.2(西より) 南側 2.0+2.2+2.0(西より)	31.0m ²	
7号建物跡(SB7)	N6° E	北側 3.2 南側 (3.2)	西側 2.0+(2.0)(北より) 東側 2.0+2.0(北より)	12.8m ²	
8号建物跡(SB8)	N45° W	西側 2.4 東側 (2.4)	北側 2.5+2.1+2.2(西より) 南側 1.9+()+() (西より)	16.3m ²	
9号建物跡(SB9)	N90° E	西側 2.0+2.0(北より) 東側 4.0	北側 4.0+2.0(西より) 南側 2.0+2.0+2.0(西より)	24.0m ²	
10号建物跡(SB10)	N38° W	北側 1.6+1.2(東より) 1.2(庇) 南側 1.5+1.3(東より) 1.2(庇)	東側 3.2 西側 1.8+1.4(北より)	12.32m ²	片面庇
11号建物跡(SB11)	—	2.0+2.0+2.0+2.0+2.0… (東より)		—	柵列? 掘立柱建物跡?
12号建物跡(SB12)	N42° W	西側 4.6 東側 2.3+2.3(南より)	北側 3.4+3.2+4.2(西より) 南側 3.4+3.4+4.0(西より)	49.6m ²	
13号建物跡(SB13)	N90° W	西側 2.4 東側 2.4	北側 2.0+2.0(西より) 南側 4.0	9.6m ²	
14号建物跡(SB14)	N5° E	北側 3.6 南側 1.8+1.8(西より)	西側 1.9+2.2+1.0(北より) 東側 1.4+1.9+1.8(北より)	18.36m ²	
15号建物跡(SB15)	N15° E	北側 2.2 南側 2.2	西側 2.4 東側 2.4	5.28m ²	檜台跡か。
16号建物跡(SB16)	N25° E	西側 3.2 東側 3.2	北側 3.6 南側 3.6	11.52m ²	檜台跡か。
17号建物跡(SB17)	N0° E	北側 3.8 1.4(北側庇) 南側 3.8 1.4(南側庇)	西側 2.6+5.0(北より) 東側 2.6+2.5+2.5(北より)	28.8m ²	
18号建物跡(SB18)	N41° W	北側 3.0 南側 3.0	西側 1.8+2.4+1.8(北より) 東側 2.6+3.4(北より)	18.0m ²	
19号建物跡(SB19)	N70° W	西側 4.0 東側 (4.0)	北側 2.3+1.8+2.2+1.5(西より) 南側 2.5+1.7+()+() (西より)	31.2m ²	
20号建物跡(SB20)	N86° E	西側 2.2 東側 2.2	北側 3.2 南側 3.2	7.04m ²	檜台跡か。

第2表 中世遺物観察表(1)

遺構番号	挿図番号	実測番号	種類	器種	法量(cm) ()は復元					成形	調整及び装飾		焼成	胎土(石材)	色調	備考
					口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径	重量(g)		外面	内面				
表探	6-1	173	石器	剥片	6.2	4.5	2.0	—	58.0	—	—	—	—	流紋岩	—	—
柱4	12-1	66	土師器	坏	—	—	5.4	—	—	ロクロ	底部:ヘラナデ	ユビナデ	良好	白粉子・赤粉子・黒粉子・黄粉子・灰粉子・赤色・白色・赤色・白色・赤色・白色	淡褐色	—
柱13	12-2	68	土師器	坏	15.0	4.9+	—	—	—	ロクロ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	白粉子・赤粉子・黒粉子・黄粉子・灰粉子・赤色・白色・赤色・白色・赤色・白色	淡褐色	—
柱13	12-3	68	土師器	甕	(19.0)	7.4+	—	—	—	ロクロ	ヨコナデ, 指圧痕	ヨコナデ, 指圧痕	良好	白粉子・赤粉子・黒粉子・黄粉子・灰粉子・赤色・白色・赤色・白色・赤色・白色	淡褐色	—
柱12	12-4	170	石製品	砥石	8.3+	4.6	—	—	247.4	—	—	—	—	礫岩	—	両面とも摩滅している
柱2	12-5	174	青磁	碗	—	—	—	—	—	ロクロ	緑釉 蓮弁文	緑釉	良好	緻密	—	内外に貫入あり
表探	12-6	試掘-1	土師器	坏	12.4	4.1	7.4	—	—	—	ヨコナデ 底部: ヘラ切り後、ナデ。	ヨコナデ、ナデ	良好	内面: 長石、 白色粉子、赤 色粉子。	淡明褐色	ほぼ完形
表探	12-7	154	土師器	坏	—	2.6+	6.6	—	—	ロクロ	ナメスナデアゲ後、 高台部ユビオサエ	ヨコナデ、ナデ	良好	石英	内外: 赤褐色、 赤色粉子。	両面とも摩滅している
SK1	14-1	100	鉄製	釘	5.1	—	—	—	11.2	—	—	—	—	—	—	—
	14-2	99	鉄製	釘	6.5	—	—	—	7.3	—	—	—	—	—	—	—
	14-3	102	鉄製	釘	4.0	—	—	—	4.4	—	—	—	—	—	—	—
	14-4	101	鉄製	釘	5.2	—	—	—	6.6	—	—	—	—	—	—	—
	14-5	103	鉄製	釘	5.3	—	—	—	8.4	—	—	—	—	—	—	—
北東斜面中世遺物表探	15-1	86	青磁	碗	—	2.5+	—	—	—	ロクロ	施釉: 緑釉 高台 の内側無釉	施釉: 全面、緑釉	良好	緻密	オリーブ色	中国龍泉窯産
	15-2	148	青磁	碗	—	—	—	—	—	ロクロ	施釉 オリーブ色 繪蓮弁文	施釉 オリーブ色	良好	緻密	オリーブ色	全面に貫入がある
	15-3	87	備前焼	鉢	—	5.0+	—	—	—	ロクロ	—	摺り目(1cmに4 本単位)	良好	白粉子など	茶褐色	乘岡編年中世5期
	15-4	65	備前焼	鉢	—	4.2+	12.2	—	—	ロクロ	ナデアゲ	ヨコナデ後、摺り 目	良好	小石少ない	茶褐色	—
	15-5	88	備前焼	鉢	—	10.2+	—	—	—	—	口縁部ヨコナデ、 下から上に行	ヨコナデ、指圧痕	良好	赤色粉子・白 色粉子・角 石・灰石	外面: 赤褐色 内面: 淡茶 褐色	—
	15-5	89	瓦質	火鉢	—	6.8+	—	—	—	—	口縁部ヨコナデ 口縁部に雷文のスタンプ	ナデ	良好	赤色粉子・角 石・灰石・ 石英・金剛石	茶褐色	—
	15-7	163	銅製品	銭貨	—	2.4	—	0.6方形	—	—	—	—	—	—	—	「元祐通寶」 北宋(1086年初鑄年)
	15-8	168	石製品	上白	—	21.6	13.2+	2.7(軸)	—	—	—	—	—	—	—	—
	15-9	197	石製品	火焰宝珠	25.4	11.7(軸径)	—	—	—	—	—	—	—	—	凝灰岩	—
曲輪1 埴土層中 出土遺物	17-1	48	京都系土師器	皿	14.6	2.3	7.7	—	—	非ロクロ	ヨコナデ 底部: 圧痕、ナデ	ヨコナデ 底部ナデ	良好	砂粒少ない 精緻	外: 淡褐色 内: 灰褐色	完形
	17-2	49	京都系土師器	皿	9.7	2.5	2.8	—	—	非ロクロ	ヨコナデ、指圧痕、 圧痕	ヨコナデ	良好	砂粒少ない 精緻	灰茶褐色	完形
	17-3	50	京都系土師器	皿	9.0	2.0	2.7	—	—	非ロクロ	ヨコナデ 底部: 圧痕、ナデ	ヨコナデ 底部ナデ	良好	砂粒少ない 精緻	明褐色	完形
	17-4	91	瓦質	火鉢の脚	—	3.2+	(31.0)	—	—	—	突部箇所は丁寧な ナデ	ナデ	良好	白色、赤色、 黒色・角石・ 灰石・長石	淡黄褐色 突部は黒褐色	スス付着
	17-5	8	土製	壁土	—	16.6+	3.8	—	—	—	フラットに仕上げる	竹の痕跡が残る	良好	—	—	2次焼成を受ける
柱22	33-1	143	青磁	碗	(12.2)	3.4+	—	—	—	ロクロ	施釉: 緑釉 口縁部: 退化した雷文	施釉: 緑釉	良好	緻密	淡緑灰色	—
柱25	33-2	142	染付	皿	(12.6)	2.0+	—	—	—	ロクロ	施釉: 透明釉 文様: 唐草文	施釉: 透明釉	良好	緻密	青灰色	景徳鎮窯
柱23	33-3	144	白磁	皿	(9.8)	4.0	(4.6)	—	—	ロクロ	施釉: 透明釉 底部は無釉	施釉: 透明釉	良好	緻密	淡灰色	—
柱51	33-4	149	備前焼	播鉢	—	—	—	—	—	ロクロ	ヨコナデ、ユビナ デ、指圧痕	ヨコナデ、摺り目(交 叉摺り目か)	良好	緻密	茶褐色	乘岡編年近世1期
柱26	33-5	145	瓦質	火鉢	—	—	—	—	—	—	ヨコヘラミガキ 貼り付け三角突部	ナデ	良好	—	内: 暗灰色 外: 灰色	—
柱20	33-6	51	京都系土師器	皿	10.6	2.0	4.8	—	—	非ロクロ	丁寧なヨコナデ 外底: 圧痕、ナデ	丁寧なナデ、ナデア ゲ	良好	砂粒少ない 精緻	外: 明褐色 内: 淡褐色	ほぼ完形(1/6欠→故意か)
柱24	33-7	52	京都系土師器	皿	12.0	2.5	5.4	—	—	非ロクロ	ヨコナデ 底部: 指圧痕、圧痕	ヨコナデ、ナデアゲ	良好	砂粒少ない 精緻	淡褐色、赤 色・黒色	ほぼ完形(1/6欠→故意か) スス付着あり
柱51	33-8	146	京都系土師器	皿	(10.6)	2.9	(2.5)	—	—	非ロクロ	ナデ、ユビオサエ	ナデ	良好	砂粒少ない 精緻	外: 淡褐色 内: 明褐色	—
柱51	33-9	147	在地系土師器	小坏	(8.8)	1.3	(6.0)	—	—	ロクロ	ヨコナデ 底部: 回転系切	ヨコナデ	良好	砂粒少ない 精緻	明茶褐色	—
柱25	33-10	141	染付	皿	(13.6)	3.1	(8.6)	—	—	ロクロ	施釉: 透明釉 染付: 底部に花文・玉取獅子	施釉: 透明釉 染付: 底部に花文・玉取獅子	良好	緻密	青灰色	小野分類B1群
SK2	35-1	5	五彩	碗	(12.0)	4.7+	—	—	—	ロクロ	施釉: 透明釉 口縁部に界線	施釉: 透明釉 口縁部に界線	良好	緻密	施釉: 藍色 茶褐色	中国景徳鎮窯五彩磁器碗
	35-2	78	染付	皿	(11.2)	1.8+	—	—	—	ロクロ	施釉: 透明釉	施釉: 透明釉	良好	緻密	施釉: 藍色 茶褐色	中国景徳鎮窯五彩磁器碗
	35-3	4	染付	皿	(11.6)	2.4	(6.0)	—	—	ロクロ	施釉: 透明釉 染付: 花鳥折枝 底部: 洪武 年造か	施釉: 透明釉 見込: 山水人物 白緑・青緑	良好	緻密	淡青灰色 文様: 藍色	中国景徳鎮窯 小野分類B群
	35-4		青磁	盤	—	—	—	—	—	ロクロ	施釉: 緑釉	施釉: 緑釉 線蓮弁文	良好	緻密	—	中国龍泉窯産
	35-5	80	朝鮮陶器	碗	(15.0)	2.8+	—	—	—	ロクロ	施釉: 薄い透明釉	施釉: 薄い透明釉	良好	緻密	暗灰色	朝鮮王朝産か。
	35-6	2	備前焼	壺	(14.0)	6.2+	—	—	—	ロクロ	—	—	良好	緻密	黄褐色、灰 オリーブ、暗 褐色	乘岡編年近世1期
	35-7	3	備前焼	播鉢	肩径(33.2)	—	—	—	—	ロクロ	—	—	良好	緻密	淡茶褐色(外) 暗灰色(内)	—
	35-8	53	中国陶器	壺	—	—	—	—	—	ロクロ	施釉: 黒褐色	—	良好	緻密	—	内外に貫入あり
SK3	36-1	6	京都系土師器	皿	(11.8)	1.9+	—	—	—	非ロクロ	ヨコナデ、指圧痕、 寄せジク	ヨコナデ、ナデアゲ	良好	砂粒少ない 精緻	明褐色	—
	36-2	79	染付	皿	—	3.8+	—	—	—	ロクロ	施釉: 透明釉	施釉: 透明釉	良好	緻密	灰青釉 文様: 暗褐色	中国漳州窯
SK4	35-9	10	土師質	火鉢	—	7.3+	—	—	—	—	ヨコナデ、ナデ	ナデ	良好	砂粒少ない 白色粉子	茶褐色、 明褐色	—
SK5	35-10	9	備前焼	播鉢	—	3.8+	(14.0)	—	—	ロクロ	ヨコナデなど	ナデ後、タテカキメ のチナメカキメ	良好	砂粒少ない 白色粉子	外: 淡褐色 内: 暗褐色	底部残存 乘岡編年近世1期
	35-11	8	備前焼	播鉢	—	5.9+	—	—	—	ロクロ	ヨコナデ	ナデ、チナメカキメ	良好	砂粒少ない 白色粉子	外: 淡褐色 内: 暗褐色	口縁部残存 乘岡編年近世1b期
	35-12	7	京都系	皿	(10.6)	2.2	4.7	—	—	非ロクロ	指圧後、ヨコナデ、 指圧痕、ヘラ痕	指圧後ナデ、ナデア ゲ	良好	砂粒少ない 精緻	淡明褐色	—
1号地下式土坑	39-1	40	青磁	碗	—	3.8+	(5.2)	—	—	ロクロ	施釉: 緑釉 高台直付 を越え、施釉、底部無 釉、線蓮弁文	施釉: 緑釉 全面 底部に透かし文様	良好	緻密	淡緑灰色	中国龍泉窯産 上田分類B-IV-a類
	39-2	36	青磁	碗	(12.0)	6.9	5.0	—	—	ロクロ	施釉: 緑釉 全面、線 蓮弁文、外底、裏茶	施釉: 緑釉 全面 施釉: 緑釉	良好	緻密	緑灰色	中国龍泉窯産 上田分類B-IV類

第3表 中世遺物観察表(2)

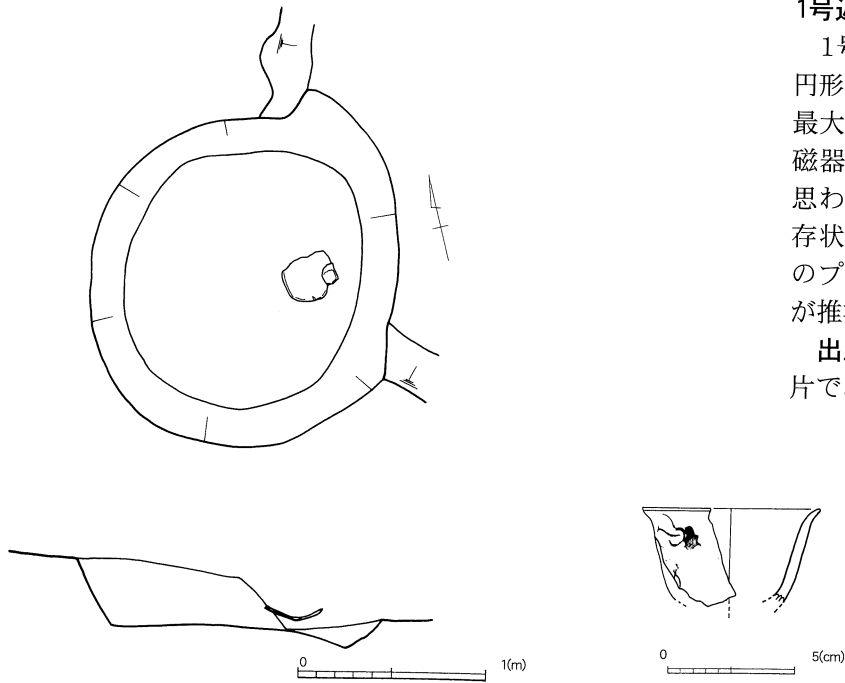
遺構番号	押図番号	実測番号	種類	器種	法量 (cm) ()は復元					成形	調整及び装飾		焼成	胎土(石材)	色調	備考	
					口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径	重量(g)		外面	内面					
1号地下式土坑	39-3	41	青磁	碗	(12.4)	3.8+	—	—	—	ロクロ	施釉:緑釉。口縁部、退化した雷文帯。 胎土:透明釉全面。高台部分外に一本線、牡丹唐草。	施釉:緑釉	良好	緻密	淡灰褐色	中国龍泉窯産 上田分類C-Ⅱ類	
	39-4	37	染付	皿	—	1.0+	(7.2)	—	—	ロクロ	施釉:透明釉全面。 胎土:玉取罌子。	施釉:透明釉全面。 胎土:玉取罌子。	良好	緻密	灰白色、 文様:藍色	中国景德鎮窯産 小野分類D1群	
	39-5	38	染付	皿	(9.2)	2.2	4.8	—	—	ロクロ	施釉:透明釉。高台部分外に一本線、牡丹唐草。	施釉:透明釉全面。 胎土:十字花文	良好	緻密	—	中国景德鎮窯産 小野分類D1群	
	39-6	154	青磁 青花	碗	(14.8)	5.1	5.6	—	—	ロクロ	施釉:緑釉。高台底無釉。	施釉:透明釉。胎土に花文。胎土部に5本の青線	良好	緻密	外:淡灰褐色 内:青灰白色 底付:藍色	中国景德鎮窯産	
	39-7	44	土師質	火鉢(風炉?)	(35.4)	8.0	(33.4)	—	—	ロクロ	ヨコナデ、指圧痕。底部にモミ、ワラ状の圧痕。	ヨコナデ、指圧痕	良好	緻密	砂粒(角四石、角四石)	2次焼成を受ける。 39-8と同一個体か。	
	39-8	35	土師質	脚	—	5.9+	5.4~5.7	—	—	手づくね	指圧痕、コピナデ		良好	砂粒少ない	明淡褐色	39-7と同一個体か。	
	39-9	165	備前焼	甕	(36.0)	(41.0)	—	—	—	ロクロ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	密	明茶褐色	乗岡編年中世4a~5b期	
	40-1	172	石製品	茶臼	(38.6)	4.5+	—	—	—	—	入念な研磨	入念な研磨			安山岩製	灰褐色	上臼。
	40-2	171	石製品	茶臼	(51.4)	15.6	(52.4)	—	—	—					凝灰岩製	灰色	
2号地下式土坑	43-1	43	金属製品	不明	—	2.6	0.2	—	8.4	—				鉛製	灰白色	メダル状のもの。分銅?メダイ?	
3号地下式土坑	43-2	42	白磁	菊皿	—	3.8+	—	—	—	型打ち			良好	緻密	白色	中国景德鎮窯産 森田分類E群	
2号溝(SD2)	46-1	2	染付	皿	(11.8)	2.6	(6.4)	—	—	ロクロ	施釉:透明釉	施釉:透明釉	良好	緻密	灰白色	中国景德鎮窯産 小野分類D1群	
	46-2	5	染付	皿	—	1.3+	(4.2)	—	—	ロクロ	施釉:透明釉 外底:荳蔻底	施釉:透明釉 内底:「寿」字か	良好	緻密	灰白色	中国景德鎮窯産 小野分類D1群	
	46-3	9	土師質	脚付鉢	(13.4)	5.3	(13.4)	—	—	—	ヨコナデ、指圧痕	ヨコナデ、指圧痕	良好	砂粒少ない 長石	淡黄褐色	火鉢?風炉?	
	46-4	11	瓦質	火鉢	—	6.7+	—	—	—	ロクロ	ヨコナデ 口縁部: 花文スタンプあり	ヨコナデ	良好	砂粒少ない 黒石、角四石、長石	灰色		
	46-5	10	瓦質	火鉢	—	4.0+	—	—	—	ロクロ	ナデ、口縁部: 雷文スタンプあり	剥離のため不明	良好	砂粒少ない 黒石、角四石、長石	外:黒色 内:淡茶褐色		
	46-6	7	瓦質	火鉢	—	4.3+	—	—	—	ロクロ	ナデ 胴部下:スタンプあり	剥離のため不明	良好	砂粒少ない 黒石、角四石、長石	橙褐色		
	46-7	104	備前焼	壺	頸部:(18.2)	8.2+	—	—	—	ロクロ	自然釉かかる ヘラナデ、カキメ	ナデ	良好	密	浅黄色・ 黒褐色	主郭北土塁の表採と接合	
	46-8	4	瓦質	火鉢	—	10.5+	(31.2)	—	—	ロクロ	ナデ 胴部下:スタンプあり	底部:縦方向ハケナデ 後ヨコナデ、胴部に指 圧痕、ヨコナデ	良好	砂粒少ない 黒石、角四石、長石	淡黄褐色		
	46-9	3	瓦質	火鉢	—	11.5+	(26.8)	—	—	ロクロ	上部、ヨコナデ、鼻、 下部、ヨコナデ、鼻、 ヨコナデ	上部、ヨコナデ、指 圧痕、底部、ナデ、指 圧痕	良好	砂粒少ない 黒石、角四石、長石	灰茶褐色	外側にスス付着。	
	46-10	6	瓦質	火鉢	—	6.7+	(28.4)	—	—	ロクロ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	砂粒少ない 白色、黒石、 角四石、長石	黒灰色		
	46-11	23	備前焼	甕	—	8.5+	(34.4)	—	—	—	タテハケ、ナデ 指圧痕	ナデ	良好	砂粒 白色粒子	赤茶褐色		
	47-12	93	石製品	白	—	34.4	4.5+	—	358.9g	—	—	—	—	—	凝灰岩	暗灰色	上臼
	47-13	96	石製品	白	—	(35.6)	4.7+	—	570.1g	—	—	—	—	—	凝灰岩	暗灰色	上臼
	47-14	95	石製品	白	—	(36.0)	7.5	—	4300g	—	—	—	—	—	凝灰岩	暗灰色	上臼
	47-15	97	石製品	白	挽き手口 奥行き2.7	(31.0)	10.5	—	4500g	—	—	—	—	—	凝灰岩	暗灰色	上臼
	47-16	92	石製品	白	挽き手口 奥行き2.7	(37.4)	9.6	4.4	3700g	—	—	—	—	—	凝灰岩	暗灰色	上臼
	47-17	94	石製品	白	(38.0)	(29.6)	11.5	—	1500g	—	—	—	—	—	凝灰岩	暗灰色	外面に工具痕あり 下臼
d-d' 地出土	51-1	139	瓦質	火鉢	(34.2)	7.3+	—	—	—	ロクロ	ヨコナデ、ナデ 口縁部:花文スタンプあり	ヨコナデ、ナデ	良好	凝灰岩 内:黄灰色、 外:黄灰色			
曲輪I表探遺物	53-1	110	京都系 土師器	皿	(12.0)	2.3	(5.0)	—	—	非ロクロ	ナデ、指圧痕	ナデ、指圧痕	良好	砂粒少ない 茶色粒子、白 色粒子	淡茶褐色		
	53-2	106	京都系 土師器	皿	(10.4)	2.3	(3.8)	—	—	非ロクロ	ヨコナデ、指圧痕	ヨコナデ、ナデ、指 圧痕	良好	砂粒少ない 茶色粒子	淡茶褐色		
	53-3	109	京都系 土師器	皿	(10.6)	2.4	(2.9)	—	—	非ロクロ	ヨコナデ、指圧痕	ナデ	良好	砂粒少ない 茶色粒子、 白色粒子	淡茶褐色		
	53-4	107	京都系 土師器	皿	(9.6)	2.5	(2.4)	—	—	非ロクロ	ヨコナデ、指圧痕	ヨコナデ、ナデ	良好	砂粒少ない 茶色粒子	淡黄褐色		
	53-5	108	京都系 土師器	皿	(8.6)	1.8	(3.8)	—	—	非ロクロ	ヨコナデ、指圧痕	ヨコナデ、ナデ	良好	砂粒少ない 茶色粒子	淡黄褐色		
	53-6	105	京都系 土師器	皿	(9.4)	2.0	(3.4)	—	—	非ロクロ	ヨコナデ、指圧痕、 底部、板状圧痕	ヨコナデ、ナデ	良好	砂粒少ない 白色粒子、 茶色粒子	黄褐色		
	53-7	90	土製	火鉢	—	6.2+	(28.0)	—	—	ロクロ	ヨコナデ 胴部下 に1条貼付突帯	ヨコナデ	良好	砂粒少ない 白色粒子、 茶色粒子	淡黄褐色		
	53-8	70	白磁	皿	(11.8)	2.4	(6.4)	—	—	ロクロ	施釉	施釉	良好	砂粒少ない 白色粒子、 茶色粒子、 角四石、 長石	暗灰色	中国産 森田分類E群	
SK10	56-1	45	京都系 土師器	皿	13.0	2.9	5.0	—	—	非ロクロ	ヨコナデ、指圧痕	ヨコナデ、指圧痕	良好	緻密	明淡黄褐色	完形	
	56-2	46	京都系 土師器	皿	12.8	2.2	5.6	—	—	非ロクロ	丁寧なヨコナデ、底部に 圧痕、ヘラ状工具ナデ	丁寧なヨコナデ	良好	砂粒少ない 角四石	淡灰褐色	完形	
	56-3	47	京都系 土師器	皿	13.3	2.4	6.9	—	—	非ロクロ	丁寧なヨコナデ、 底部に圧痕	丁寧なヨコナデ	良好	砂粒少ない 角四石 茶色粒子	明淡黄褐色	完形	
虎口部表探遺物	67-1	122	青磁	碗	—	1.9+	(8.6)	—	—	ロクロ	施釉:緑釉 高台底 付内側~底部無釉	施釉:緑釉	良好	緻密	淡緑灰色	内外に貫入あり 上田分類 類	
	67-2	129	備前焼	搦鉢	—	5.0+	—	—	—	ロクロ	ナデ	ナデ後カキメ	良好	緻密	暗赤灰色	乗岡編年中世5b期	
	67-3	84	備前焼	搦鉢	—	6.9+	—	—	—	ロクロ	ヨコナデ	ヨコナデ後カキメ (交互摺目か)	良好	緻密	暗灰色	乗岡編年近世I期	
	67-4	111	瓦質	火鉢	—	16.0+	(41.0)	—	—	ロクロ	ヨコナデ、ヘラミガキ 胴部下に1条突帯あり	ヨコナデ、ヘラナ デ	良好	緻密	暗灰色		

(5)近世の調査

近世の調査で検出した遺構は近世墓2基、溝2条、土坑5基である。また特に曲輪2周辺の土塁表土からかなり多くの近世遺物が表採できた。これも掲げることにする。

(a) 土墳墓

近世の土墳墓は、曲輪1の南側で2基見つかった。



第68図1号近世墓実測図 (1/40) ならびに出土遺物実測図 (1/3)

1号近世墓(第68図)

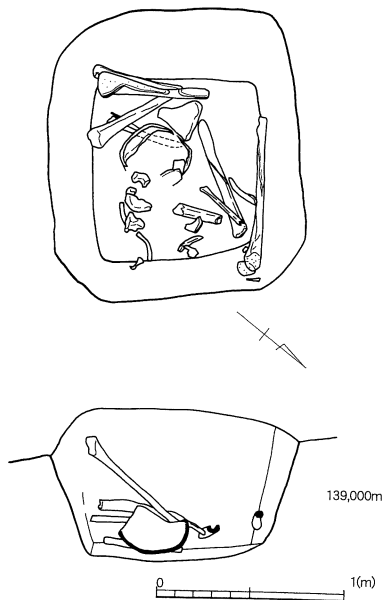
1号近世墓は、平面プランはほぼ円形である。東西軸m、南北軸1.7m、最大深0.5mである。遺物は近世陶磁器が1点と人骨の頭部だろうと思われるものが1点出土した。残存状況はあまり良好でないが、そのプランより早桶を利用したことが推測される。

出土遺物は1点で肥前染付け小碗片である。

2号近世墓 (第69図)

2号近世墓は、1号近世墓のすぐ東で検出された。平面プランは隅丸の長方形を呈し、長軸は1.5m、短軸は1.2mで、深さは0.6mである。人骨が良好に残っており、頭蓋骨、脚などの骨が残存していた。この近世墓もそのプランから桶などを利用したものであろう。

出土遺物はない。



第69図2号近世墓実測図 (1/40)

(b) 土坑

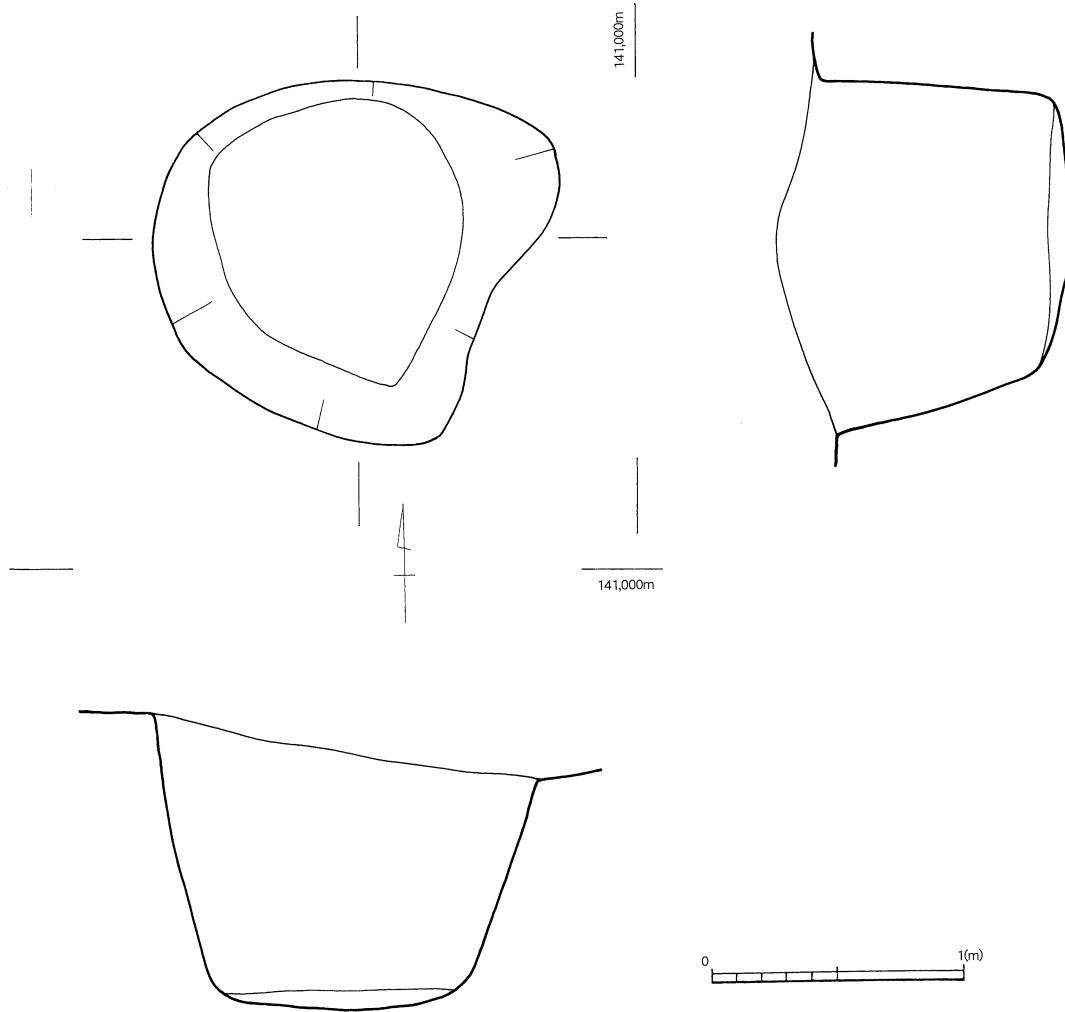
近世の土坑は、曲輪2から検出されている。

6号土坑 (SK6) (第70図)

この土坑は、曲輪2に位置し、3号溝よりも少し西に位置する。

平面プランは不定形な円形である。長軸は1.7mで、短軸は1.04mである。最大深は1.2mを測る。

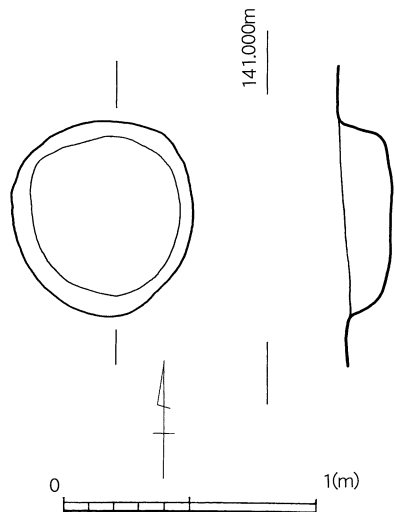
出土遺物(第71図)は19点図示した。1は肥前磁器で染め付け端反碗である。内底は蛇の目である。18世紀後半の所産である。2は肥前磁器広東碗である。1780~1810年製作。3は肥前磁器染付け小碗で、18世紀後半である。4は肥前磁器染付け碗で、外面は二重網目文である。18世紀後半の製作。5・6は肥前磁器で広東碗である。1780~1810年の製作。7は肥前磁器染付け皿で、18世紀後半である。8は肥前磁器の仏飯器である。9は唐津焼、火溶れ。17~18世紀の製作。10は成形ロクロで、産地、時期とも不明である。11は磁器染付け小碗である。12は肥前磁器染付端反碗で1820~1860年製作。13は肥前磁器染付碗で、19世紀の所産である。14は磁器小坏。15は肥前磁器染付端反碗で、1820~1860年の製作。16は関西系陶器の蓋である。18~19世紀の所産。17は関西系陶器で、鉢。18は瓦質土器在地産の火鉢。19世紀後半か。19は唐津系陶器播鉢。20は砥石で、天草石の利用か。



第70図 6号土坑 (SK6) 実測図 (1/30)



第71图 6号土坑 (SK6) 出土遗物实测图 (1/3)

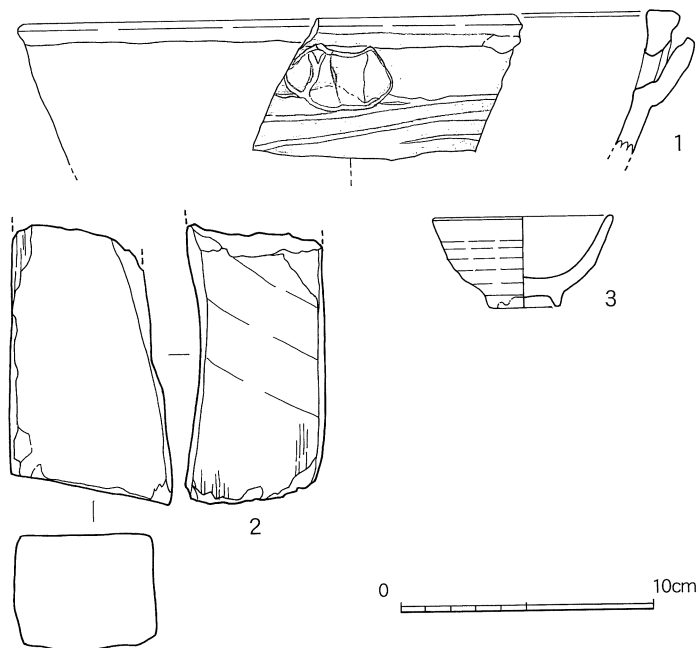


8号土坑 (SK8) (第72図)

8号土坑は曲輪2の3号溝から東側に位置している。平面プランはやや楕円形ある。長軸は0.8m、短軸は0.7mである。深さは0.2mである。遺物は多く出土した。

出土遺物 (第73図) は、1は関西系陶器で、片口の鉢である。19世紀の所産。2は磁器小碗で、18世紀後半～19世紀代の所産。3は砥石で、重さ648.4gである。

第72図 8号土坑(SK8)実測図 (1/30)

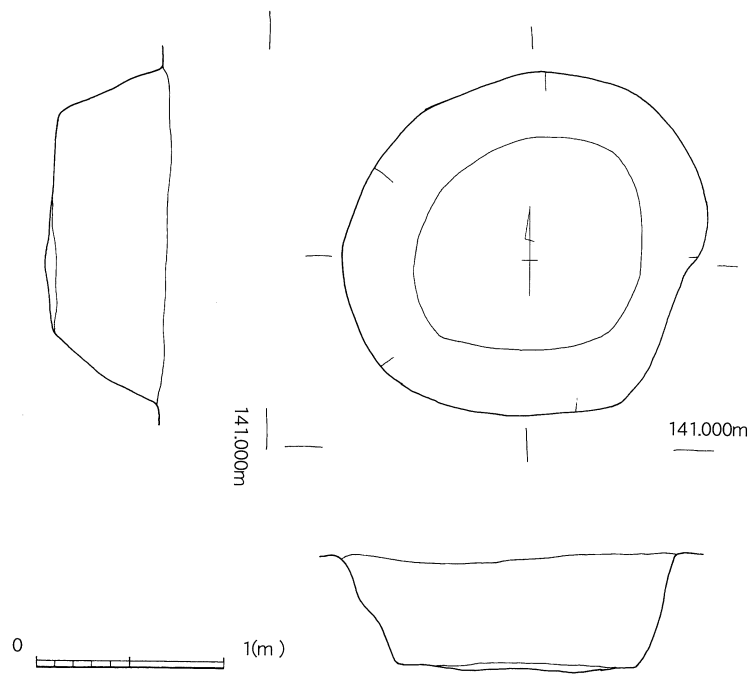


第73図 8号土坑出土遺物実測図 (1/3)

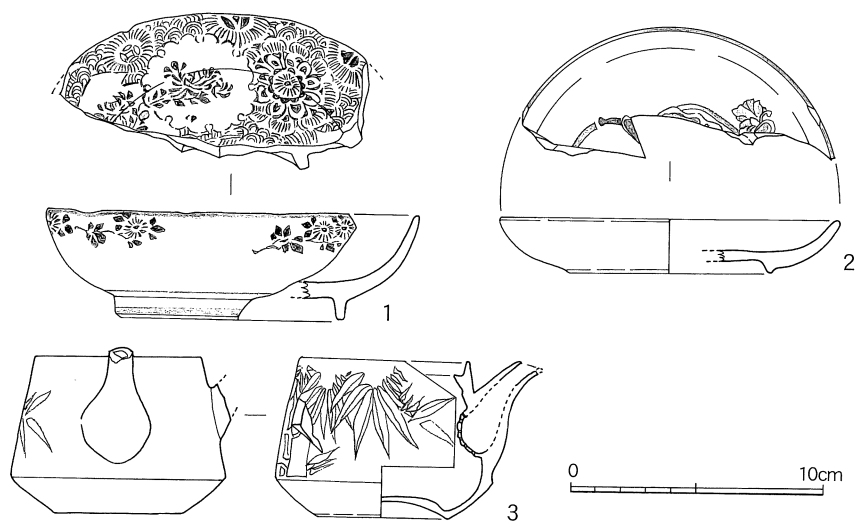
9号土坑 (SK9) (第74図)

9号土坑は3号溝のすぐ東に近接している。平面プランはやや不定形な楕円形であり、南北軸1.8m、東西軸1.9mを測る。深さは0.6mである。凝灰岩の礫および加工済みのものが出土した。

出土遺物(第74図)は、1は磁器皿で、型紙刷りである。1870～1880年製作。2は瀬戸美濃産磁器で、昭和前半の所産か。3は陶器急須。外面に竹の文様を施す。



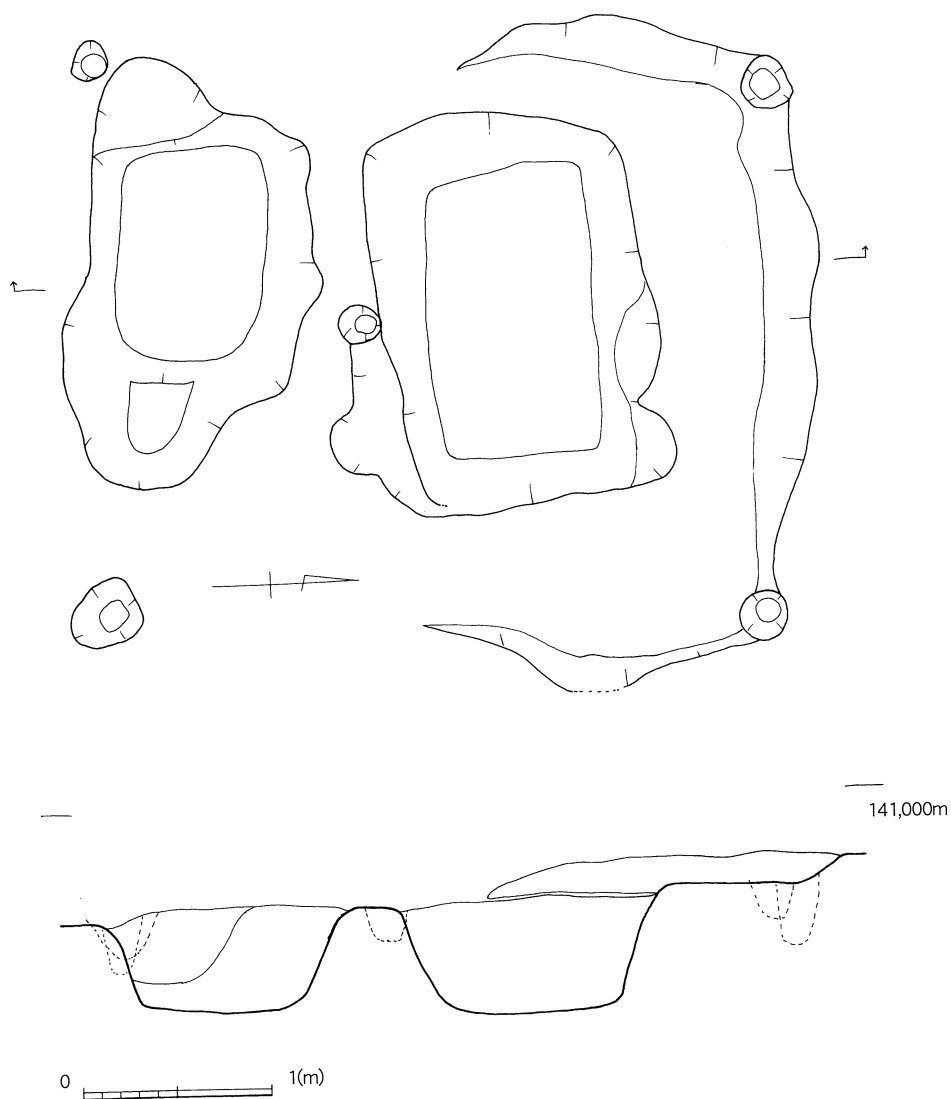
第74図 9号土坑 (SK 9) 実測図 (1/40)



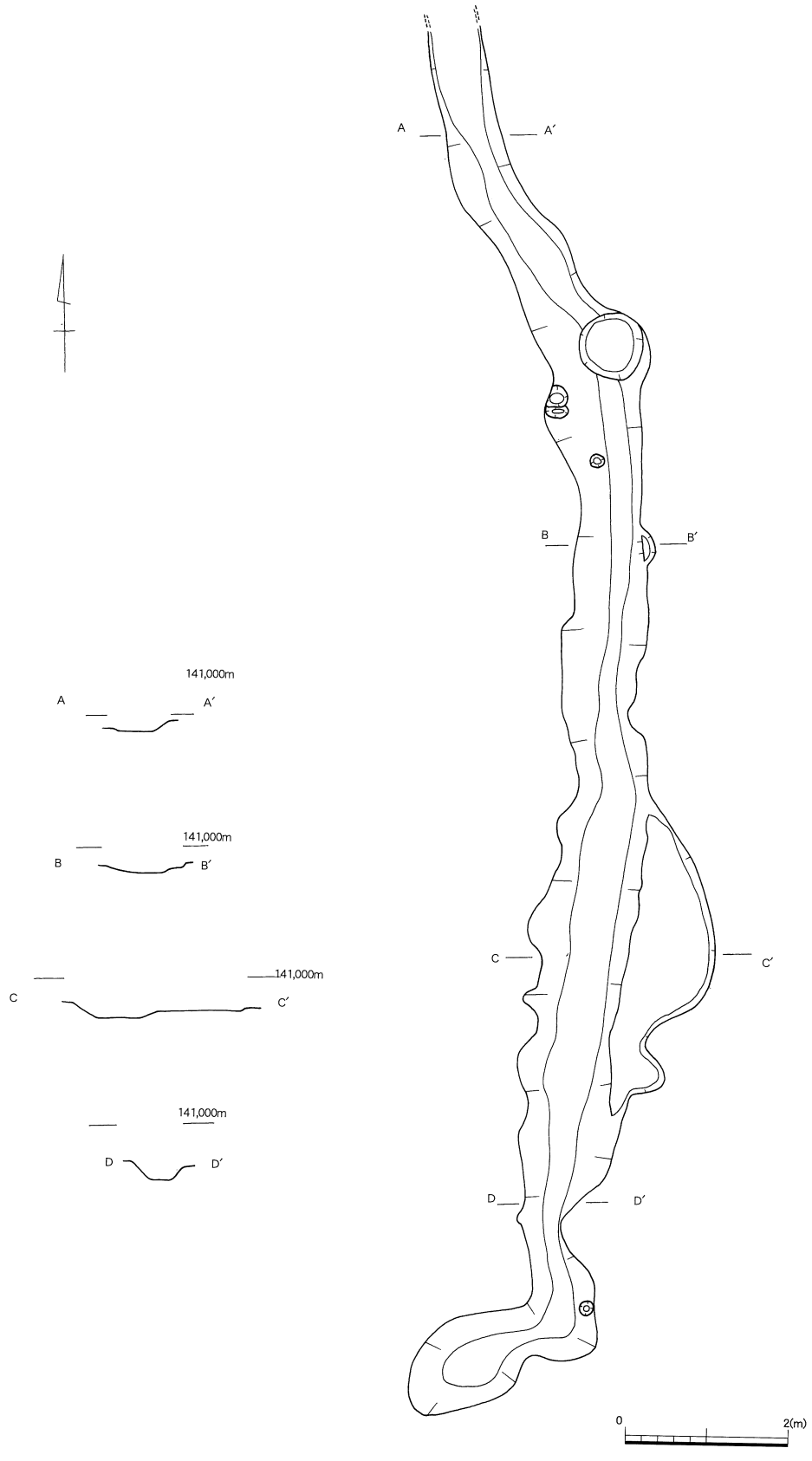
第75図 9号土坑出土遺物実測図 (1/3)

10号土坑 (SK10) (第76図)

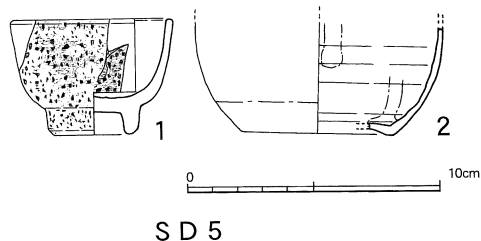
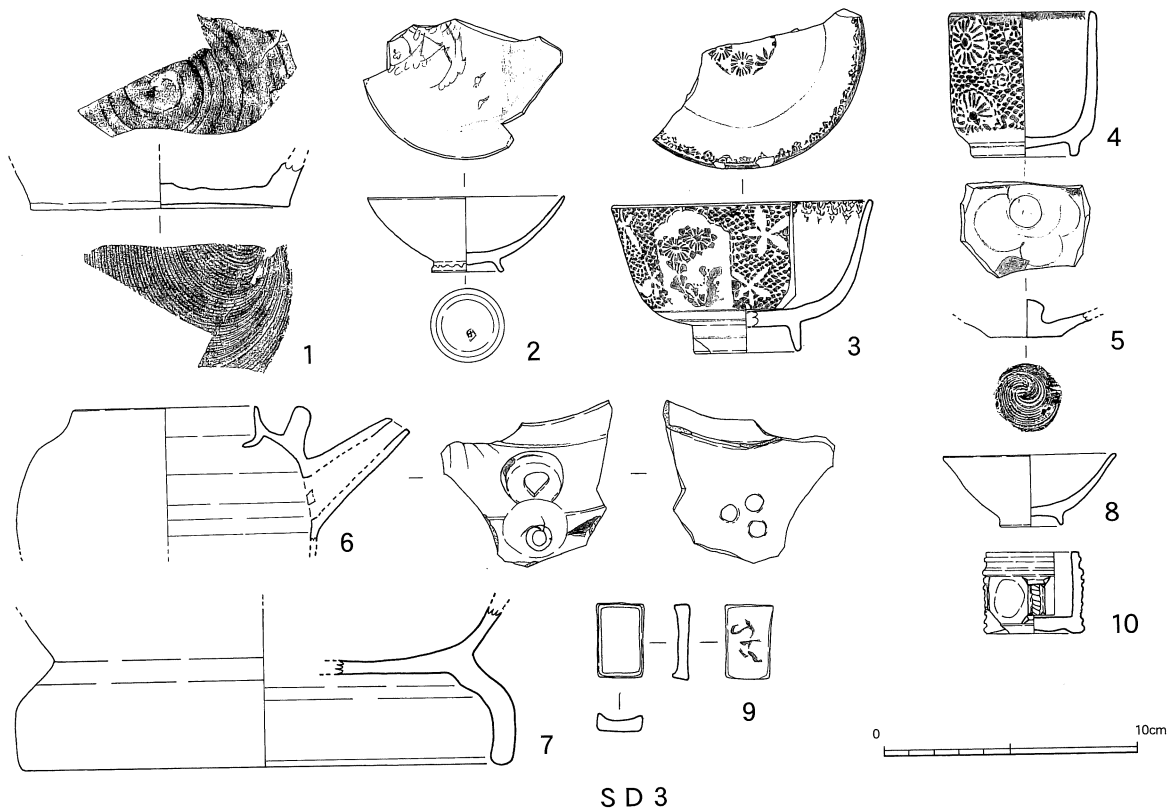
10号土坑は、3号溝の西側に位置している。
平面プランは長方形のプランをもつ土坑が2基あり、周辺のピットと関連がありそうである。埋土の状況により、同一時期の関連のある土坑である可能性が高い。平面プランは長方形で北のものが長軸2.1m、短軸1.5m、深さ0.64mである。南に位置するのは長軸2.26m、短軸1.2mである。
出土遺物はない。



第76図 10号土坑 (SK10) 実測図 (1/40)



第77图 3号沟 (SD 3) 实测图 (1/80)



第78図 SD 3 及びSD 5 出土遺物実測図 (1/3)

(C) 溝 (SD) (第77図)

3号溝 (SD 3) (第77図)

3号溝は、曲輪2のほぼ中央に位置する。南北に延びており、蛇行するような状況である。幅は0.7~1.1mで、最大深は0.3mである。確認できる範囲の長さは $16.80 + a$ mである。

出土遺物(第78図)は、図示しているものは10点である。1は陶磁器の底部で産地不明である。底部は回転糸切りである。2は瀬戸美濃系の盃で、外底に「田」の字がみえる。昭和前半期の所産か。3は磁器碗で型紙刷りの文様を施す。明治期の所産であろう。4は磁器湯のみで、外面は型紙刷りである。明治期の所産であろう。5は陶器の蓋である。底部は回転糸きりである。6は陶器急須である。19世紀以降の所産と思われる。注口部内側に3箇所の穿孔が開く。7は瓦質土器で火鉢の脚部である。外面の調整はヘラナデ、ナデ、ミガキなどで、内面はナデ調整である。19世紀の所産か。8は瀬戸美濃系の盃である。昭和前半期の所産か。9はガラス製のもので用途は不明である。フラット面に墨書があり、「宋」の字か?。10はガラス製の小瓶である。化粧瓶と思われる。

5号溝 (SD 5)

5号溝は、虎口部の底部に位置する。虎口部の中世の遺構をすべて切る。詳細な図面は示していない。時期は出土遺物より19世紀後半以後と思われる。

出土遺物(第77図)は、1は陶器の小坏で、信楽系か。2は陶器の底部である。産地は不明である。

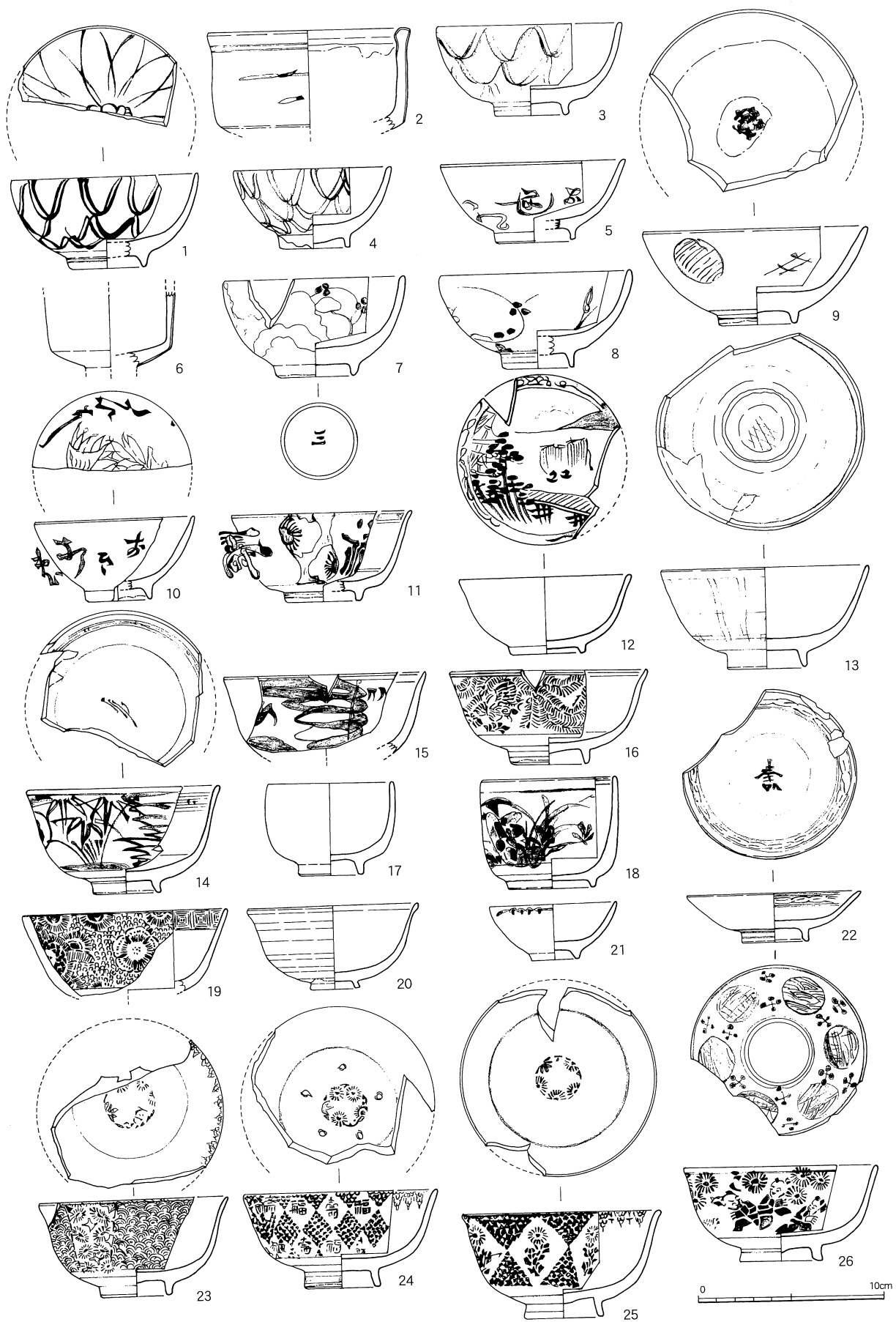
(d) 近世表採遺物

近世表採遺物は曲輪2周辺、北東斜面、虎口部周辺での採集遺物がほとんどである。全体的に土壘表土で表採できたものが多い。そのほとんどは肥前系陶磁器を中心としている。曲輪2周辺部、北東斜面、虎口部周辺について述べていく。

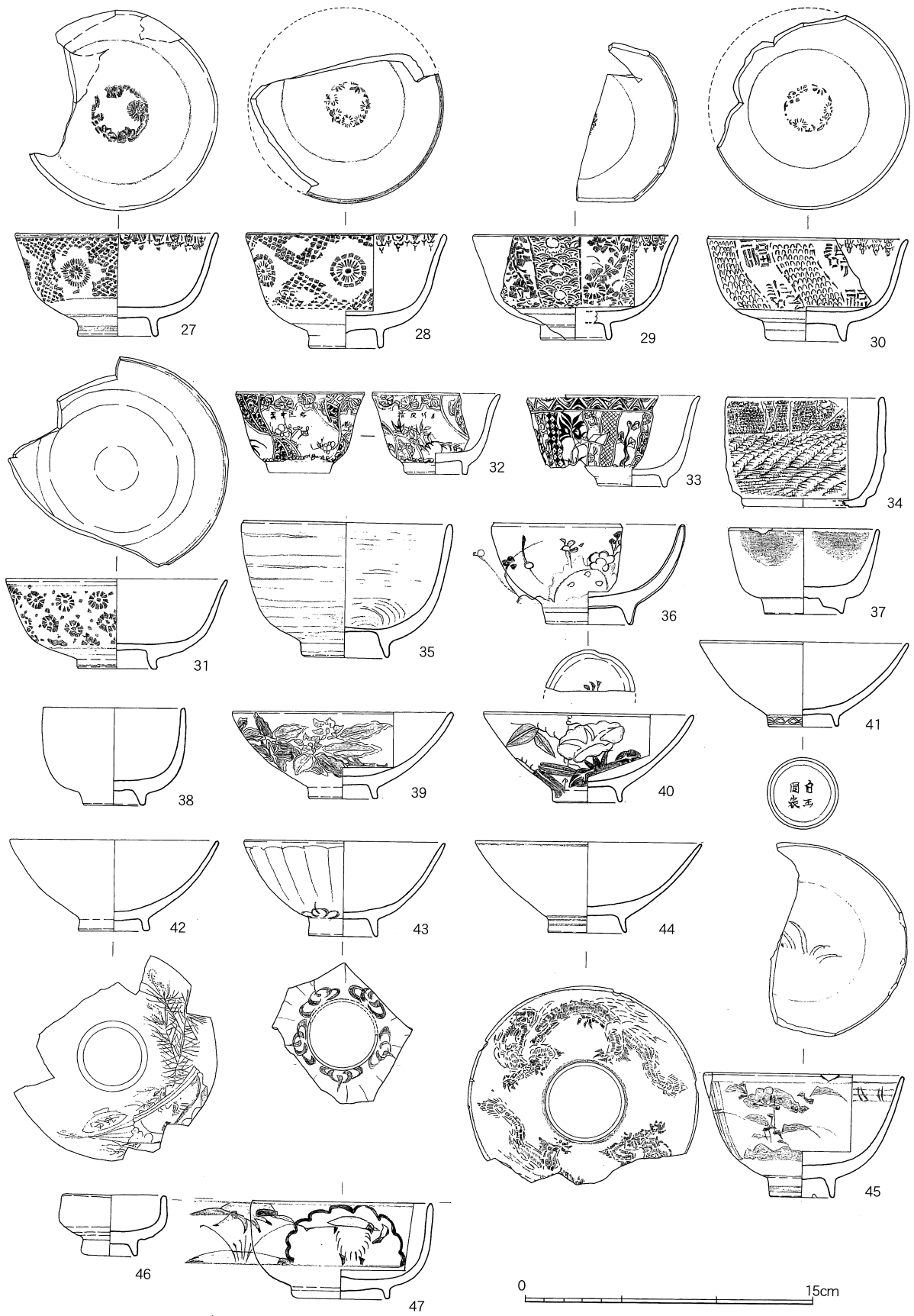
曲輪2周辺部表採遺物(第79～85図)

曲輪2では特に土壘表土で表採できたものがほとんどである。図示できたのは87点である。

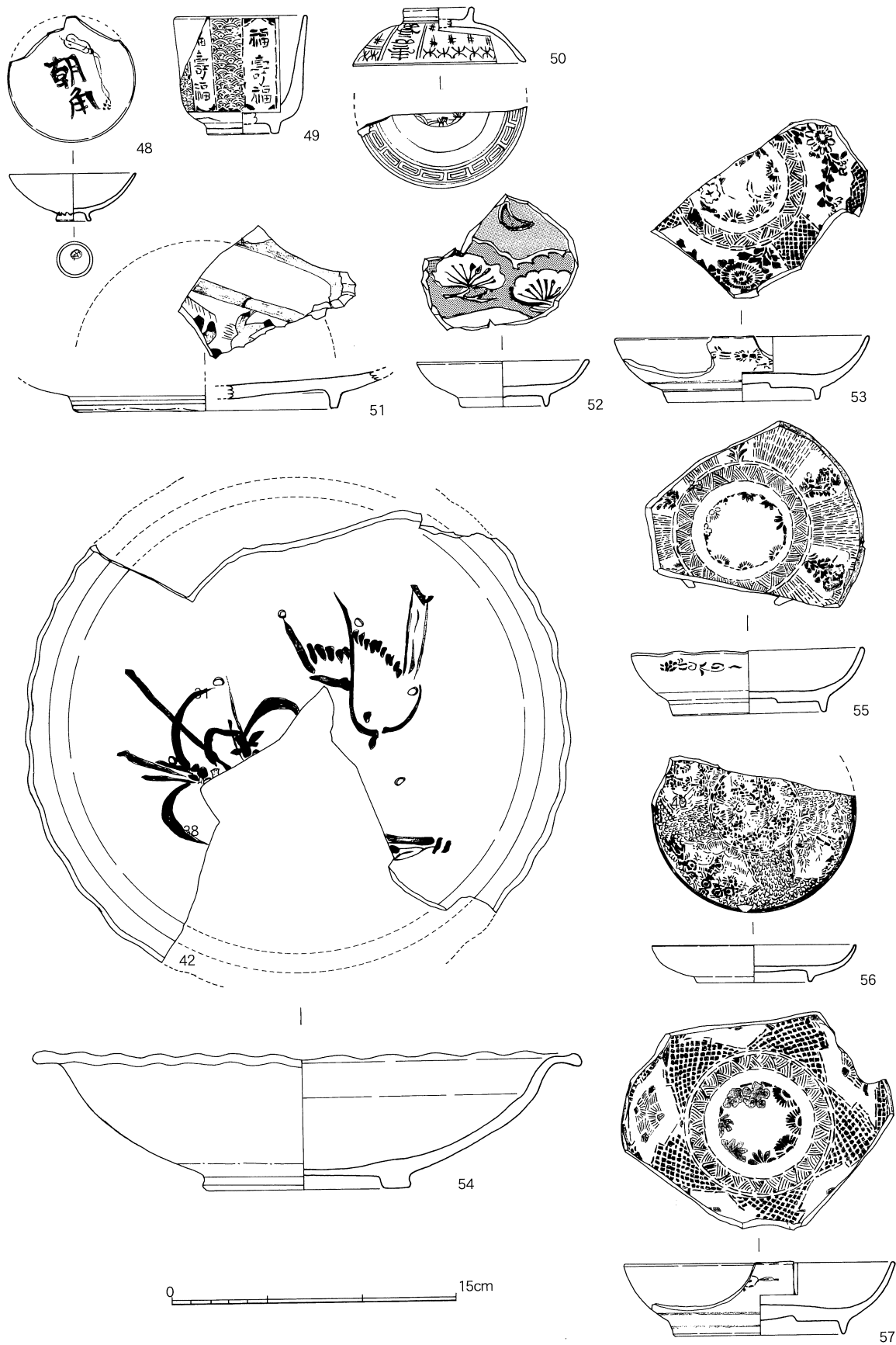
1は肥前磁器小碗で、外面は二重網目文、内面は一重網目文を施す。18世紀前半～半ばの製品である。2は肥前陶胎染付火溶れである。施釉部分に貫入がある。18世紀前半の製品であろう。3・4は肥前磁器小碗で、18世紀後半の製品である。5は肥前磁器染付け碗である。外面に「お笹江…(大阪新町)」と施す。18世紀後半～19世紀の所産か。6は肥前青磁筒形碗である。18世紀後半の所産。7は肥前磁器染付け碗で、いわゆるくらわんか碗と呼ばれるものである。18世紀後半であろう。8は肥前磁器染付け小碗で、18世紀前半～半ばの製品。9は肥前磁器染付け碗で、波佐見産のものである。18世紀後半の所産である。10は肥前磁器色絵小坏である。内底には鯉の尾と笹を施しているようで、「めでたい盃」であろう。18世紀末～19世紀前半の製品。11は瀬戸美濃産磁器染付け碗である。外面に「福」と「寿」の字が伺える。1830～1860年の製品か。12は肥前磁器である。13は肥前磁器染付け端反碗である。1820～1860年の製品。14は肥前磁器である。15は肥前磁器染付け端反碗である。19世紀半ばの製品。16は磁器印版碗である。内底は蛇ノ目釉はぎである。17は福岡産鉄釉藁灰小坏であろう。19世紀前半から半ばの製品。18は肥前磁器湯のみであろう19は染付け磁器碗である。20は陶器碗である。21は肥前染付け磁器碗である。22は肥前磁器端反碗である。図示しているものと異なるが、フタになる可能性が高い。1820～1860年の製品であろう。23は磁器碗で、型紙刷りである。24・25は1870～1880年の製品であろう。26は型紙刷り碗である。27・28・29・30・31は型紙刷り磁器碗である。明治期前半の製品。32・33は磁器銅版転写碗である。明治20年以降の製品である。高台底のみ無釉である。34は陶器碗で、外面にヘラ状工具によるナナメケズリを施す。内外面とも自然釉である。35は肥前陶器碗である。36は磁器染付け小碗である。外底に「大明年製崩銘」がある。37は染付け磁器碗である。高台底は蛇ノ目である。38は染付け陶器碗である。福岡産か。39・40は磁器染付け碗で、瀬戸美濃系である。昭和前半期のものか。41は磁器染付け碗である。外底に「白玉□□」の銘がある。42は磁器染付け碗である。43は瀬戸美濃系染付け磁器碗である。昭和前半期の製品である。44は染付け磁器碗である。外面に青龍を2匹描く。45は染付け磁器碗である。46は陶器の小盃である。47は肥前磁器碗である。外面に筍おり文を施す。18世紀後半の製品であろう。48は染付け磁器盃で、内底の「朝角」は施釉後描いたものである。49は磁器猪口で、型紙刷りである。明治期前半の製品であろう。外面には青海波と「福寿福」を描く。50は肥前磁器染付け端反碗の蓋であろう。1820～1860年の製作か。51は肥前磁器染付け碗である。高台の底面のみ無釉である。その他は施釉。内底に竹・笹葉を描く。18世紀代の製作であろう。52は信楽系陶器小杯である。53は磁器皿で、型紙刷り技法である。外底は蛇ノ目高台である。明治期前半の所産であろう。54は関西系陶器の鉄絵深鉢である。内外面ともに施釉。内底には、鳩麦、及び鳥を描く。口縁端部は波状を呈する。19世紀の所産であろう。55は磁器皿で、型紙刷りである。外底は蛇ノ目高台である。56は瀬戸美濃系染付け皿である。内底に鳥を2羽描く。57は磁器皿で、外底は蛇ノ目高台である。58は瀬戸美濃系磁器皿である。59は染付け磁器皿である。内底に雷文と花卉を描く。60は磁器皿である。61は肥前系磁器鉢である。胴部は八角形状を呈する。口径は20cmを測る。62は肥前磁器鉢である。胴部は八角形状を呈する。外底は蛇ノ目高台である。63は関西系陶器蓋である。外面のみ施釉する。64は関西系陶器蓋である。底部は回転糸きり痕が残る。外面のみ鉄釉で施釉。19世紀代の製作であろう。65は陶器土瓶である。胴部の最大径を測るところから口縁端部近くまでと内側口縁部近くを施釉し、残りの部分は無釉である。口径は7.2cmを測る。66は瓦質土器の蓋である。67は陶器土瓶である。口径は7.4cmを測る。68は磁器染付け鉢である。肥前系か。外底は蛇ノ目である。69は肥前磁器で仏飯器である。18世紀後半～19世紀にかけての製品か。70は唐津系陶器鉢である。



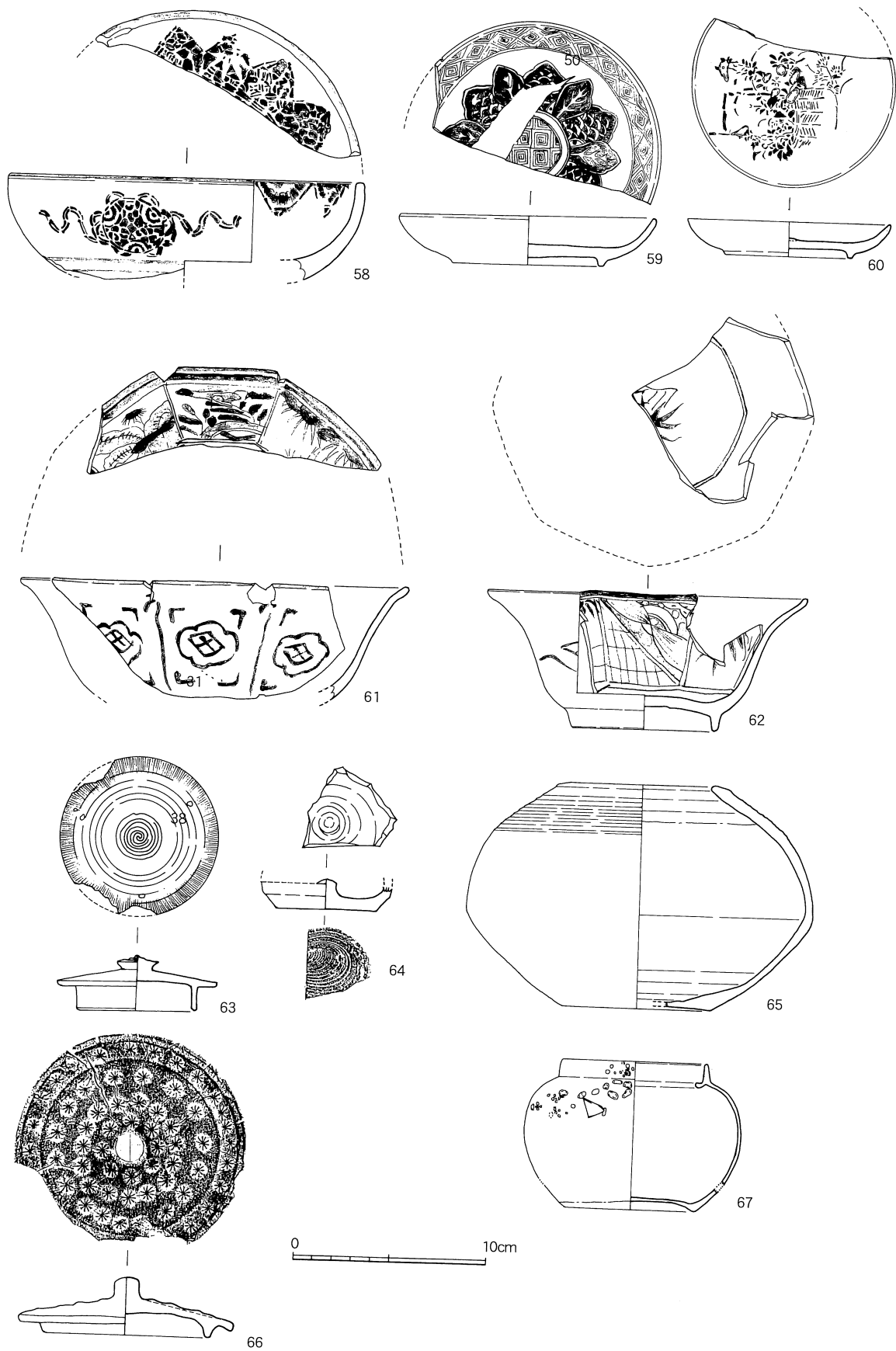
第79図 曲輪2周辺表採遺物実測図① (1/3)



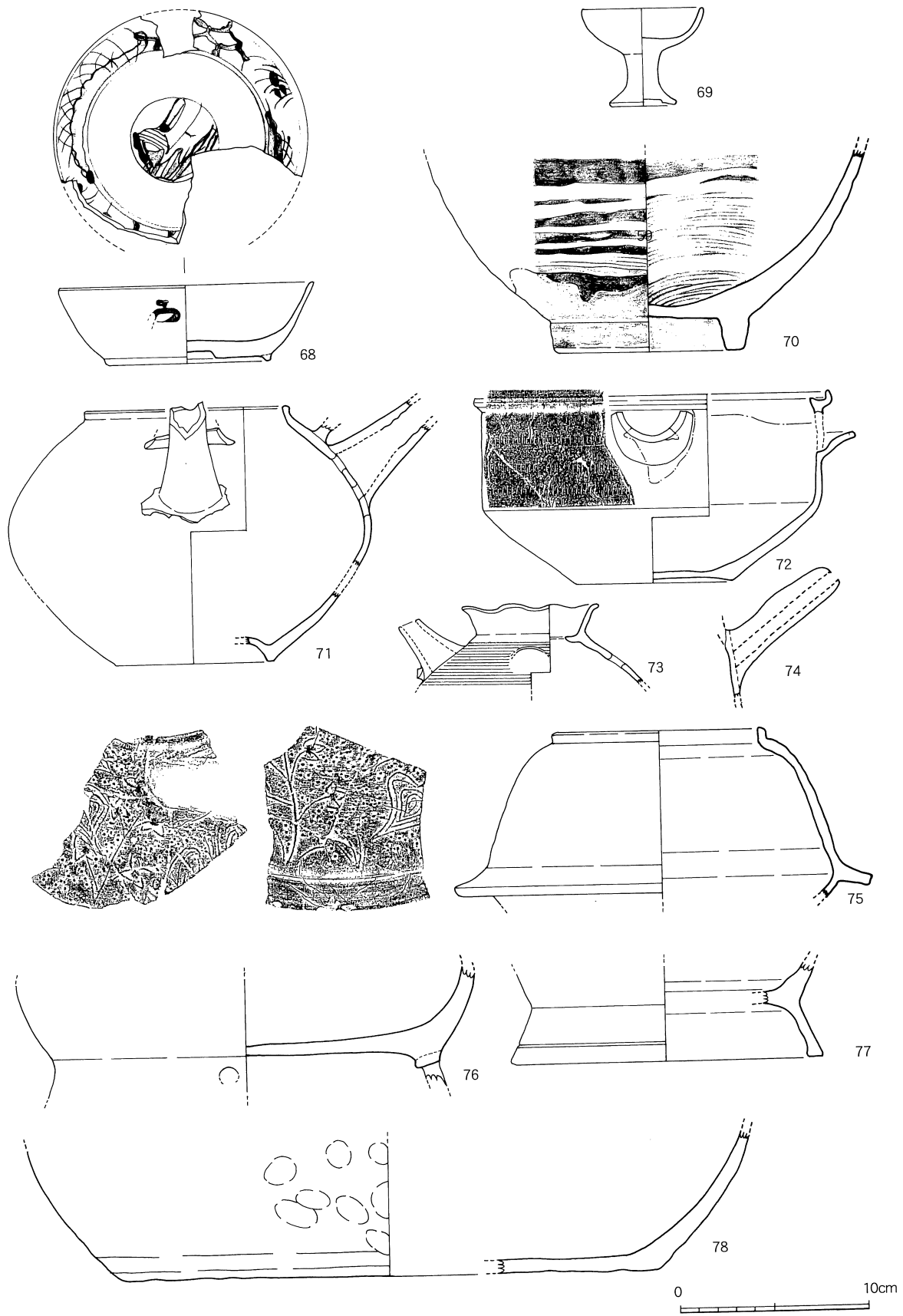
第80图 曲輪2周辺表採遺物実測図② (1/3)



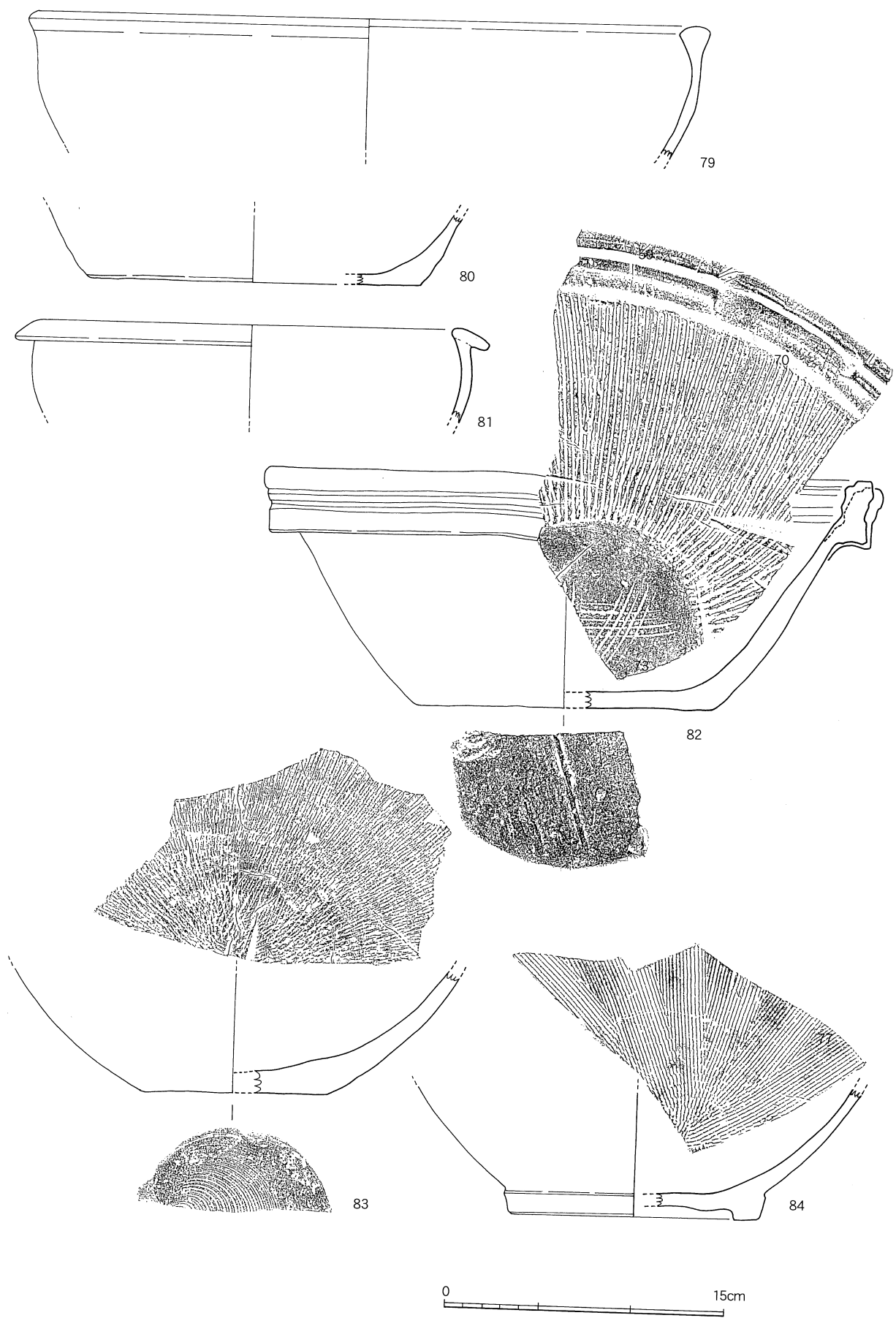
第81図 曲輪2周辺表採遺物実測図③ (1/3)



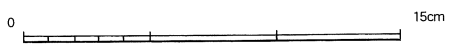
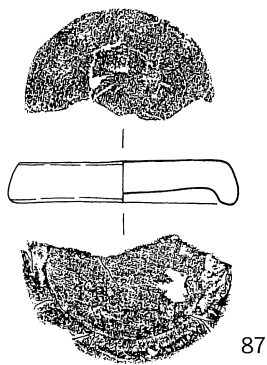
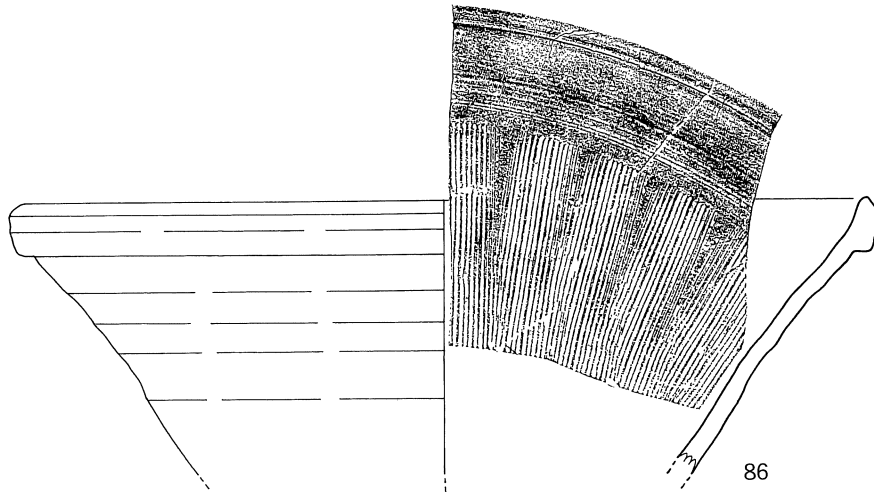
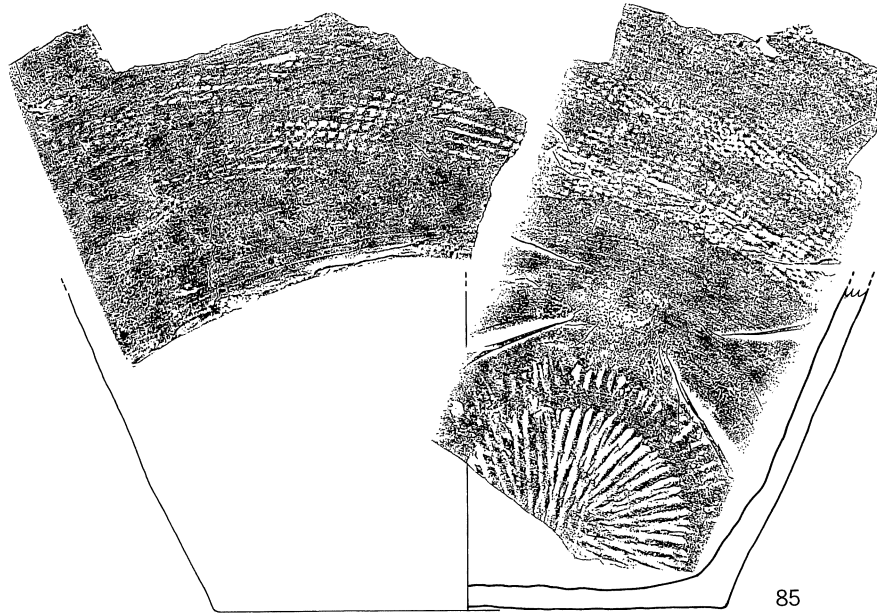
第82図 曲輪2周辺表採遺物実測図④ (1/3)



第83図 曲輪2周辺表採遺物実測図⑤ (1/3)

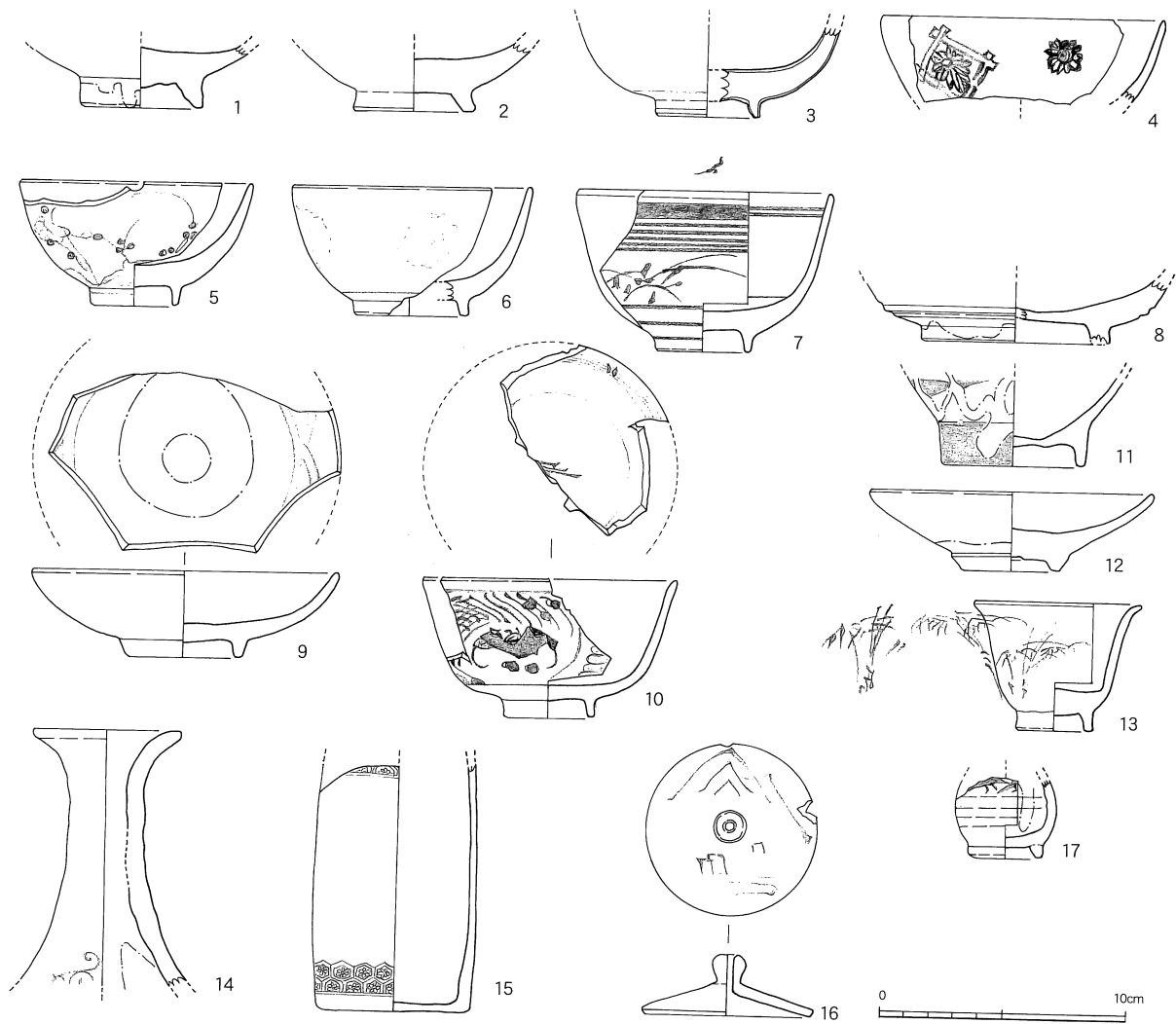


第84図 曲輪2周辺表採遺物実測図⑥ (1/3)

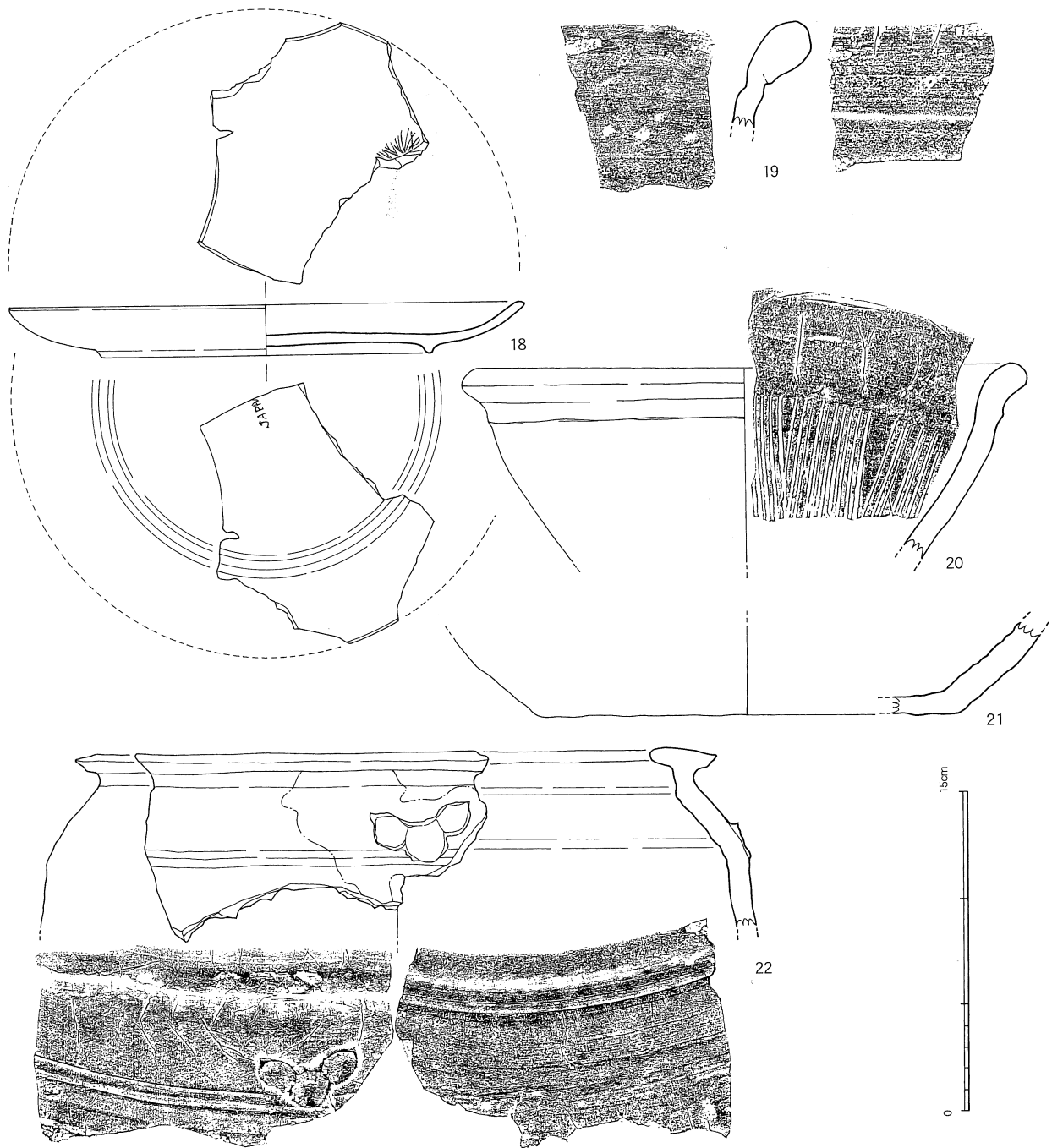


第85図 曲輪2周辺表採遺物実測図⑦ (1/3)

片口か。内外面とも刷毛目文を施す。71は関西系陶器土瓶である。19世紀前半の製作。72は関西系陶器で雪平であろう。19世紀代の製作。73は関西系陶器土瓶である。胴部外面に回転状のヘラ痕跡が残る。口縁部は波状を呈する。19世紀代の製作であろう。74は陶器で急須の把手か。75は瓦質土器羽釜である。外面上部に草花文を施す。18～19世紀の所産であろう。76は瓦質土器火鉢で在り系のものである。脚部が残存する。脚部上方に穿孔を有する。19世紀代の所産であろう。77は瓦質土器火鉢で在り系のものである。脚部が残存し、脚は外側に開く。19世紀の製作か。78は瓦質土器火鉢である。19世紀代の製作か。79・80は瓦質土器火鉢で、同一個体と思われる。口縁部はやや内湾する。19世紀代の製作であろう。81は瓦質土器火鉢である。口縁端部は外側に屈曲し、やや下がる。82は播鉢で堺産であろう。外底には板状圧痕を残し、内底にはナデ後 A格子状に摺り目を残す。18世紀代の製作であろう。83は備前焼播鉢底部片である。外底は糸きりである。84は備前焼播鉢である。外底には高台部を残す。19～20世紀の製作か。85は肥前系甕の底部片である。内底には放射線状のタタキ痕を残し、胴部内面には格子状のタタキ痕が残る胴部外面は格子状タタキの後、ヨコナデ後、土灰釉がかかる。18世紀～19世紀の製作か。86は播鉢である。87は焼塩壺の蓋である。堺産であろう。内底に布目痕が残る。18世紀の所産であろう。



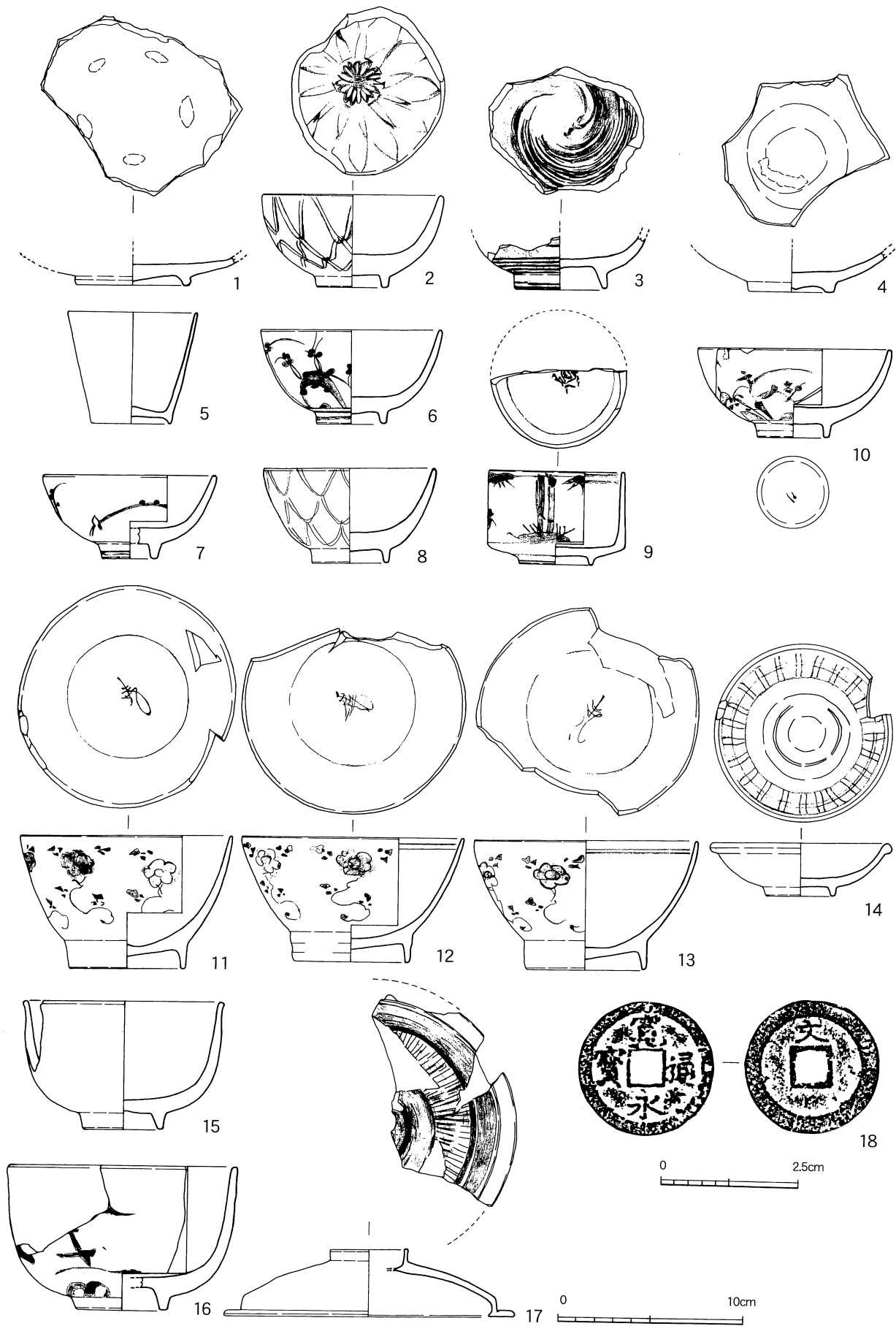
第86図 虎口周辺表採遺物実測図① (1/3)



第87図 虎口周辺表採遺物実測図② (1/3)

(e) 虎口周辺部表採遺物(第86、87図)

この個所での表採は、虎口内の表土中とその西側の土塁表面に集中して散布していた。図示するのは22点である。1～3は磁器碗の底部で高台が付く。3は内・外に貫入あり。4は肥前磁器染付けコンニャク印判碗である。外面に角ノ井と菊花の文様を施す。1690～1740年の所産であろう。5は肥前磁器染付け碗である。18世紀後半の所産であろう。外面は葛か。6は肥前磁器染付けコンニャク印判碗である。外面に菊花の文様を施す。18世紀前半～半ばの所産であろう。7は肥前磁器染付け碗である。18世紀代の所産であろう。8は陶器碗の高台部である。肥前系のものか。内底に焼成時の胎止目が2つ確認できる。9は磁器染付け小鉢の底部片である。内底は蛇ノ目である。10は磁

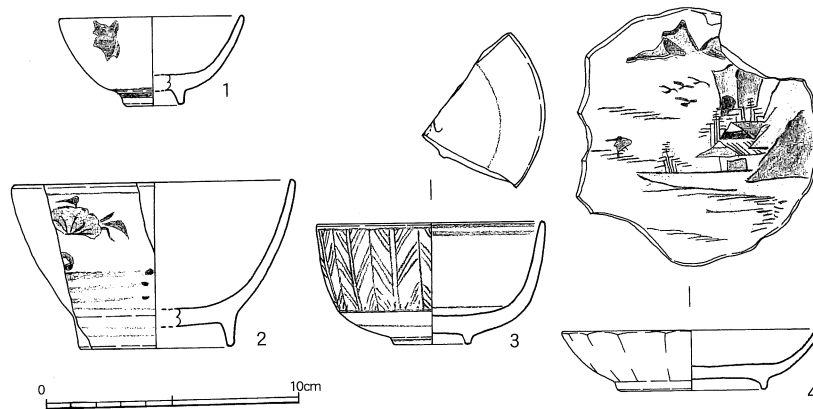


第88図 北東斜面表採遺物実測図 (18のみ1/1、他1/3)

器染付け碗で、肥前系。11は陶器碗の高台部である。12は白磁の小皿である。内底は変形した蛇目である。13は磁器染付け猪口である。14は肥前磁器染付け瓶である。18世紀の所産か。15は磁器染付け酒壺(徳利)の底部である。16は磁器染付け蓋である。外面に山・海・帆立舟を描く。17は陶器の小瓶で、ロク口成形である。18は陶器の大皿片で、内底に松葉?を施し、外底に「JAPAN」の黒文字がわかる。19は備前焼甕の口縁部片である。20は備前焼播鉢である。21は土師質土器甕の底部片である。内外面ともにナデ調整である。22は肥前唐津産の陶器甕口縁部で、ハンズー甕と呼ばれるものである。口縁端部は「T」の字状になる。18世紀～19世紀の所産であろう。

(f) 北東斜面表採遺物(第88図)

北東斜面での近世以後の遺物は、切岸から緩斜面まで広く散布していた。図示したもので18点を数える。1は肥前産の陶器皿で、底部に砂目積みが残る。1600～1630年の製作であろう。2は肥前陶磁、染付磁器碗である。内底に菊花文様、外面は二重網目文、内面は一重網目文である3は唐津産陶器碗である。内外面とも刷毛目文様である。18世紀前半の所産。4は肥前内野山窯系青緑釉陶器皿か。内底は蛇の目軸はぎである。5は肥前磁器で、猪口である。17世紀末～18世紀の所産であろう。6・7は肥前系磁器、染付碗である。18世紀後半の所産か。8は肥前陶磁で、染付碗である。外面、二重網目文を施す。9は肥前磁器で、筒形碗である。10は肥前磁器染付碗である。外面、梅樹と雪輪である。外底に大明年製崩れ銘を施す。18世紀後半の所産か。11～13は肥前磁器染付碗で、いわゆる広東碗である。外面は五弁花、内底に「寿」のくずし字を入れる1780～1810年の所産である。14は肥前磁器で波佐見産のもので、皿である。内底は蛇の目軸はぎである。1780～1860年である。15は陶器碗である。16は肥前陶器、陶胎染付碗で、18世紀後半か。17は関西系陶器蓋である。雪平と呼ばれるもの。19世紀の所産。18は錢貨で、「寛永通宝」である。



第89図 堀切北側の平場表採遺物実測図 (1/3)

(g) 堀切北側の平場表採遺物(第89図)

ここの表採遺物は4点を図示する。

1は肥前陶器、染付小碗で、外面、コンニャク印判である。1690～1740年の所産である。2は肥前磁器で、広東碗である。外面は松の文様。1780～1810の所産である。3は肥前磁器碗で、18世紀後半の所産か。4は肥前磁器染付皿で、外面は蓮弁状になる。内面底に、民家や入り江、鳥などの文様を施す。1780～1860年の所産。

第4表 近世遺物観察表(1)

遺構番号	挿図番号	実測番号	種類	器種	法量(cm) ()は復元					成形	調整及び装飾		焼成	胎土(石材)	色調	備考
					口径/最大	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径	重量(g)		外面	内面				
1号近世墓	68-1	175	肥前磁器	染付小碗	(7.0)	3.7+	—	—	—	ロク口	施釉:透明 口縁部端反	施釉:透明	良好	緻密	白色	
SK6	71-1	11	肥前磁器	染付端反碗	10.8-	5.7+	4.4	—	—	ロク口	施釉:透明 染付:格子文	施釉:透明 底に#文様	良好	緻密	淡灰色	18世紀後半 波佐見産
	71-2	17	肥前磁器	染付広東碗	11.5	5.0+	—	—	—	ロク口	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	灰白色	1780~1810年
	71-3	18	肥前磁器	染付小碗	(10.2)	3.8+	—	—	—	ロク口	施釉:透明 染付:草花文	施釉:透明	良好	緻密	白色	18世紀後半
	71-4	28	肥前磁器	染付碗	(8.4)	5.1	(4.0)	—	—	ロク口	施釉:透明 染付:二重網目文	施釉:透明	良好	緻密	淡灰色	18世紀後半
	71-5	25	肥前磁器	染付広東碗	(10.4)	3.1+	(5.8)	—	—	ロク口	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	淡灰色	1780~1810年
	71-6	24	肥前磁器	染付広東碗	—	3.8+	(6.0)	—	—	ロク口	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	青白色	1780~1810年
	71-7	16	肥前磁器	染付皿	—	2.3+	—	—	—	ロク口	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	淡灰色	18世紀後半
	71-8	26	肥前磁器	染付仏飯器	(12.2)	4.5+	(3.6)	—	—	ロク口	施釉:透明 底部は無釉	施釉:透明	良好	緻密	灰白色	18世紀~19世紀
	71-9	21	唐津焼	火浴れ	—	3.4+	(5.2)	—	—	ロク口	上部のみ施釉:透明 高台はへろ状工具切り離しが	無釉	良好	緻密	赤褐色	17世紀~18世紀
	71-10	23	肥前磁器	香炉?	—	3.7+	(6.6)	—	—	ロク口	施釉:透明 高台はへろ状工具切り離しが	上部施釉。あとは無釉。	良好	緻密	暗赤褐色	18世紀後半?
	71-11	14	肥前磁器	染付小碗	—	4.6	3.8	—	—	ロク口	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	灰白色	
	71-12	13	肥前磁器	染付碗	9.5	6.6	4.2	—	—	ロク口	透明:施釉 登み付けは無釉	透明:施釉	良好	緻密	灰白色	1820~1860年
	71-13	12	肥前磁器	染付碗	(11.9)	5.6	3.9	—	—	ロク口	施釉:透明 染付:亀甲つなぎ 登み付けは無釉	施釉:透明 内底は蛇/目	良好	緻密	青灰色	19世紀
	71-14	162	肥前磁器	染付小坏	11.0	3.1	(3.8)	—	—	ロク口	施釉:透明 染付:梅花・松葉	施釉:透明	良好	緻密	明灰白色	
	71-15	15	肥前磁器	染付端反碗	(9.8)	6.0	(4.8)	—	—	ロク口	施釉:透明 染付:二重格子目文	施釉:透明	良好	緻密	白色	1820~1860年 波佐見産
	71-16	20	関西系陶器	蓋	(12.2)	2.4+	ツメ	—	—	ロク口	カサ部のみ施釉。	ツメ外部まで無釉。	良好	緻密	外面:暗褐色 内面:灰褐色	18世紀~19世紀
	71-17	22	関西系陶器	鉢	カサ	1.8+	(10.2)	—	—	ロク口	無釉 ヨコナデ	施釉 ヨコナデ	良好	蜜	外面:にがい 内面:黄褐色	18世紀~19世紀
	71-18	34	瓦質土器	火鉢	(12.8)	13.6	(5.4)	—	—	ロク口	丁寧なナデ、ヨコナデ、工具によるナデ	荒いヨコナデ	良好	蜜	暗灰色	曲輪2の土墨表採と接合 胴部中央に穿孔?
	71-19	19	唐津系陶器	掃鉢	—	8.9+	18.0	—	—	ロク口	自然釉かかるヨコナデ	ヨコナデ後、カキメ	良好	緻密	暗灰赤色	
	71-20	27	石製品	砥石	25.9	5.1+	—	—	—					天草	—	
SK8	73-1	30	関西系陶器	片口鉢	(33.2)	5.7+	3.2+	—	—	ロク口	施釉 口縁部のみ無釉	施釉	良好	石?	黒褐色、灰白色	19世紀
	73-2	29	磁器	小坏	7.3+	3.6	—	—	—	ロク口	施釉 高台部は部分的に無釉	施釉	良好	緻密	灰白色	18世紀後半~19世紀
	73-3	169	石製品	砥石	(25.4)	5.6	2.8	—	64	ロク口			良好	緻密		
SK9	75-1	33	肥前磁器	型紙刷り皿	(7.0)	4.2	—	—	8.4	ロク口	施釉。高台内面は無釉。文様はコンニャク印判	施釉。内底は無釉	良好		灰白色	1870~1880年
	75-2	31	瀬戸美濃磁器	皿	10.2+	2.1	(8.6)	—	g	ロク口	施釉。登み付けは無釉。	施釉	良好	緻密	灰白色	昭和前半
	75-3	32	陶器	急須	(14.6)	6.2	(8.0)	—	—	ロク口	施釉。ツメ部と底部は無釉。文様は竹。	施釉	良好	緻密	乳白色	全面に貫入あり 19~20世紀
SD3	78-1	13	陶器	鉢?	(13.4)	1.8+	5.0	—	—	ロク口	施釉。底部は無釉で、回転糸切。	無釉	良好	緻密	外:暗茶色 内:黄褐色	19世紀以降か。
	78-2	14	瀬戸美濃系	碗	6.4	3.0	(10.2)	—	—	ロク口	施釉:透明。高台登み付けから底部は無釉。	施釉:透明。文様:底に草木。	良好	緻密	白色	昭和前半
	78-3	18	磁器	型紙刷碗	—	5.9	2.8	—	—	ロク口	施釉:透明。文様:コンニャク印判。	施釉:透明	良好	緻密	白色	1870~1880年
	78-4	16	磁器	染付湯のみ	7.8	5.7	4.0	—	—	ロク口	施釉:透明。文様:コンニャク印判。	施釉:透明	良好	緻密	白色	1870~1880年
	78-5	19	陶器	蓋	(10.0)	1.5	4.0	—	—	ロク口	施釉:透明。底糸切。上面に花文。	無釉	良好	緻密	茶色	19世紀以降か。
	78-6	20	陶器	染付急須	(5.6)	5.4+	2.5	—	—	ロク口	施釉:透明	無釉	良好	緻密	暗茶色	注口をもつ(穿孔は3つ) 19世紀以降
	78-7	54	瓦質土器	火鉢	—	6.1+	—	—	—	ロク口	ヘラナデ、ミガキ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	良好	緻密	黒白色	曲輪2の土墨表採と接合 19世紀か
	78-8	12	瀬戸美濃系	盃	(7.2)	2.8	(19.2)	—	—	ロク口	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	白色	昭和前半
	78-9	17	ガラス製品	小瓶	—	3.2	2.4	—	—	ロク口			良好	緻密		化粧瓶か
	78-10	15	ガラス質	不明	6.8	1.8	4.0	—	—	ロク口			良好	緻密	白色	墨書文字あり 顔料いれ?
SD5	78-1	21	陶器	染付小碗	3.4	4.6	0.6	—	—	ロク口	施釉。登み付けから底部まで無釉。茶色の点々文様	施釉	良好	緻密	黄灰色	19世紀後半以降
	78-2	22	陶器	小鉢	2.9	4.3+	3.0	—	—	ロク口	施釉:胴部上部。無釉は胴部下半~底部まで。	無釉	良好	緻密	刺-7色	
曲輪2周辺表採	79-1	156	肥前磁器	染付碗	(6.2)	4.9	(6.0)	—	—	ロク口	施釉:透明 文様:二重網目文	施釉:透明 文様:一重網目文。底:花文	良好	緻密	淡灰色	18世紀前半~半ば
	79-2	65	陶胎	染付火浴れ	—	5.8+	(4.0)	—	—	ロク口	施釉	施釉	良好	緻密	淡緑灰色	18世紀前半
	79-3	160	肥前磁器	染付碗	(10.0)	4.9	—	—	—	ロク口	施釉:透明 文様:二重網目文	施釉:透明	良好	緻密	淡青灰色	18世紀後半
	79-4	68	肥前磁器	染付碗	(10.8)	4.2	3.8	—	—	ロク口	施釉:透明 文様:二重網目文	施釉:透明	良好	緻密	淡灰色	18世紀後半
	79-5	72	肥前磁器	染付碗	(10.0)	4.3	(3.8)	—	—	ロク口	施釉:透明「お笹紅」(大坂新町)	施釉:透明	良好	緻密	灰白色	18世紀後半~19世紀

第5表 近世遺物観察表(2)

遺構番号	挿図番号	実測番号	種類	器種	法量 (cm) ()は復元					成形成	調整及び装飾		焼成	胎土(石材)	色調	備考
					口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径	重量(g)		外面	内面				
曲 輪 2 周 辺 表 採	79-6	93	肥前磁器	筒形碗	—	4.0+	—	—	—	ロク口	施釉:緑釉	施釉:灰釉	良好	緻密	にぶ灰白色	18世紀後半 内外に貫入あり
	79-7	95	肥前磁器	染付碗	(9.6)	5.2	4.0	—	—	ロク口	施釉:透明 登み付けは無釉。文様:曼草・梅樹	施釉:透明	良好	緻密	灰白色	くらわんか手 18世紀後半
	79-8	157	肥前磁器	染付碗	(10.0)	5.1	(3.8)	—	—	ロク口	施釉:透明 高台登み付けは無釉。文様:梅樹・雪輪	施釉:(透明)	良好	緻密	刷毛目	18世紀前半~半ば
	79-9	93	肥前磁器	染付碗	(12.0)	5.2	4.1	—	—	ロク口	施釉:透明 文様:并拵・丸・コンニャク印判	施釉:透明 文様:内底に五弁花。	良好	緻密	にぶ灰白色	18世紀後半 波佐見産
	79-10	85	肥前磁器	色絵小坏	(8.4)	4.4	(3.4)	—	—	ロク口	施釉:透明 登み付けは無釉。文様:文字あり	施釉:透明 底部:銅。施釉後色絵。	良好	緻密	灰白色	18世紀末~19世紀 初頭「めでたい盃」
	79-11	94	瀬戸美濃系	染付碗	(9.6)	4.8	(4.0)	—	—	ロク口	施釉(透明) 高台登み付けは無釉。文様:寿字	施釉:(透明)	良好	緻密	灰白色	1830~1860年
	79-12	98	瀬戸美濃系磁器	薄手酒盃	(6.2)	2.7	2.6	—	—	ロク口	施釉:透明	施釉:透明 文様:松・梅・扇・帆かけ船など。	良好	緻密	白色	19世紀中ごろ
	79-13	29	肥前磁器	染付端反碗	11.2	6.0	4.0	—	—	ロク口	施釉:透明 文様:三重格子目文	施釉:透明 内底:蛇/目輪はぎ。	良好	緻密	灰白色	1820~1860年 波佐見産
	79-14	126	肥前磁器	染付端反碗	(10.4)	5.8	3.9	—	—	ロク口	施釉:透明 登み付けは無釉。文様:管	施釉:透明 内底:大明年製崩れ銘	良好	緻密	白色	19世紀前半
	79-15	73	肥前磁器	染付端反碗	(10.8)	4.4+	—	—	—	ロク口	施釉:透明 文様:笹・竹?	施釉:透明	良好	緻密	灰白色	19世紀半ば
	79-16	86	磁器	型紙刷碗	(10.4)	5.1+	4.0	—	—	ロク口	施釉:透明 コンニャク印判	施釉:透明 内底:蛇/目輪はぎ	良好	緻密	明灰白色	1870~1880年
	79-17	83	福岡産磁器	鉄釉ワラ灰小坏	(6.6)	5.0	3.2	—	—	ロク口	施釉 登み付け部無釉	施釉	良好	緻密	黒褐色	19世紀前半~半ば
	79-18	24	磁器	型紙刷碗	(7.0)	6.0	4.6	—	—	ロク口	施釉 文様:草花	施釉	良好	緻密	白色	1870~1880年
	79-19	41	磁器	型紙刷碗	(10.8)	4.4+	—	—	—	ロク口	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	白色	1870~1880年
	79-20	33	陶器	碗	9.0	4.5	2.6	—	—	ロク口	施釉:透明 高台部と底は無釉。	施釉:透明	良好	緻密	茶褐色	
	79-21	43	磁器	染付碗	6.8	3.0	2.6	—	—	ロク口	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	白色	
	79-22	26	肥前磁器	端反皿	9.2	2.7	3.4	—	—	ロク口	施釉:透明 文様:花など	施釉:透明 文様:松葉?内底に「寿」	良好	緻密	白色	1820~1860年
	79-23	87	磁器	型紙刷碗	(10.1)	5.2	2.8	—	—	ロク口	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	灰白色	1870~1880年
	79-24	88	磁器	型紙刷碗	(10.4)	5.2	4.0	—	—	ロク口	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	灰白色	1870~1880年
	79-25	89	磁器	型紙刷碗	(10.6)	5.8	4.2	—	—	ロク口	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	灰白色	1870~1880年
	79-26	178	磁器	印板染付碗	10.3	5.1	4.4	—	—	ロク口	施釉:透明	施釉:透明 蛇/目輪はぎ	良好	緻密	淡青灰色	
	80-27	39	磁器	型紙刷碗	10.4	5.3	4.2	—	—	ロク口	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	灰白色	1870~1880年
	80-28	25	磁器	型紙刷碗	(10.0)	5.9	3.6	—	—	ロク口	施釉:透明釉	施釉:透明	良好	緻密	青灰白色	1870~1880年
	80-29	27	磁器	型紙刷碗	(10.6)	5.5	3.6	—	—	ロク口	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	白色	1870~1880年
	80-30	77	磁器	型紙刷碗	10.2	5.4	4.0	—	—	ロク口	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	灰白色	1870~1880年
	80-31	30	磁器	型紙刷碗	(11.4)	5.6	4.0	—	—	ロク口	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	白色	1870~1880年
	80-32	100	磁器	銅版転写小碗	(6.6)	4.2	3.2	—	—	ロク口	施釉:透明 高台登み付けは無釉	施釉:透明	良好	緻密	灰白色	明治20年~
	80-33	99	磁器	銅版転写小碗	(7.0)	4.7	3.6	—	—	ロク口	施釉:透明 高台登み付けは無釉	施釉:透明	良好	緻密	灰白色	明治20年~
	80-34	96	陶器	碗	(7.8)	5.7	6.2	—	—	ロク口	自然釉 ヘラ状工具によるナメグ(スリ)	自然釉	良好	緻密	黄褐色	
	80-35	127	肥前陶器	碗	10.6	7.0	3.4	—	—	ロク口	施釉 刷毛目文	施釉 刷毛目文	良好	緻密	黄白色	唐津系
	80-36	158	肥前磁器	碗	(9.8)	5.2	4.4	—	—	ロク口	施釉:透明 文様:梅樹など 大明年製崩れ銘	施釉:透明	良好	緻密	灰色	
	80-37	34	磁器	染付碗	7.6	4.4	4.0	—	—	ロク口	施釉:透明 高台内側~底部無釉 底部は蛇/目輪高台	施釉:透明	良好	緻密	白色	
	80-38	42	福岡産陶器	鉄釉ワラ灰小坏	(7.2)	5.1	3.1	—	—	ロク口	施釉	施釉	良好	緻密	茶褐色	19世紀
	80-39	51	磁器	皿	(11.2)	4.5	3.6	—	—	ロク口	施釉:透明 高台登み付けは無釉	施釉:透明	良好	緻密	白色	
	80-40	75	磁器	碗	(10.8)	5.0	3.6	—	—	ロク口	施釉:透明 文様:朝顔・笹	施釉:透明	良好	緻密	灰白色	昭和前半 瀬戸美濃系?
	80-41	76	磁器	碗	(10.8)	4.4	3.6	—	—	ロク口	施釉:透明 高台登み付けは無釉	施釉:透明	良好	緻密	白色	
	80-42	40	磁器	碗	(10.6)	4.7	3.6	—	—	ロク口	施釉:透明 文様:松葉・オカメ・寿の盃	施釉:透明	良好	緻密	白色	
	80-43	31	瀬戸美濃系磁器	碗	10.4	4.9	3.6	—	—	ロク口	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	白色	昭和前半
	80-44	38	磁器	碗	11.8	4.8	4.2	—	—	ロク口	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	白色	
	80-45	37	肥前磁器	碗	(14.0)	6.4	4.0	—	—	ロク口	施釉:透明 文様:山・格子目など	施釉:透明	良好	緻密	白色	
	80-46	177	陶器	小盃	5.2	3.2	2.8	—	—	ロク口	はりつけ高台 回転ナデ	ナデ	良好	緻密	明灰色	
	80-47	140	磁器	碗	9.2	5.0	4.9	—	—	ロク口	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	青灰白色	18世紀後半
	81-48	44	磁器	盃	6.6	2.5	1.8	—	—	ロク口	施釉:透明	施釉:透明 見込に「朝角」の字	良好	緻密	白色	
	81-49	47	肥前磁器	型紙刷湯呑	6.8	6.2	3.8	—	—	ロク口	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	白色	1870~1880年

第6表 近世遺物観察表(3)

遺構番号	挿図番号	実測番号	種類	器種	法量(cm) ()は復元					成形	調整及び装飾		焼成	胎土(石材)	色調	備考
					口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径	重量(g)		外面	内面				
曲輪2	81-50	71	肥前磁器	端反碗蓋	(9.0)	2.9	(3.6)	—	—	ロクロ	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	灰白色	1820~1860年
	81-51	74	肥前磁器	皿	—	1.9+	(13.8)	—	—	ロクロ	施釉:透明 高台登み付けは無釉	施釉:透明 文様:竹・笹	良好	緻密	灰白色	18世紀
	81-52	69	信楽系陶器	小坏	5.8	4.7	3.0	—	—	ロクロ	施釉: 肩部に水滴状に盛りあがった釉を付着	施釉	良好	緻密	淡黄色	幕末~明治
	81-53	49	磁器	型紙刷皿	(13.4)	3.4	8.0	—	—	ロクロ	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	白色	1870~1880年
	81-54	101	関西系陶器	鉄絵大皿	(28.7)	7.1	10.6	—	—	ロクロ	施釉 外底は無釉	施釉 内底に麦と鳥	良好	緻密	灰白-丸	19世紀
	81-55	45	磁器	型紙刷皿	(12.0)	3.3	8.0	—	—	ロクロ	施釉:透明 高台縁は波状	施釉:透明	良好	緻密	白色	1870~1880年
	81-56	28	磁器	型紙刷皿	10.6	2.0	6.0	—	—	ロクロ	施釉:透明	施釉:透明 内底に鳥2羽・松・竹・菊	良好	緻密	白色	1870~1880年
	81-57	46	磁器	型紙刷皿	14.2	3.8	8.8	—	—	ロクロ	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	白色	1870~1880年
	82-58	32	磁器	型紙刷皿	(18.2)	5.2+	—	—	—	ロクロ	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	白色	1870~1880年
	82-59	36	磁器	皿	13.0	2.6	7.8	—	—	ロクロ	施釉:透明	施釉:透明 文様:雷文・花文	良好	緻密	灰白色	
	82-60	35	磁器	皿	10.6	1.8	6.6	—	—	ロクロ	施釉	施釉	良好	緻密	黄緑色	
	82-61	53	肥前磁器	鉢	(20.0)	5.9+	—	—	—	ロクロ	施釉:透明	施釉:透明 文様:草花 一重園縁	良好	緻密	白色	
	82-62	52	肥前磁器	八角形鉢	(16.6)	7.0	7.4	—	—	ロクロ	施釉:透明 底部は蛇/目高台	施釉:透明	良好	緻密	白色	
	82-63	82	関西系陶器	蓋	(8.2)	2.9	6.0	—	—	ロクロ	施釉	無釉	良好	緻密	黄褐色	19世紀
	82-64	66	関西系陶器	蓋	(5.0)	1.6+	1.0	—	—	ロクロ	施釉(鉄釉)	回転糸切り	良好	緻密	黒色	19世紀
	82-65	50	関西系陶器	土瓶	7.2	11.6	(7.6)	—	—	ロクロ	施釉 肩部上	施釉 口縁近く	良好	緻密	茶褐色	胴部最大径(17.8)
	82-66	176	瓦質土器	蓋	11.0	3.0	8.7	—	—	ロクロ	取ってはりつけ型押し文様	ナデ	良好	緻密	暗灰色	
	82-67	48	磁器	土瓶	(7.4)	7.6	6.8	—	—	ロクロ	施釉 底部は無釉	口縁部施釉	良好	緻密	茶色	
	83-68	155	肥前磁器	鉢	(14.4)	4.1	8.6	—	—	ロクロ	施釉 底部は蛇/目高台	施釉	良好	緻密	灰白色	
	83-69	97	唐津系陶器	仏飯器	(6.2)	5.2	3.4	—	—	ロクロ	施釉:透明 底部は無釉	施釉:透明	良好	緻密	暗赤褐色	18世紀後半~19世紀
	83-70	159	関西系陶器	鉢(片口?)	—	10.4+	(9.8)	—	—	ロクロ	施釉 高台内は無釉 刷毛目文	施釉 刷毛目文	良好	緻密	暗茶褐色	
	83-71	91	陶器雪平	土瓶	(10.8)	13.5	(8.4)	—	—	ロクロ	口縁から肩部のみ施釉	口縁部付近に鉄釉	良好	緻密	黒褐色	19世紀
	83-72	90	関西系陶器	土瓶	(18.6)	10.0	(8.2)	—	—	ロクロ	口縁から肩部半ばまで施釉	口縁部以外に施釉	良好	緻密	茶褐色	19世紀
	83-73	92	陶器	土瓶	(6.4)	4.0+	—	—	—	ロクロ	施釉 肩部に回転状ヘラ痕	施釉 肩部の一部は無釉	良好	緻密	灰白-丸	19世紀
	83-74	54	瓦質土器	急須の取っ手	奥行き	—	—	—	—	ロクロ	施釉	無釉	良好	緻密	暗茶褐色	
	83-75	60	瓦質土器	羽釜	7.0	9.0+	—	—	—	ロクロ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	緻密	黒灰色	18~19世紀
	83-76	55	瓦質土器	火鉢	(10.8)	6.0+	—	—	—	ロクロ	ヨコナデ、ナデ 脚部に穿孔あり	ナデ	良好	緻密	暗灰褐色	19世紀
	83-77	61	瓦質土器	焜炉の脚	頸部(4.9+	(16.4)	—	—	ロクロ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	緻密	暗灰褐色	19世紀
	83-78	56	瓦質土器	火鉢	2.0	7.3+	(28.4)	—	—	ロクロ	ヨコナデ、指圧痕	丁寧なナデ	良好	緻密	暗灰褐色	19世紀
	84-79	57	瓦質土器	火鉢	4)	7.0+	—	—	—	ロクロ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	緻密	暗灰色	19世紀 84-80と同一個体であろう
	84-80	58	瓦質土器	火鉢	—	3.6+	(17.8)	—	—	ロクロ	ヨコナデ	丁寧なナデ	良好	緻密	暗灰色	19世紀 84-79と同一個体であろう
	84-81	59	堺産陶器	火鉢	—	5.1+	—	—	—	ロクロ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	緻密	暗灰色	19世紀
	84-82	62	備前焼	搦鉢	(36.4)	12.3	(15.8)	—	—	ロクロ	ヨコナデ、底部板状圧痕	ヨコナデ、カキメ 底部ナデ後格子状スリム	良好	緻密	橙褐色	18世紀
	84-83	125	堺産陶器	搦鉢	—	6.4+	(9.8)	—	—	ロクロ	ヨコナデ	細かいカキメ	良好	緻密	石蒸白色 粘土、黒色 粘土	にみ赤釉
	84-84	63	肥前磁器	搦鉢	(22.8)	6.5+	(13.4)	—	—	ロクロ	ヨコナデ	ヨコナデ後カキメ	良好	緻密	暗茶褐色	19~20世紀
85-85	166	肥前磁器	鉢	(32.2)	12.5+	(20.4)	—	—	タタキ	ヨコナデ後格子状タタキ	格子状タタキ 底部放射線状のタタキ	良好	緻密	灰褐色	土灰釉	
85-86	164	堺産土器	搦鉢	—	10.8+	—	—	—	ロクロ	ヨコナデ	ヨコナデ後縦方向カキメ	良好	砂粒多い	黒褐色	19世紀	
85-87	153	青磁	焼塩壺の蓋	—	1.7	(7.8)	—	—	手づく	丁寧なナデ	布目痕	良好	緻密	明橙色		
虎口周辺部表採	86-1	132	青磁	碗	—	3.2+	(4.8)	—	—	ね	施釉:緑釉、底部と高台の外側まで無釉	施釉:緑釉	良好	茶色、白色 粘土、黒色 粘土	淡緑灰色	国内産青磁?龍泉窯?
	86-2	114	磁器	碗	(33.6)	3.5+	(4.8)	—	—	ロクロ	施釉:緑釉、底部、高台内は無釉	施釉	良好	緻密	灰白-丸	国内産青磁?龍泉窯?
	86-3	113	肥前磁器	碗	(8.2)	3.7+	(4.2)	—	—	ロクロ	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	淡灰色	内外に貫入あり
	86-4	112	肥前磁器	染付碗	—	3.5+	—	—	—	ロクロ	施釉:透明 染付:コニヤク印判文様、角ノ井・菊花	施釉:透明	良好	緻密	白色	1690~1740年
	86-5	117	磁器	染付碗	—	5.0	(3.4)	—	—	ロクロ	施釉:透明 文様:雪輪・梅樹	施釉:透明	良好	緻密	灰白色	18世紀後半
	86-6	115	肥前磁器	碗	—	5.2	(4.6)	—	—	ロクロ	施釉:透明 染付:コニヤク印判文様	施釉:透明	良好	緻密	灰白色	18世紀前半~半ば

第7表 近世遺物観察表4

遺構番号	挿図番号	実測番号	種類	器種	法量 (cm) ()は復元					成形	調整及び装飾		焼成	胎土(石材)	色調	備考	
					口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径	重量(g)		外面	内面					
虎口周辺部表採	86-7	55	肥前磁器	染付端反	(9.6)	6.5	4.2	—	—	ロクロ	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	青白色	19世紀	
	86-8	133	陶器	碗	—	2.3+	(7.6)	—	—	ロクロ	施釉:緑灰釉 胴部下に入らぬきで一束の沈線がある	施釉	良好	緻密	灰白-7色	内底に胎土目が2つ確認できる	
	86-9	120	磁器	染付小坏	(12.2)	3.5	4.6	—	—	ロクロ	施釉:透明	施釉:透明 内底:蛇/目に施釉	良好	緻密	灰白色		
	86-10	124	磁器	染付端反	(10.4)	5.6	3.6	—	—	ロクロ	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	淡灰色	19世紀前半	
	86-11	136	陶器	碗	—	3.4+	(5.8)	—	—	ロクロ	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	灰黄色 明緑灰色		
	86-12	121	白磁	小坏	(11.2)	2.7	4.0	—	—	ロクロ	施釉 胴部下は無釉	施釉 底部は変形の蛇/目。	良好	緻密	白色		
	86-13	131	磁器	染付猪口	(6.8)	5.2+	3.1	—	—	ロクロ	施釉:透明 高台登み付けは無釉 文様:笹・竹	施釉:透明	良好	緻密	白色		
	86-14	130	肥前磁器	染付瓶	(6.0)	10.9+	—	—	—	ロクロ	施釉:透明 文様:つる草・芭	施釉:透明	良好	緻密	白色	18世紀	
	86-15	116	磁器	染付徳利	—	9.9+	(6.2)	—	—	ロクロ	施釉:透明 底部:無釉 文様:菱形と菊花	無釉	良好	緻密	白色		
	86-16	118	磁器	染付蓋	—	2.5	(7.0)	—	—	ロクロ	施釉:透明 文様:山・海・帆立船	施釉:透明 口縁部付近は無釉	良好	緻密	白色		
	86-17	123	陶器	小瓶	—	3.2+	(3.0)	—	—	ロクロ	施釉	無釉。釉の流れ込みが一部あり。	良好	緻密	灰桃色		
	87-18	135	陶器	皿	(24.0)	2.3	(15.4)	—	—	ロクロ	施釉:透明 高台登み付けは無釉	施釉:透明。底部に「JAPAN」の文字	良好	緻密	白色		
	87-19	128	備前焼	甕/福鉢口縁	—	5.0+	—	—	—	ロクロ	ナデ	ナデ、指汗痕	良好	緻密	灰赤色 灰茶色		
	87-20	119	備前焼	擂鉢	(26.4)	9.2+	—	—	—	ロクロ	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ後カキメ(8~10単位)	良好	緻密	暗茶褐色		
	87-21	137	土師質土器	甕	—	4.3+	(19.8)	—	—	ロクロ	ナデ	ナデ、剥離激しい	良好	緻密	明茶褐色		
	87-22	134	唐津系陶器	甕	(30.0)	8.7+	—	—	—	ロクロ	施釉:鉄釉 ナデ	施釉:無釉 ナデ	良好	緻密	灰赤色 淡黄色	18世紀~19世紀 ハンズ一襲	
	北東斜面表採	88-1	85	肥前陶器	皿	—	1.6+	6.0	—	—	ロクロ		底部に砂目止め	良好	緻密	淡黄色	1600~1630 内野山窯産
		88-2	74	肥前磁器	染付碗	(9.8)	5.0	3.8	—	—	ロクロ	施釉:透明 文様:二重網目文 底には菊花文	施釉:透明 文様:二重網目文	良好	緻密	淡灰白色	18世紀前半~半ば
		88-3	60	唐津系陶器	碗	—	2.8+	4.8	—	—	ロクロ	施釉 刷毛目	施釉 刷毛目	良好	緻密	淡茶色	18世紀前半
		88-4	62	肥前陶器	皿	—	2.1+	4.6	—	—	ロクロ	施釉 高台の外と底部は無釉	施釉。底は蛇/目釉はき。	良好	緻密	青緑色	18世紀前半 内野山窯産
		88-5	77	肥前磁器	猪口	7.0	6.0	4.4	—	—	ロクロ	施釉:透明	施釉:透明	良好	緻密	白色	17世紀末~18世紀
		88-6	75	肥前磁器	染付碗	(9.6)	5.1	3.6	—	—	ロクロ	施釉:透明 文様:梅樹など	施釉:透明	良好	緻密	灰白色	18世紀後半
88-7		83	肥前磁器	染付碗	(9.2)	4.5	3.0	—	—	ロクロ	施釉:透明 高台登み付けは無釉 文様:梅樹ほか	施釉:透明	良好	緻密	白色	18世紀後半	
88-8		73	肥前磁器	染付碗	(9.2)	5.1	4.1	—	—	ロクロ	施釉:透明 文様:二重網目文	施釉:透明	良好	緻密	淡灰白色	18世紀後半	
88-9		82	肥前磁器	染付筒形碗	(7.2)	5.1	4.0	—	—	ロクロ	施釉:透明 文様:竹?	施釉:透明 底部に「五弁花」	良好	緻密	灰白色	18世紀後半	
88-10		76	肥前磁器	染付碗	10.4	4.8	3.8	—	—	ロクロ	施釉:透明 文様:梅樹・雪輪 底部:「天明年製」筋れ銘	施釉:透明	良好	緻密	灰白色	18世紀後半	
88-11		78	肥前磁器	染付広東碗	11.6	7.1	6.3	—	—	ロクロ	施釉:透明 花文	施釉:透明 底部に「寿」字	良好	緻密	灰白色	1780~1810年	
88-12		79	肥前磁器	染付広東碗	12.0	6.7	6.2	—	—	ロクロ	施釉:透明	施釉:透明 底に「寿」字	良好	緻密	灰白色	1780~1810年	
88-13		80	肥前磁器	染付広東碗	12.0	7.0	6.4	—	—	ロクロ	施釉:透明 花文	施釉:透明 底部に「寿」字	良好	緻密	灰白色	1780~1810年	
88-14		61	肥前磁器	染付皿	9.6	2.9	3.7	—	—	ロクロ	施釉:透明	施釉:透明 文様:二重格子目文 底部:蛇/目釉はき	良好	緻密	灰白色	1780~1860年 波佐見系	
88-15		81	陶器	碗	(10.6)	6.9	4.4	—	—	ロクロ	施釉:透明 高台の外と底部は無釉	施釉:透明	良好	緻密	白色		
88-16		84	陶胎	染付碗	(12.2)	7.8	4.8	—	—	ロクロ	施釉:透明 文様:唐草?	施釉:透明	良好	緻密	灰白色	18世紀前半~半ば	
88-17		63	陶器行平	蓋	(15.6)	3.6	つまみ(4.2)	—	—	ロクロ	施釉:部分的	施釉	良好	緻密	外:黄褐色 内:灰白色	19世紀	
88-18		166	銅製品	銭貨						ロクロ	「寛永通宝」	「文」	良好	緻密			
堀切北側表採	89-1	56	陶器	染付小碗	(7.2)	3.5	2.4	—	—	ロクロ	施釉:透明 文様:コンニャク印判	施釉:透明	良好	緻密	白灰色	1690~1740年	
	89-2	59	肥前磁器	染付広東碗	(11.2)	6.5	6.2	—	—	ロクロ	施釉:透明 文様:松葉?	施釉:透明	良好	緻密	灰白色	1780~1820年	
	89-3	58	肥前磁器	染付筒形碗	(9.0)	4.8	3.0	—	—	ロクロ	施釉:透明 文様:矢筈	施釉:透明	良好	緻密	白色	18世紀後半	
	89-4	57	肥前磁器	皿	10.2	2.4	6.0	—	—	ロクロ型打	施釉:透明	施釉:透明 文様:山・家・鳥など	良好	緻密	白色	1780~1860年	
										ロクロ			良好	緻密			

第4章 考察

上門手遺跡は、古代から中世・近世におよぶ遺跡である。なかでも中世を中心としており、特に戦国期の16世紀代には、その立地と遺構から館城(常時居住する防御的な館)であると判断してよいだろう。以下、中世の遺構・遺物を中心に詳細を述べる。

「掘立柱建物跡について」

掘立柱建物跡は全部で20棟検出した。北東斜面に4棟、丘陵平坦部(曲輪部)に16棟である。

北東斜面の遺構群は、出土遺物から古代と中世前半期のものであることがわかった。ただ掘立柱建物跡の柱穴からは時期を特定できる良好な遺物が出土しなかったため、その時期に関しては出土遺物からは積極的に決められない。北東斜面には、建物跡が4棟のほかに、柱穴列が確認でき、柱穴からは良好な遺物が得られた。その遺物が出土している柱穴列から考えると、まず1・2号掘立柱建物跡はその位置と軸、周辺の出土遺物、またその周囲の埋土色から古代の可能性が高いと考える。3・4号掘立柱建物跡に関しては、ほぼ同位置、同規模で重複しているため、3・4号掘立柱建物跡については、時期差のない建て替えが行われたとき推定できる。そしてこれに関連すると思われる柱穴列の出土遺物より、中世前半期の可能性が高いだろう。さらに3・4号掘立柱建物跡の周辺に土壇墓と思われるものが見つかっており(1号土壇)、3・4号建物と関連がある可能性もある。

曲輪1の掘立柱建物跡は16棟確認できた。掘立柱建物跡は桁行をみると、北西軸と東西軸、南北軸で分けられ、それぞれの主軸により時期差があると考えられる。その切り合い関係からみると、北西軸が一番古く、南北軸、東西軸の順に新しい。出土遺物は建物跡の柱穴からは時期を特定できるような遺物は少量しか出土していない。しかし周辺の柱穴からの出土遺物と遺構の切り合いの状況からすると、少なくとも掘立柱建物跡群は15世紀後葉～16世紀葉の範疇で考えられる。また5号掘立柱建物跡は中心部の北西に位置し、曲輪1の中では広い身舎面積をもつ。柱穴列3も掘立柱建物跡の痕跡と考えた時、同じ場所に時期差のある広い身舎面積の建物がくるのは、他の建物とは違う性格で、それぞれの時期のなかで主体となる建物であろうか。

曲輪1の建物跡は北西軸、南北軸、東西軸で変遷し、東西軸に限っては重複する建物跡が数棟あるため、掘立柱建物跡は最低3～4時期で変遷しそうである。ただ1号溝などと平行及び直交関係になるような建物跡は検出できなかった。また15・16号建物跡に関しては曲輪1の東に位置し、眺望、建物規模などから櫓跡などの施設であったと考えることもできよう。

「土坑」について

上門手遺跡では、まず墓を3基(2基は近世墓)検出した。北東斜面にある1号土坑は、人骨や埋葬品などは確認できなかったが、その形状と出土遺物に鉄釘が数本出土したことから、土壇墓の可能性が高いと判断した。その時期も周辺に3・4号掘立柱建物跡の存在や埋土の関係からすると中世前半の所産である可能性が高い。曲輪2で検出できた10号土坑は、京都系土師器を3枚確認し、そのうち2枚は正位置で重ねていた。京都系土師器は大友氏との関わりの中で出現したことも想定され、それらは儀礼などで用いとされる。そうであれば、10号土坑は祭祀的な意味合いをもつものと思われる。また曲輪1に位置する2・3・4号土坑はほぼ同じ埋土であり、それぞれの出土遺物もほぼ同時期であることから、連続する土坑であると考えられる。

「地下式土坑」について

地下式土坑は、3基を確認した。1号地下式土坑は、その入り口を凝灰岩の石で閉塞した状況で検出でき、残存状況は非常に良好であった。土坑内の出土遺物は龍泉窯青磁碗(上田分類B・C類)、中国産染付け皿(小野分類B1群)、備前焼甕(乗岡編年4a～5b期)で、他に石臼などもみつかった。人骨は出土していない。それら遺物から15世紀後半～16世紀前半の所産であろう。2号地下式土坑は、その天井部が崩れており、出土遺物もほとんどなかった。ただ出土遺物のうち1点は、すずもしくは銅製の約1cmほどの円形をした薄いメダル状のものである。詳細は成分分析をしないとわからないが、分銅もしくはメダイなどの可能性もあるだろう。3号地下式土坑は、1号溝に切られる状況で検出した。その中から、白磁皿(森田分類E群)が1点出土した。

これら3基の地下式土坑は遺跡内、特に曲輪1の南東部に構築されている。1号地下式土坑と3号地下式土坑に出土遺物の時期差がありそうで、1号地下式土坑の出土遺物は曲輪1の出土遺物の中で最も古いものである。これは上門手遺跡が中世後半の館城としての機能をしている大半は、地下式土坑は造られつづけ、またその設置場所もあまり変わらない曲輪1の南東部を意識していたと考えられる。地下式土坑自体の意味が何だったのかが最大の課題であろうが、上門手遺跡の地下式土坑からは、人骨は出土しなかった。そのため土壇墓の可能性は低く、宗教的施設や倉庫的なものであろうか。ただ有力者の館城内に構築するという地下式土坑の意義が今後の課題であろう。

「溝」について

溝は曲輪1で2条、曲輪2で1条、虎口で2条を確認した。ただ、曲輪2と虎口のものは、いずれも近世以後のものである。曲輪1に位置する1・2号溝は、まず1号溝は曲輪1を南北に縦断し、2号溝は1号溝の東を東西に延びる。1・2号溝ともその位置関係から曲輪1を区画する性格の溝であったことが予想される。1号溝からは良好な出土遺物がほとんどなかった。しかし、1号溝に切られる3号地下式土坑の出土遺物に白磁菊花皿があり、16世紀後葉の所産であることは間違いない。となると1号溝は3号地下式土坑よりも新しいもので、埋土色からすると、中世の範疇でおさめてよいものと思われる。そうした場合、1号溝は16世紀後葉～末葉の時期で考えられる。2号溝は部分的に長く人頭大ほどの被熱した礫が集中して出土した。その礫の中には多くの遺物も混ざっていた。出土遺物から2号溝の埋没時期は16世紀後半と考えるのも良いだろう。ただ1・2号溝が同時期に存在したかどうかは不明である。1号溝から良好な遺物が出土しなかったため、明確な時期を与えられないが、その規模、埋土、また1・2号溝がほぼ直交することから同時期の所産と考えて差し支えないものであると思われる。

「土塁について」

上門手遺跡の曲輪1、曲輪2・3の台地上はほぼ全周にわたって、土塁が構築されている。特に曲輪1の東から北に巡る土塁(a-a'、b-b'地点)と虎口の土塁(m-m'、n-n'地点)は構築方法が他の土塁とは相違する。その土塁は、構築の際に掘り込み地業を伴うもので、粘土の堆積もやや斜め積みにする。さらにその上層には軟質な凝灰岩を他の粘土と交互に斜め堆積させる部分が認められる。軟質の凝灰岩を交互堆積させるのは、時期差があるのかもしれない。これら土塁は、他の土塁とは構築技法が全く相違するもので、土塁全体で見ると最低でも2～3時期の土塁構築の時期差があるものであろう。土塁内部から良好な遺物は出土していないが、簡易的な土塁と掘り込み地業を伴う土塁よりは後者のほうが後出するものであると考える。1期が掘り込み地業を伴わない簡略的な土塁、2～3期が掘り込み地業を伴い、さらに軟質凝灰岩の斜め堆積を用いる。また曲輪1東側の南北に延びる土塁の東端が台地の落ち際との間を約5mほど残して終息している。これは曲輪1南東部にある曲輪への通路のためであろう。

「虎口」について

虎口は、遺跡の南側で検出できた。調査により遺跡南側の同一箇所には2時期の構造の違うものがあることがわかった。1期は、土塁構築前もしくは土塁(上記の土塁1期)の構築時に存在する。南東方向に延びる溝を構築し(SD6)、調査区外に至るが、そのまま細尾根に繋がっているようで、細尾根を利用し、溝を細屋根と結ぶことで、単純な坂虎口を形成するものである。また2期は、1期の溝を埋め、虎口周辺の土塁構築とともに進入路を複雑化している。さらに遺跡の南には東西方向に延びる谷部が存在し、その谷部から北側に切り通しを設けている。調査により虎口までの城道も検出され、2期の虎口構造は谷部の切り通しから虎口まで最低4回は折れながら進入するというものである。ただ、虎口から直接曲輪1に入るのか、曲輪2を経由するのかが不明であるが、6号溝を考えた時、虎口から西に曲がり、曲輪2に入り、曲輪1につながるものと思われる。またさらに、遺跡北側の堀切からの通路を想定でき、曲輪2の西側に堀切から登れる通路が確認できている。しかし、その通路から曲輪2への進入口と思われる箇所が現状において土塁で埋められていることが調査でわかり、土塁構築以前の大手門などの出入口であった可能性が高い。

「遺物」について

上門手遺跡内出土の中世における遺物は、パンケースで3箱くらいである。中でも貿易陶磁器と京都系土師器の組成が高い。在地系(ロクロ)の土師器は極少量である。出土した遺物は1号地下

式土坑、2・3・4号土坑、10号土坑、柱穴が割合高い。また主郭部のピット群を覆うようにして検出できた焼土が集中する多くの部分からは堀立柱建物跡の壁材と思われる壁土が多く出土した。全体の出土遺物からは15世紀後葉～16世紀末葉までの年代にあてはまるものがほとんどである。



第90図 上門手遺跡中世末段階想定復元図 (1/1000)

以上述べてきた遺構を簡潔に図にまとめてみる。図の中で上門手遺跡の時期を4つに大別した。Ⅰ期は古代、Ⅱ期は中世前半期、Ⅲ期は15世紀後葉～16世紀末葉まで。特にⅢ期は遺構の変遷具合から最低2時間ほどに細分が可能であると思われる。Ⅳ期は近世以降である。

Ⅰ期は北東斜面で、検出した柱穴群にあてはまるものがある。柱穴の出土遺物から9世紀代に帰属できるものと思われ、1・2号堀立柱建物跡はそれら柱穴とほぼ同一の埋土状況から古代に帰属できるものと思われる。

Ⅱ期も北東斜面で検出できた。ほぼⅠ期のものと重複する状況である。3・4号堀立柱建物跡や土壙墓と思われる1号土壙は、青磁鎬蓮弁文碗を包含する柱穴の埋土と類似し、この時期(13世紀代)の所産と考えられる。

Ⅲ期は中世後半(15世紀後葉～16世紀末葉)に展開し、上門手遺跡が館城として機能している

時期である。堀立柱建物跡は切り合いや建物軸などから大きく3時期に区別できた。古いものから北東軸→南北軸→東西軸となる。土塁は、まず土塁なしの時期（1期）が存在するものと考えられる。この時の城の周囲は切岸を主体に守っていたと思われる。次に簡略的な土塁の構築（2期）が行われ、さらに部分的に（虎口部と曲輪1周辺）掘り込み地業を伴う大規模な土塁の改修・構築（3期）が行われる。掘り込み地業を伴う土塁には、上層に軟質凝灰岩と粘土を交互に斜め積みする技法がとられている。虎口は、まず遺跡南側に2期の変遷が辿れ、また曲輪2の西側に北側の堀切から続く通路が確認できた。しかし、堀切を使用する通路は簡略的な土塁構築とともに、機能は停止したものである（土層観察より）。となれば、土塁がない時期は、堀切側の通路かもしくは、南側に溝を通路として屋根から登らせる通路の2つが考えられ、同時存在も考えられる。簡略的な土塁構築後は、南側の虎口を利用し、溝を伴う通路を利用していたか、もしくは複雑に折り曲げる通路を利用したものとする。そして、掘り込み地業を伴う土塁構築後は通路を複数回折り曲げる虎口を利用していただろう。曲輪は、近世以後の改変が大きく、曲輪として構造を追えにくい。調査から大きく2つの曲輪の存在した可能性は高い。Ⅲ期を通して、そのレベル差から主郭となる曲輪を東に置き（曲輪1）、その副郭となる曲輪2を西側に置いたものと考えられる。それぞれ2つの曲輪は（長）方形を呈していたと考えられる。

V期は近世に入り、東側で土墳墓が構築されたり、土坑などが見られる。また昭和前半まで曲輪2に家があったらしく、現代まで人間の生活痕跡が伺える状況である。

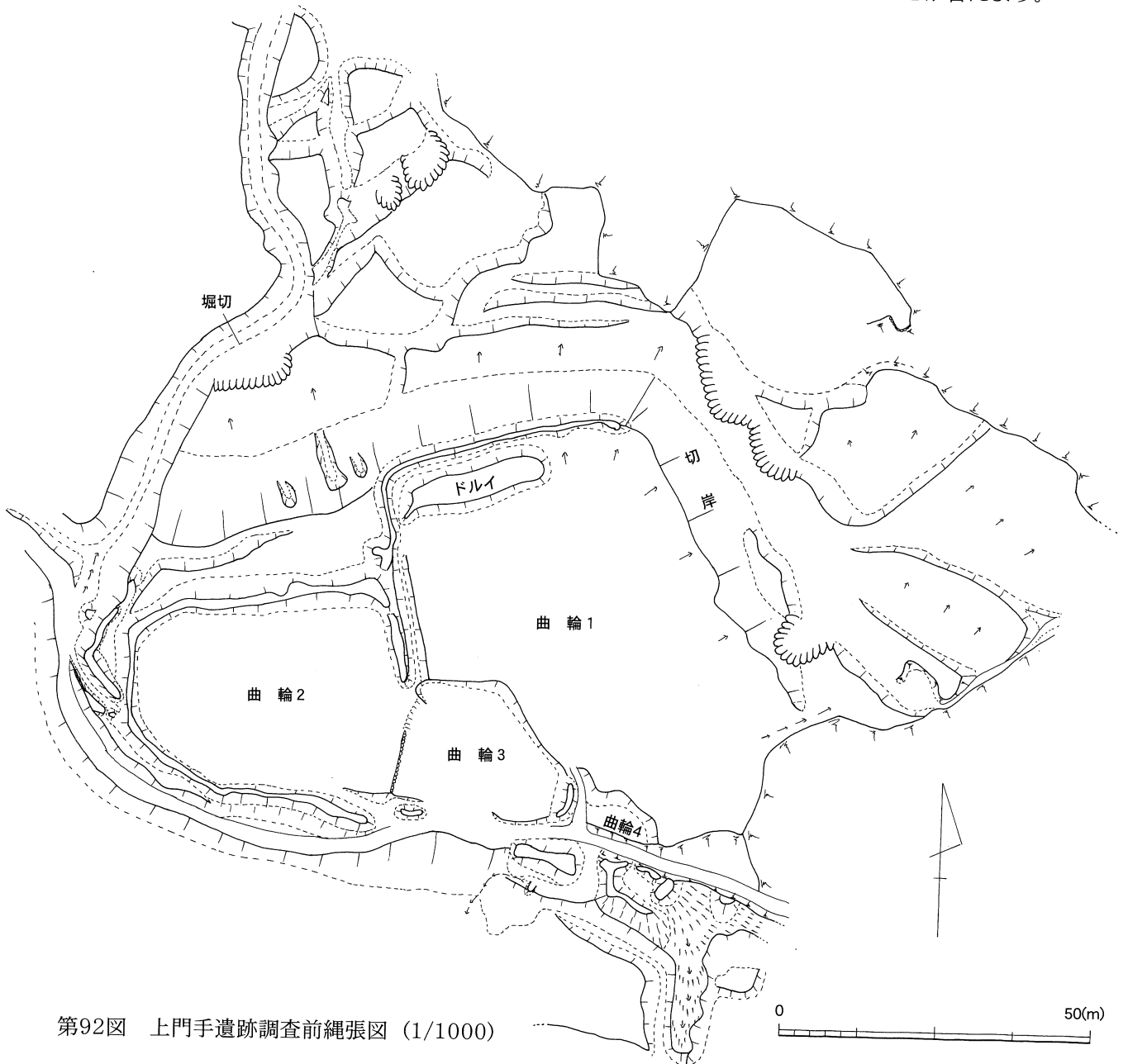
	堀立柱建物	土 塁	土坑・地下式土坑など	虎 口	備 考
I	↑ ↓				北東斜面において 古代の遺物出土（9c）。
II	↑ ↓				北東斜面において 中世前半期（13c～14c） の遺物出土。
III	15c末～16c初から館城としての機能を開始				
III a			1号地下式土坑	堀切からの通路	<ul style="list-style-type: none"> 堀立柱建物は大きく3期に渡る変遷がたどれる。 土塁は虎口と連動する。当初は堀切からの通路を考えた場合、土塁がない状況(切岸のみで守る状況)が伺える。次に簡易的に土塁を全周もしくは部分的に巡らす。この時、堀切からの通路は土塁により遮断され、機能を失う虎口は南側に溝(SD6)を利用したものが築かれたと考えられる。掘り込み地業を伴う土塁構築とともに虎口は複雑に折り曲げる構造となる。
III b	北西軸(桁行) ↑ ↓	簡単な土塁	2・3号地下式土坑	6号溝利用の虎口	
III c	南北軸 ↑ ↓ 東西軸 ↑ ↓	掘り込み・斜め積み土塁	3号地下式土坑 10号土坑	何度も折り曲げる虎口	
16c末に、館城としての機能を消失					
IV			1号近世墓 2号近世墓 6号～10号土坑など 3号溝・5号溝		遺構よりも表採遺物が 多数をしめる。
17c後 ↓ 現在					

→1587年か？
(島津軍豊後侵攻)

第91図 上門手遺跡遺構変遷図

最後に現状の縄張図と発掘調査後の遺構図との相違について触れてみる。

現在大分県では、国庫補助事業に伴う中世城館調査が行われており、平成15年度をもって、報告が完了する予定である。大分県内で、周知の城館は569にのぼり、縄張図化できているものは約80ある。上門手遺跡においても調査前（表土剥ぎ前）に作成した（第92図）。発掘調査から得られた情報から復原した上門手遺跡の状況（第90図）とはかなり相違する点が多かった。1点目は館城の基礎となる平場の構成である。調査前は大きく3～4つの曲輪が存在していたと考えられたが、調査後近世の改変によるものが多く、館城機能段階は大きく2つの曲輪であったのではないだろうかということ。2点目は虎口で、調査前には切通しと開口部（虎口）は繋がらなかった個所も、発掘調査により、それを結ぶ城道ができた。3点は土塁で、曲輪1の東側にある土塁は調査前は、近世以後の改変によりそのほとんどが削平を受けていたため、土塁が曲輪1東側まで延びていたことがわからなかった。しかし調査により、掘り込み地業を伴う大規模な土塁が確認できたことは大きい。また曲輪1北側の土塁についても、調査前はその土塁の北側の溝状の窪みを中世の時代のものと認識したが、調査により近世の攪乱であることがわかり、土塁は大規模なもので北側から東側に連続するものであると確認できた。まだまだ相違する細かいところはたくさんあるが、現地表面観察の縄張図と発掘調査のデータを取り入れたものとそのギャップの差はこの上門手遺跡では大きく出たことになる。よって、現地表面観察の縄張図はよほど慎重に行わなければならないことが言えよう。



第92図 上門手遺跡調査前縄張図 (1/1000)

〔上門手遺跡の位置付け〕

上門手遺跡の館城としての機能をもつ社会背景であるが、当時の上門手遺跡の所在する井田郷に関する文献史料は多く残っているが、上門手遺跡（館城）を明確に示すような文献史料はないので、城館主体者を文献史料からは読み解けない。ただ、ルイス・フロイスの『日本史』（註1）には、井田郷に関する記述があり、簡略して述べると当時井田郷には豊後の中でも多くのキリシタンがいて、キリスト教会もあった。またその井田郷にはソウエキと呼ばれる高貴な家臣がいたとある。そのソウエキの妻は大友宗麟の実母の妹であったとされる。しかし、そのソウエキも1587年の島津氏の豊後侵攻により、城で守って戦ったが、敗れ、ソウエキは殺され、妻子も捕らえられ、城は焼かれたと記してある。具体的にはソウエキと上門手遺跡の関係は追求できない。ただ発掘調査の成果として、まず上門手遺跡の主郭部には多くの焼土が遺構検出面を覆う状況で検出され、その焼土には京都系土師器の3期（註2）や堀立柱建物跡に使用していたと推測される壁土などを包含するものであった。このことから上門手遺跡の館城としての機能の終焉は1587年の島津氏侵攻に少なからず関わりがあるものと思われる。また掘り込み地業を伴い、斜め積み堆積をす 體y壘の構築技法は、現段階では大友上原館跡（註3）や大友館跡（註4）に見られる土壘の構築技法と類似していることと出土遺物の組成が陶磁器類と京都系土師器がその多くを占めることから、上門手遺跡の築造主体者は大友氏と少なからず関連があったものと推測される。

また井田郷から大野川を挟んで東の三重郷には、有力者である森迫氏の館地があり、そこを以前調査している。その報告の中で（註5）、15世紀後半に森迫氏が井田郷と深い関わりがでてくることが、文献史料と石造物の金石文から指摘している。16世紀代を中心に井田郷の多くを森迫氏が関与していることも見逃せないだろう。いずれにしても、上門手遺跡の築造主体者像を明確にすることはできないが、16世紀代の井田郷に関与している有力者と上門手遺跡が関連があることは十分に想定できる。今後、更に周辺の城館の検討などを通して、中世・井田郷の権力構造などの解明を進めていく作業が必要となり、今後の課題である。

（註1）大分県教育委員会 2003「大分の中世城館第2集 文献史料編2」

渡辺澄夫編 1992「豊後国荘園公領史料集成」7上

（註2）塩地潤一 1999「九州出土の京都系土師器Ⅲ」『中近世土器の基礎研究』XIV 日本中世土器研究会

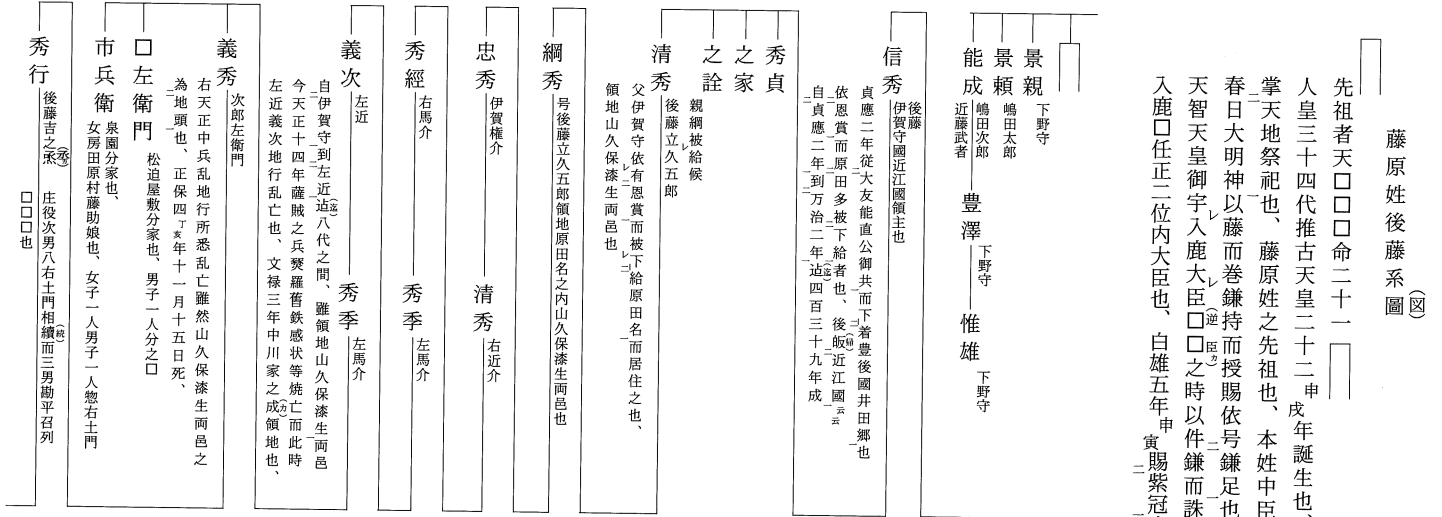
（註3）大分市教育委員会2000「上野大友館跡、下水道工事に伴う発掘調査報告書」

（註4）大分市教育委員会2000「大友館跡—発掘調査概報Ⅰ—」

（註5）三重町教育委員会1983「惣田遺跡」

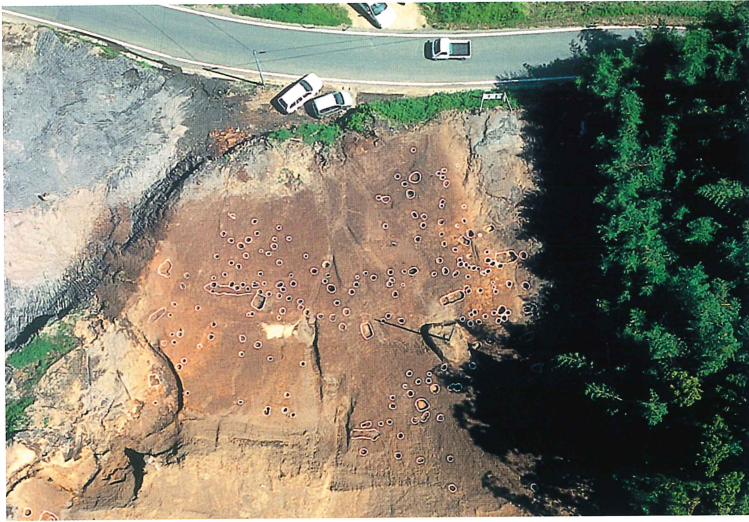
なお、発掘調査中や報告書作成の折に、遺構・遺物に関して県文化課小柳和宏氏・吉田 寛氏をはじめとする方々に多くのご教示をいただいた。あらためて感謝します。

また発掘調査中に、上門手遺跡のすぐ東側の集落の後藤家（後藤義博氏蔵）に近世に書かれた家系図が残されていた。それを活字化し、追記として載せておく。

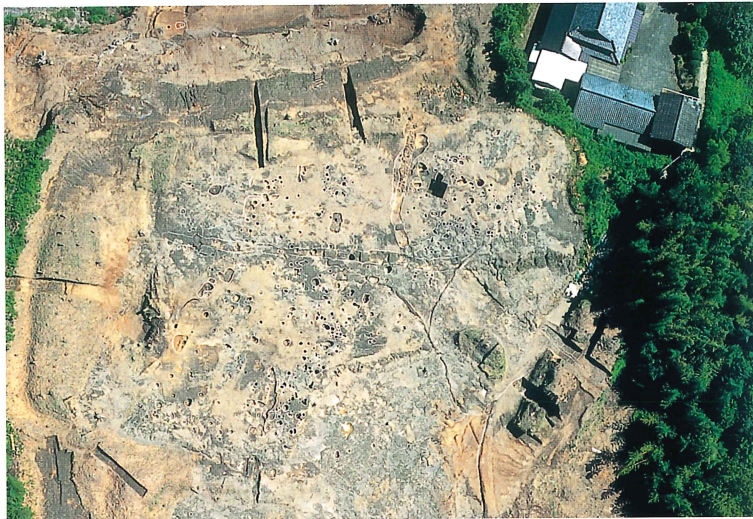


(活字化は大分市教育委員会・吉本明弘氏による)

写 真 图 版



北東斜面全景（真上）



曲輪1全景（真上）



曲輪2全景（真上）



虎口全景 (真上)



曲輪1 土塁 a - a' 地点土層 ①(西から)



曲輪1 土塁 a - a' 地点土層 ②(東から)



1号地下式土坑前壁遺物出土状況



1号地下式土坑前壁



虎口土塁 n - n' 地点土層 (北から)

写真図版 4



虎口土塁 m - m' 地点土層 (北から)



SK10出土状況 (北から)



上門手遺跡全景 (真上から)



調査前現況遠景①（北東から）



調査前現況遠景②（西から）



千歳村中心部を見る（曲輪1から）

写真図版6



北東斜面3・4号建物跡付近(東から)



SK1完掘状況(北から)



曲輪1調査前現況①(北西から)



曲輪 1 調査前現況 ②(南西から)

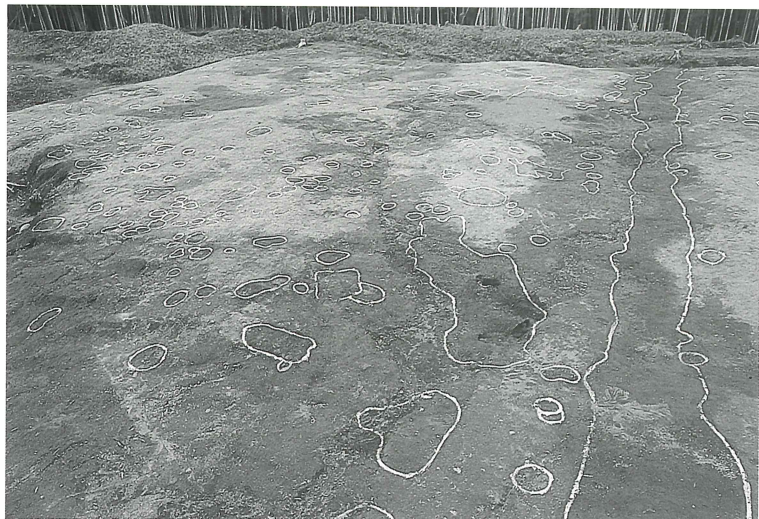


曲輪 1 調査前現況 ③(西から)



1号地下式土坑付近検出状況(南から)

写真図版 8



SD1付近検出状況(南から)



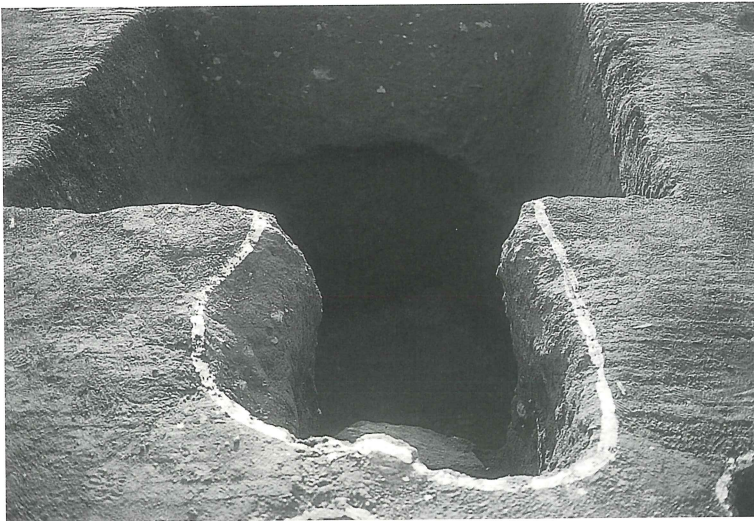
SD2付近検出状況(北から)



1号地下式土坑検出状況①



1号地下式土坑検出状況②



2号地下式土坑検出状況（東から）



SD 2 出土状況（北西から）



2・3・4号土坑検出状況①（西から）



2・3・4号土坑遺物出土状況②



曲輪1土塁 b-b' 地点土層（東から）



曲輪2 検出状況（西から）



曲輪2 北西部堀切からの通路①（南から）



曲輪2 北西部堀切からの通路②（北から）



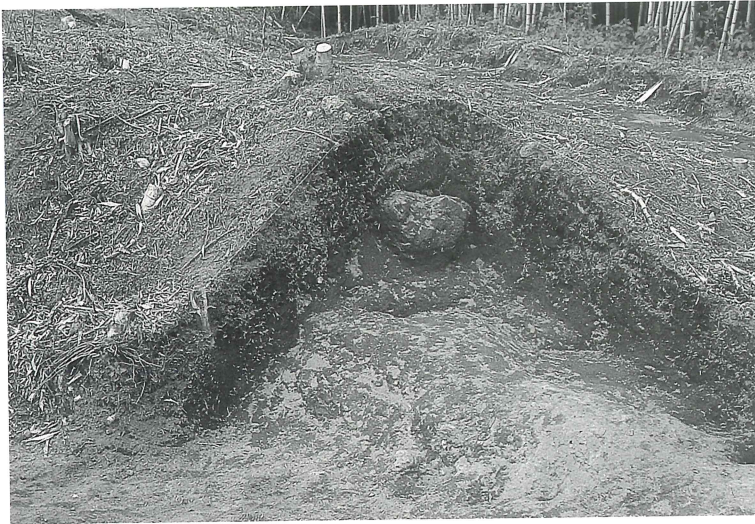
曲輪5土塁 g - g' 地点土層 (東から)



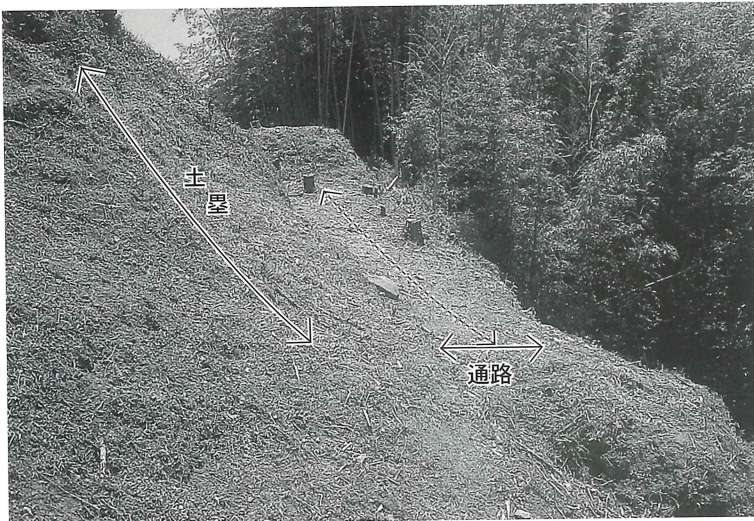
曲輪1・2・3検出状況 (南東から)



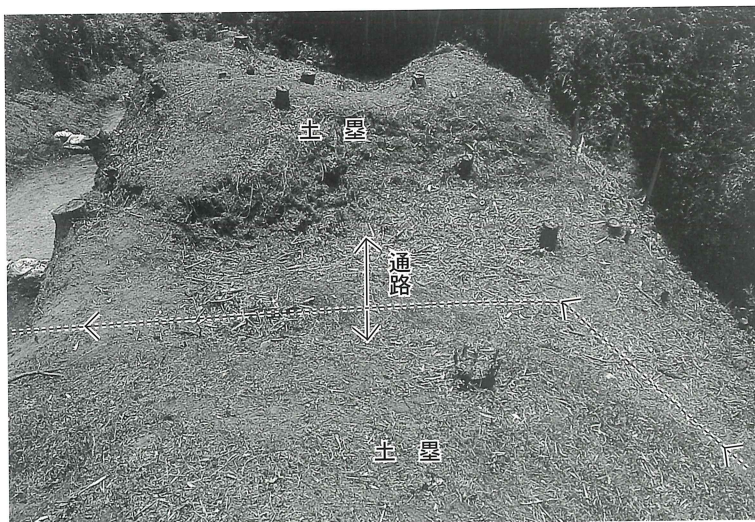
曲輪2土塁 f - f' 地点土層 (南から)



曲輪1土塁 d-d' 地点土層 (南から)



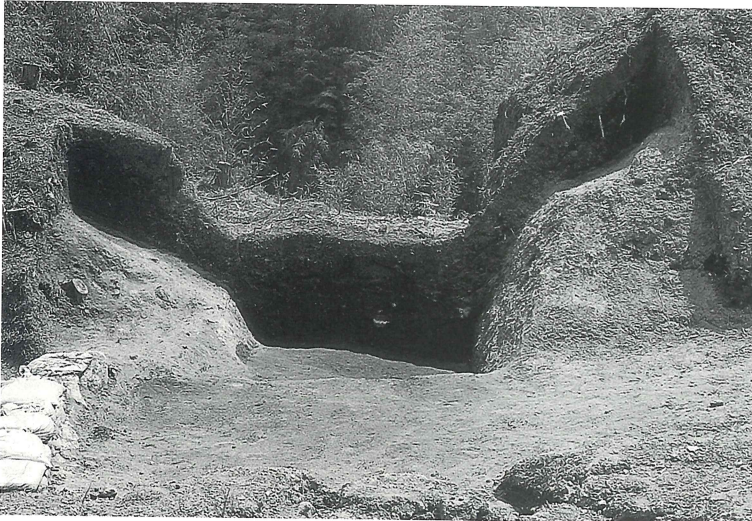
虎口登り道 (西から)



虎口部 ①



虎口② 曲輪4 (北から)



虎口土塁 c - c' 地点土層



虎口とSD5 検出状況 (北から)



虎口土塁 1-1' 地点土層 (南西から)



曲輪2 西側切岸状況 (南から)



堀切状況 (西から)



作業風景



2001.08.13 現地説明会風景 ①



2001.08.13 現地説明会風景 ②



焼土層中出土壁土



SD 2 出土遺物



1号地下式土坑内出土遺物



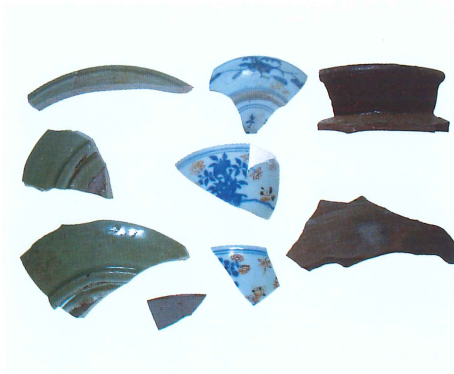
1号地下式土坑内出土遺物



1・2・3号地下式土坑出土遺物(表)



1・2・3号地下式土坑出土遺物(裏)



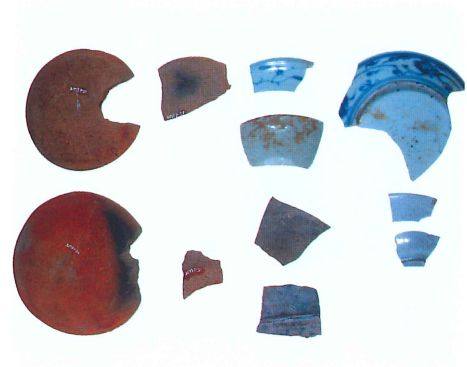
2・3・4号地下式土坑出土遺物(表)



2・3・4号地下式土坑出土遺物(裏)



曲輪1 柱穴出土遺物(表)



曲輪1 柱穴出土遺物(裏)



曲輪1・北東斜面表採遺物(表)



曲輪1・北東斜面表採遺物(裏)



SK3・5・10出土遺物



SK6出土遺物



SD3・5出土遺物



SK8・9出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	かもんでいせき							
書名	上門手遺跡							
副書名	県道三重新殿線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2							
シリーズ名	大分県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第172輯							
編著者名	五十川 雄也・高橋 信武							
編集機関	大分県教育委員会文化課文化財資料室							
所在地	大分市中判田1977							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
かもんでいせき 上門手遺跡	おおいたけんおおのぐん 大分県大野郡 ちとせむらおおあざしもやま 千歳村大字下山	46	新発見	33°19'56"	131°35'41"	2001.03 ～ 2001.10	10,000m ²	県道建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
上門手遺跡	包含層 集落 山城	縄文時代後期 古代末 16世紀	土坑墓・掘立 柱建物跡 山城遺構 地下式土坑	土師器 京都系土師器 国産陶磁器 青花 メダル？				

上門手遺跡

県道三重新殿線道路改良工事に伴う埋蔵
文化財発掘調査報告書

平成16年3月31日

発行 大分県教育委員会

印刷 (有)印刷 良栄堂